

附属学校国際教育推進委員会報告書（第9集）

～ 2017 年度～

附属学校群の国際教育の推進



2018 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに

附属学校群における国際教育研究活動の見直しを見つめて

副学長・理事、附属学校教育局教育長 宮本信也 3

附属学校群の国際教育の推進

－ 2020 東京オリンピック・パラリンピックが近づく中で－

国際教育推進委員会委員長 澤田 晋 4

2. 附属学校の国際教育 6

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 8

4. 各附属学校の国際教育活動

(1) 先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

(附属小学校) 12

(2) 2017 年度 国際教育事業について

(附属中学校) 17

(3) グローバル人材の育成を目指して

(附属高等学校) 22

(4) 2017 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

(附属駒場中・高等学校) 29

(5) (総合学科 + SGH + IB) × SDGs = APA ?

(附属坂戸高等学校) 38

(6) 国際的活動への積極性向上を交流相手の変容に繋げる

(附属視覚特別支援学校) 42

(7) 聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

(附属聴覚特別支援学校) 50

(8) 附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告

(附属大塚特別支援学校) 54

(9) 国際的視野を広げ、積極的に自己発信する桐が丘

(附属桐が丘特別支援学校) 60

(10) 附属久里浜特別支援学校の国際交流

(附属久里浜特別支援学校) 65

(11) JICA 研修「障害のある子どものための授業づくり」を終えて

(特別支援教育研究センター) 69

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

(1) 留学生との交流会	
(附属小学校)	75
(2) 附属中学校 イングリッシュルームの活用報告	
(附属中学校)	76
(3) 附属学校のイングリッシュルーム活動について	
(附属高等学校)	77
(4) English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援	
(附属駒場中・高等学校)	78
(5) 楽しい英語活動と SGH 校としての活動の両立を目指して 2017-2018	
(附属坂戸高等学校)	79
(6) 附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動	
(附属視覚特別支援学校)	80
(7) イングリッシュルーム活動	
(附属聴覚特別支援学校)	84
(8) 附属大塚特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動	
(附属大塚特別支援学校)	86
(9) 児童生徒の主体性を引き出すイングリッシュルーム	
(附属桐が丘特別支援学校)	87
イングリッシュルームの評価について	89
6. おわりに	
まとめに代えて	
附属学校国際教育推進委員会副委員長 小林美智子	93
(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況	94
報告書発行の記録	99
委員会名簿	100

1. はじめに

附属学校群における国際教育研究活動の見直しを見つめて

副学長・理事、附属学校教育局教育長 宮 本 信 也

附属学校群に関する第3期中期計画の中で、国際教育あるいはグローバル人材育成に関する重要業績評価指標（KPI、Key Performance Indicator）として、『SGH 対象校において、平成 33 年度までに海外での武者修行経験者を SGH 対象生徒の 80% 以上に』（中期計画 12）と『平成 30 年度までにグローバルな素養を育てるカリキュラムを開発』（中期計画 49）の 2 つがあげられている。平成 28 年度はこれら KPI 達成に向けた作業工程を検討し、平成 29 年度は、平成 30 年度に一定の成果を提示する必要がある中期計画 49 を中心とした活動をしてきた。とはいえ、昨年度も述べたことではあるが、この作業は、全くこれまでとは違う新しいカリキュラムを作成するということではないと考えている。附属学校群で行われている 3 つの拠点構想には国際教育拠点があり、幼児・児童・生徒に対しては、『自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養う』を目的とした教育研究活動を継続してきている。これらは、グローバルな素養を育てる教育に他ならない。したがって、これらの活動を整理統合し、体系立てることで KPI に応えられる成果物を作っていくことができるであろう。

カリキュラムは、作って終わりというものではない。その有用性あるいは有効性の検証が不可欠である。平成 30 年度に一定のカリキュラムを作成した後は、第3期中期目標・中期計画後半（平成 31～33 年度）の 3 年間で、作成したカリキュラムを実施し、その検証を行わなければならない。教育の有用性・有効性を検証することは、必ずしも容易ではない。今、目指しているグローバル素養育成のための教育活動は、外国語の習得や習熟、外国に関する知識の習得ではなく、異なる文化と自国の文化のどちらも大切に、飾らない心でコミュニケーションを行うという、態度・姿勢を育てることを目標としていると考える。態度・姿勢は、一朝一夕でつくられるものではなく、教えられたことを素材にしながらの毎日の体験の中で培われるものであろう。そのように考えるならば、国際教育の有用性・有効性を教育成果を指標として検証することの困難さが理解される。平成 30 年度は、「グローバルな素養を育てるカリキュラム」を作成することと併行して、カリキュラム検証のための方法論の検討にも着手する必要があるようにも思われるのである。

一方、こうした一連の作業は、附属学校群における国際教育活動の単なるまとめ以上の意味もあると思われる。11 校で培われてきた国際教育研究活動、附属高校と坂戸高校で行われている SGH 活動、駒場中高で行われている SSH 活動、これらを「グローバルな素養育成のためのカリキュラム」という視点で体系立てて公表することは、社会に対して筑波大学附属学校群としての国際教育に関する教育姿勢を示すとともに、各学校に対しては自分たちの国際教育研究活動促進のために参考となる事項や方向性をも示してくれるものとなると考える。さらに、作成したカリキュラムを検証するための方法論をも開発することで、グローバル人材育成に取り組んでいる日本中の教育現場に自らの教育活動を検証するための指標をも提示でき、附属学校群における教育研究活動の成果を広く発信することにつながると思われる。

附属学校各校においては、KPI 達成のためではなく、自分たちの国際教育活動を見直し、さらに発展させるための作業として前向きに取り組んでいただきたいし、また、附属学校教育局としてもそのような姿勢で取り組んでいきたいと考えるものである。

附属学校群の国際教育の推進

ー 2020 東京オリンピック・パラリンピックが近づく中でー

国際教育推進委員会委員長 澤 田 晋

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックまで後 2 年となりました。筑波大学附属学校の国際教育のコンセプトである「幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う」ということがますます重要になっています。外国の人々、異文化の人々とコミュニケーションをとるためには、英語を話すことができるというだけではなく、異文化を受け入れる心と心の触れ合いに裏打ちされたコミュニケーションが重要となります。東京オリンピック・パラリンピックには世界中から大勢の人々が来訪されます。異なる国や文化の人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国人との接し方、国際的視野で物事を捉える姿勢、語学力・コミュニケーション能力の育成等、国際化対応能力を培う教育の推進は 2020 東京オリンピック・パラリンピックが近づく中で、一層重要となっています。

グローバル素養の育成のためには、教職員相互の共通理解も重要です。そのため「教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える」ということも国際教育推進の重要なコンセプトとなります。教職員間の国際教育推進についての共通理解を深めるためには、教職員相互の理解を、学校組織としてのさらには附属学校群としての共通理解に高めて、国際教育を推進していくことが重要となります。


このようなコンセプトを具現化するために、筑波大学附属学校群及び特別支援教育研究センターの先生方が、本年度 4 回の委員会において、報告・協議・学習会を重ね、また今年度各学校等の活動がどのように展開されたかをご執筆いただき、附属学校国際教育推進委員会報告書（第 9 集）の発行に至りました。先生方には詳細な報告をありがとうございました。また、ご指導いただきました関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

「トビタテ！留学 JAPAN」でチェコ共和国に短期留学した生徒は「心の距離の近さを実感できました」「将来日本の共生社会の実現に携わっていきたいです」と語っています。また外国を訪問して、ホームステイを経験した児童は、温かい歓迎の中で、その国の歴史・伝統・文化を肌で感じて異文化理解を深めています。筑波大学留学生や JICA 研修生との交流を体験した幼児・児童・生徒は、自然なコミュニケーションと、心から楽しみながらの活動により、異文化の体験学習が進みました。国境を越える地球全体の視点からの文化理解と、多様な文化をもつ人々と共に生きる力を、幼児・児童・生徒それぞれの発達段階に応じて育成していくことが重要です。そのため「附属学校の国際教育拠点活動の新たな展開」のタイトルを設定して、各附属学校が国際教育の推進計画を立案し、実践を深め、幼児・児童・生徒の成長と変容を明らかにし、次年度に向けて課題と改善策を整理して、よりよい国際教育の在り方を附属学校群として探るとともに、グローバルな素養を育てるカリキュラム開発に関して「特別支援学校における障害への配慮事項」を検討しました。また、各附属学校の協力を得て附属学校群の国際教育推進地図（改訂版）を作成しました。附属学校国際教育推進委員会報告書には、今年度の国際教育推進委員会の活動成果が詳細に記述されています。

筑波大学附属学校群は、我が国のみならず世界の初等中等教育、特別支援教育の拠点としての教育を展開しています。また卒業生は各方面で、リーダーとして活躍しています。世界各地で活躍する人材、国際貢献を果たす人材を育成し、各国が抱える課題解決に貢献していくことが国際教育の拠点としての附属学校の使命です。附属学校群の国際教育推進地図を俯瞰して、附属学校群が国際教育を推進し、特色ある活動を展開して国際貢献を果たしていることを実感します。附属学校国際教育推進委員会報告書にはこのことが明確に述べられています。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

 なぜ、国際教育は必要なのか？


「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきた。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化になじめるの？



海外に支店や工場をつくることになったけど、日本とは何が違うの？

 グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。



要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

- 21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は、
 - (1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
 - (2)国際的リーダーとなる人材の輩出
 - (3)国際的な連携の構築であるとする。

- 筑波大学は、急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで、世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために、未来を切り拓く知の創造を通じて、地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかがげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

- 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
- 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく 附属学校の国際教育の取り組み等

	小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト	幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミ教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考				
各校の国際教育の目標 (国際教育を通じて育成する生徒像)	各校の特色を生かし ・小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。				
(国際教育を通じて広がる教師力)	・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色(長・短を含む)を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
(国際貢献)	・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組 (29年度)	幼児児童生徒				
	・ハワイ大学との児童交流会、親子 24 組参加 ・オーストラリア教員との授業交流 ・北欧授業交流(スウェーデン、デンマーク、コペンハーゲン大、ヘルシンキ大附属小) ・筑波大学外国人留学生との交流会 ・JICA 研修生(アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島、ベトナム)受け入れ、交流	・アメリカ短期留学にて、現地の家庭に滞在・交流。授業では現地校(中学校)の授業に参加。 ・シンガポールのホワチオン校短期留学に、生徒 2 名を派遣。 ・筑波大学外国人留学生との交流会 ・オーストラリア教員との授業交流 ・Junior Global Leaders へ参加 9 名 ・中国台州学院、国語授業交流	・日中交流ホームステイ受け入れ 20 名 ・国際学術シンポジウム(韓国)に生徒派遣 3 名 ・プリンスエドワードアイランド大学へ生徒派遣 16 名 ・国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 生徒派遣 1 名 ・日中高校生交流(北京)生徒派遣 20 名 ・シンガポール、ホアチオン校から 1 名来校、交流 ・SGH 全国高校生フォーラム参加	・台湾台中一中が来校し交流 ・立命館高校 SSH プログラム「台湾研修」生徒参加 2 名 ・筑波大学外国人留学生との交流 ・Ubon Ratchathani University(タイ)訪問 生徒 29 名 ・釜山国際高校訪問 高校生 10 名 中学生 6 名	・インドネシア国立バントン職業高校来校・交流 ・台湾復興実験高級中学来校、交流 ・「国際フィールドワーク」実施、生徒 7 名 ・姉妹校、コルニタ高校訪問 ・模擬国連(韓国)へ参加 生徒 3 名 ・「国際フィールドワーク入門」実施 生徒 23 名 ・国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 生徒派遣 2 名 ・SGH 事業「高校生国際シンポジウム・全国 SGH 校生徒成果発表会」本校生徒による企画・運営実施 ・フィリピン大学附属高校来日、生徒交流 ・SGH 国際フィールドワークボゴールリーダー会議 生徒 2 名参加

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
コミュニケーションをとる態度を養う。 える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流でのコミュニケーションを通じ、異文化を理解する人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲、また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国人について親しみをもち、相手を知らうとする気持ちを育む
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力ういお身につける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
・小学部5・6年生と専攻科留学生との交流会。韓国・モンゴル・ミャンマーの地理・文化について学習 ・アリゾナ大学からの訪問受け入れと交流 ・韓国視覚障害者連合会からの見学受け入れと交流 (高等部) ・国際フレンドシップ協会からスウェーデン高校生1名授業参加と交流、本校生徒宅でホームステイ ・平成29年度「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム（高校生コース）」に高等部2年生4名が採用。(3週間、チェコ共和国リベツ特別支援学校、ブラハ盲学校他) ・「海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちは」高等部生4名(5日間、タイ・バンコク盲学校他) ・スウェーデン調査・研究のため、スウェーデン大使館訪問、留学生との交流。 ・Hands On Tokyo との定期的英会話交流会 ・青少年国際交流推進センターの国際理解教育支援プログラムにて、エジプト人との交流会・ワークショップ ・フィリピン障害者支援事業プロジェクトマネージャーの本校卒業生を招いての講演・ワークショップ ・アメリカンスクールインジャパン (ASIJ) の生徒15名来校、生徒同士の英会話交流会。 ・高等部専攻科鍼灸手技療法科には各学年2名の留学生枠を設置 ・イングリッシュルームの実施(幼・小・中・高等部)	・ドイツ・ミュンヘン大学の学生2名参観交流 ・中国「香港教育大学」学生8名参観交流 ・フランス・パリ聾学校生徒との交流 高等部生徒10名 ・韓国ソウル聾学校とのスカイ交流 ・JICA 研修生(アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島、ベトナム) 受け入れ、交流 ・日台聾学校美術交流展の開催 ・日台共同研究：交流用デジタルコンテンツの制作	・TIAS(つくば国際スポーツアカデミー)留学生との交流 ・アルゼンチン卓球選手権選手(元アルゼンチンチャンピオン)との交流 ・JICA 研修生との交流	・台湾 国立和美実験校が来校、交流 ・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問生徒2名 ・JICA 研修生(アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島) 受け入れ、交流 ・筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流(ベナン、モロッコ、ブルキナファソ、ブラジル、インドネシア)	・海外からの見学者との交流多数 (インドネシア教育省、中国香港教育大学、タイ国特別支援学校、韓国 inje 大学、韓国国立特殊教育院、中国深圳市自閉症研究協会、JICA 海外日系人協会、イギリス・リーズ大学、韓国国立公州大学、JICA 横浜[マレーシア教育関係者])

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組 (29年度)	教師国際 貢献含	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア大使館より視察受け入れ ・スウェーデンより研究者授業参観および授業交流会 ・STEMS プログラム児童交流会、ハワイ大学へ派遣（事前研修会と本番引率） ・JICA 派遣（ウガンダ共和国）2名 ・オーストラリア教員との合同授業研究 ・JICA 研修生（アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島、ベトナム）受け入れ ・オーストラリア科学教育研究会・理科教育交流へ7名参加 ・日韓授業技術交流会参加 ・北欧授業交流（スウェーデン、デンマーク、コペンハーゲン大、ヘルシンキ大附属小）参加 ・韓国から研修生受け入れ ・筑波大学外国人留学生との交流会実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・オハイオ州立大学教員視察受け入れ ・タイ公立中学校教員視察 39 名受け入れ ・インドネシア公立中高一貫校教員視察 25 名受け入れ ・台湾台北市新興中学校視察 15 名受け入れ ・中国台州学院 教授3名授業見学受け入れ ・オーストラリア教員5名来校、授業交流 ・中国教育使節団7名受け入れ ・シンガポールホアチョン校 交流担当者来校 ・中国上海私立教員来校、14 名受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・日中交流ホームステイ 20 名受け入れ ・シンガポール、ホアチョン校から1名来校、交流 ・SGH 全国高校生フォーラム参加 ・日中交流最終報告会発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾台中一中、訪問交流受け入れ ・UbonRatchathani University（タイ）訪問、引率 ・筑波大学外国人教員研修留学生訪問研修、12 名受け入れ ・釜山国際高校訪問教員3名 	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア国立バントン職業高校見学、教員2名受け入れ ・台湾復興実験高級中学校からの見学受け入れ ・韓国「政府日本教職員招聘プログラム」に1名参加 ・「国際フィールドワーク」インドネシアにて実施 ・留学生3名受け入れ ・「国際フィールドワーク入門」実施 ・「高校生国際シンポジウム・SGH 校生徒成果発表会」実施 ・フィリピン大学附属高等学校来日、「インターンシッププログラム」実施 ・「SGH 国際フィールドワーク・ボゴールリリーダー会議」実施
環境整備	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・多目的教室「未来の教室」の設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高度情報化事業に伴い、スカイプなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を検討中。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		<ul style="list-style-type: none"> ・英語専科教員の増員（小学1年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALT とのチームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣で交流の確立している相手校とテレビ会議等で交流を定期的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALT の常駐。 ・校内 Wifi の整備を行い、日常的に海外の学校と学びあえるようにする。 ・アセアンを中心にアジアの高校生向けの奨学金制度を創設し、坂戸高校で日本語学習を実施し、筑波大学に入学できるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
<ul style="list-style-type: none"> ・アリゾナ大学准教授が来校、授業及び施設見学と情報交換 ・国際フレンドシップ協会からスウェーデン高校生1名受け入れ ・ダスキニアアジア太平洋研修プログラムの一環として、スリランカから1名授業見学を受け入れ ・NPO法人-JAPANからアフガニスタンスタッフ他8名受け入れ ・韓国視覚障害者連合会から40名見学受け入れ ・「海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちは」高等部教諭2名・バンコク盲学校他訪問（5日間） ・日本式手技療法課程修了者職業自立支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ・ミュンヘン大学から学生2名授業参観受け入れ ・中国・香港教育大学から学生8名授業参観受け入れ ・ワシントン大学附属聾中央研究所へ教員3名を派遣 ・フランス・バリ聾学校との交流 ・JICA研修生（アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島、ベトナム） 受け入れ ・日台聾学校美術交流展の開催 ・日台共同研究：交流用デジタルコンテンツの制作 	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア教育大学関係者40名研修受け入れ ・タイ国教育関係者9名研修受け入れ ・韓国 Jeonjin 大学特殊教育学科の学生4名見学受け入れ ・アルゼンチン卓球選手権選手（元アルゼンチンチャンピオン）との交流 ・筑波大学留学生（インドネシア）1名（国際交流について） ・JICA研修11名研修受け入れ ・インドネシア教育大学教授1名・チバガンティ特別支援学校教員1名来校（国際交流協定調印式のため） ・インドネシア共和国チバガンティ特別支援学校、インドネシア教育大学に本校から2名訪問 	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾 国立和美実験校が来校、交流 ・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問 教員2名 ・JICA研修生（アフガニスタン、フィジー、ケニア、レソト、モンゴル、ミャンマ、パラオ、サモア、ソロモン諸島） 受け入れ、交流 ・筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流（ベナン、モロッコ、ブルキナファソ、ブラジル、インドネシア） 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国寧波市達敏学校の教員10名を受け入れ研修（2日間） ・アメリカ TEACCH センターへ教職員8名を研修派遣（5日間） ・多くの見学を受け入れている （インドネシア教育省、中国香港教育大学、タイ国特別支援学校、韓国 inje 大学、韓国国立特殊教育院、中国深圳市自閉症研究協会、JICA 海外日系人協会、イギリス・リーズ大学、韓国国立公州大学、JICA 横浜 [マレーシア教育関係者]）
<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学内のウェブ会議システム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプを活用した実践。 ・教材・教具の展示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
<ul style="list-style-type: none"> ・校内各所からの国際電話。 ・留学生支援の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のバリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11 附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な教員の海外派遣交流視察、研修の機会の設定。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。 ・北欧等の特別支援学校との交流を実現させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの講師招聘型研修会を恒例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校（以下「本校」）は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を生かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度も、グローバル化を研究の一つの核として、組織的に取り組んできた。まず、本校の研究を推進する研究企画部が中心となり、①海外校との授業交流、②児童の海外交流、③児童の国際理解環境の充実の3本を柱にして、各担当役割を組織し、研究を進めてきた。グローバル化の実現のためには、全校をあげての組織的、かつ長期的な継続を視野にした研究を進めることが必要だと感じ、幅広い教員の参加をめざしている。また、国際支援の観点での JICA 事業協力も進めている。

- ① 海外校との授業交流 韓国との相互訪問における授業交流、北欧授業交流、タイコンケン大学交流
- ② 児童の海外交流 カリフォルニア大学 DC バークレー校視察、サンフランシスコ市内小学校児童交流、ハワイ大学附属小学校交流
- ③ 児童の国際理解環境の充実 留学生との交流 3年生からの英語活動 韓国、オーストラリアの先生方の訪日授業
- ④ 国際支援 ウガンダ教員参考書作成支援 JICA 研修員受け入れ



① 海外との授業交流

○平成 29 年 9 月 9 日 タイ コンケン大学にて「APEC ICER 2017」に出席

森本隆史教諭が、コンケン大学附属小学校 4 年生と算数の授業を行った。その後協議会にも出席し、10 分弱今回の授業の振り返り、教材観、どのような力を子どもたちに育てたいのかについて話をした。授業内容は、4 年生のわり算であった。 $11 \div 9$ 、 $22 \div 9$ 、 $33 \div 9$ など、ゾロ目 $\div 9$ のあまりについて考える授業を行った。



○10 月 7 日～11 日 韓国慶尚南道倉原市 光州松原初等学校

国語「言葉の力をつける国語の授業」青木伸生 家庭科「家庭生活で生かそう」横山みどり

社会「自然災害とともに生きる～釜石の安心の砦～」由井蘭健

理科「空気の性質」白岩等



今回の日韓交流会は、国語、家庭科、社会科という国際交流をしにくいと考えられていた教科でも挑戦することにした。評価は、現地の行政トップの方がとても感動されて、日本に多くの韓国教師を派遣することが決まるほどの成果をだした。2 月に訪日予定。

○スウェーデン、デンマーク現地校 授業研究大会への参加 10 月 8 日～14 日

算数 田中博史 夏坂哲志 山本良和 盛山隆雄 中田寿幸 大野桂 森本隆史

理科 佐々木昭弘 鷺見辰美



スウェーデンの子供たちに算数の授業を行った。多面体展開を考える授業で、協議会も行う。大学の先生、それに賛同する学校の先生が中心となり、授業研究会を行う。スウェーデンでは初の試みということで、国営放送の取材が来た。現地の大学の先生が夕食のホームパーティに呼んでいただき、そこでテレビに流れる授業や協議会の様子を見ることができた。

スウェーデンの後、デンマークに移動し、ここでも算数と理科の授業を行った。



授業を参観する先生方は120名近くにもなり、来年度は予算をつけてでも継続してほしいという願いをいただいている。授業協議会后、算数3、理科1のワークショップを行い、それぞれが通訳無しで挑戦した。本校の12月の校内研究会には、デンマークの先生方10名がお見えになり参観されて帰国された。

○オーストラリア 8月14日～18日（外部資金：ソニー財団）

訪問地：ゴールドコースト（1日目～2日目）・キャンベラ（3日目～4日目）・シドニー

オーストラリア・ミーガン先生の授業（小学校5年）、辻健（本校）の理科授業（小学校5年）を行う。授業後協議会を行い、学校視察、サンクチュアリ見学を行う。

他にも日本の小学校教師と現地オーストラリアの教師のセットで授業、協議会を行い、授業力を高めた。

10月4、5日にはオーストラリアから多くの先生方が訪日され、本校での授業参観、そして、本校の子供たちへの授業を行うという企画も行うことができた。附属中学校にも協力していただき、小中での実践となる。



10月8日～ 英語教諭荒井和枝が、オーストラリアの現地校視察を行い、将来への児童交流の道を探っている段階である。

② 児童の海外交流

8月20日～28日 ハワイ大学STEMS 2研修 小学校交流会

1日目 午前 STEM 2 午後 P4Cプログラム（親用 子ども用）



自己紹介後、ロボットの操作を英語で説明してもらいながら、現地の小学生と交流する。

その後、P4Cプログラムに参加する。自分たちで議論テーマを決め、議論するプログラムで、生物の進化について話し合っていた。

2日目 午前 タロイモ体験 午後 セント・ルイス・スクール交流



ハワイ大学がもっているタロイモ実験場で、タロイモ畑に葉の栄養を与える作業体験を行う。

午後 セント・ルイス・スクール交流

小学生との交流では、本校の運動会で行うダンスと縄跳び、剣玉を披露する。相手校が日程を間違えていて、本来の交流ができず残念であった。高校生は日本語の授業もあり、日本語に対する関心が高いことを感じた。高校生もやさしいお兄さんという感じで、上品な感じの男子高であった。今後の交流依頼も快く引き受けてくれる。

3日目 午前 チョコレート工場見学 午後 STEM 2

午前 昔ながらの製法のチョコレート工場を見学し、チョコレート作りを体験する。

午後 STEM 2

ロボットの組み立てを行う。高校生用なので、パーツが多く、基本組み立ても完成できずに終わってしまうグループも多かった。本来は、基本組み立てからの工夫を行う予定だった。

4日目 午前 タロイモ体験 午後 ハワイ大学附属小学校交流



ロボットでタロイモの栄養となる葉を集める体験を行う。葉を集めるところまでできるグループとできないグループがあった。自然

の中での体験交流はよかった。歴史など理解できない内容が多かったので、絵を交えての説明などしてくれるとよりよかった。

午後 ハワイ大学附属小学校交流

日本の子どもたちが中心になって、折り紙、福笑い、剣玉等を体験する。その後、現地の子と体育を体験する。

5日目 発表と修了式

これまでの成果を発表する。現地の子は英語はできるが、発表には慣れていない様子で、本校の子は英語が不慣れで発表が得意なので、同じような発表になる。STEM 2 修了書もらう。

このプログラムを通して、異文化に触れること、現地の子供達と毎日のように交流を重ねることができたこと、自然体験、ロボット作りという体験を通して英語に触れることができたことが、子供たちの価値ある体験となった。

プログラム終了後の保護者からは、費用を出した以上の価値があり、親子で貴重な体験になったという感想をいただいている。

③ 児童の国際理解環境の充実

本年度は、韓国、オーストラリアの先生方が訪日し、本校で授業を行った。児童は、日本にいながら、海外の先生方の授業を受けることができた。



韓国の先生方が本校を訪問（20 数名）。（1 月 22 日～ 25 日まで）

10 月に、本校教諭が韓国を訪問し、現地校で授業交流会を行った。

3 日間は本校の教諭が行う、国語、算数、理科、社会、音楽の授業を参観された。

1 日は、韓国の先生が、本校の児童への授業を行っていただき、協議会を行う。韓国の先生が行った授業は、様々な円を比較しながら、円の広さについて考える算数の授業であった。

④ 国際支援

4 年計画でのウガンダ、教員用指導書作成支援が終了した。4 年間で、5 教員が 15 回にわたりウガンダに渡り、支援活動、ウガンダの児童を相手にした授業を行ってきた。ウガンダ全国から集められたナショナルトレーナーの活動を支援し、独自に教員用指導書を作成できるように助言を行ってきた。また、その指導書を活用するための PR 活動として、各地の学校を訪問し、授業を行うことも行った。



2017 年度 国際教育事業について

1. アメリカ・ペンシルベニアへの短期留学 2016 年度末実施報告

例年本校では、春休み期間中にアメリカへの短期留学の機会を設けている。行き先はペンシルベニア州セラーズビルである。毎年多くの希望者がいる中、昨年度も抽選で選ばれた2、3年生の36名が参加した。そこでは Faith Christian Academy の授業に参加し、その近隣の家庭でホームステイをした。教員は前半2名、後半2名が引率した。



現地での日程は以下の通りである。

- 3月18日（土）（日本時間）15：00 集合 17：55 成田出発
（現地時間）17：45 Newark（NJ）到着 バスで Sellersville, PA へ
21：20 Faith Christian Academy 着
校内チャペルでホストファミリーと会い、各家庭へ
- 3月19日（日）ホストファミリーと過ごす
- 3月20日（月）8：00 チャペル集合 3年Sさんが挨拶スピーチ
マッチングされた各 Ambassador（大使＝バディ）と授業へ
- 3月20日（月）Ambassador と授業に出席
- ～ 23日（木）14：20 Ⅷ限まで通常授業に参加後、FCA12年生に留学中の生徒から体験談を聞く
→ Ambassador へ Thank you カード作成 → 体育館で自由時間（バスケや折り紙など）
17：45 ピザパーティ Ambassador と
18：30 チャペルで Farewell Party のリハーサル
19：00 ～ Farewell Party ホストファミリー、Ambassadors、教職員と
- 3月24日（木）フィラデルフィア観光
自由の鐘・独立記念館・フランクリンミュージアム・フィラデルフィア美術館

3月25日（土）ファミリーと過ごす

3月26日（日）19：00 ファミリーと夕食後、FCA 集合 バスで Newark (NJ) へ
ホテル泊

3月27日（月）8：00 集合 10：55 Newark (NJ) 出発

3月28日（火）13：17 成田到着 14：00 過ぎ解散

【学校生活】

学校では、生徒1人1人に ambassador と呼ばれるお世話係の FCA 生が終日付き添い、ambassador の出る授業全てに本校生徒が参加させてもらうことができる。初めは不安そうな生徒も、最後にはどこにいるのかすぐには見つけられないほど学校に馴染むことができていた。生徒たちのたくましさと、受け入れ校の丁寧かつ温かい対応に感謝の念が尽きない。



授業風景



ランチタイム

【ホームステイ】

各々がホストファミリーとも忘れがたい特別な時間を過ごせたようだ。週末には一緒に近郊の観光地に出かけ、中には誕生日だと知ってバースデーケーキを用意してくれた家庭もあった。言語や文化の違いを越えた人の温かさに触れ、多くの生徒とファミリーが別れ際に涙する姿が印象的だった。

【Farewell Party】

最終日のお別れ会ではダンスやクイズなどの出し物を披露し、合唱曲の Hallelujah! を全員で歌うことでお世話になったお礼を伝えることができた。



【生徒の変容】

この短期留学は、異なる文化や習慣を学ぶと同時に、自分たちの文化についても改めて考える機会となっている。また、英語を使って何かを伝えようとする前向きな姿勢が確実に養われている。

第6回の参加者も秋から事前学習を重ねているので、この短期留学が本校の国際理解に対する良い流れを引き継ぎ、さらに良いものになっていくことを望む。

2. Hwa Chong Institution との短期交換留学

2017年3月27日から4月5日（6日帰国）に短期留学が行われた。留学先はシンガポールにあるホワチョン校である。附属中の生徒が2名、附属高の生徒が6名の計8名が参加した。

出発の朝の天候が雪という予想外の旅立ちとなったが、予定通りのフライトとなり一安心であった。7時間ほどでシンガポールの空港に降り立つとホストファミリーの方々が迎えに来てくれていた。初めてバディと顔を合わせた生徒たちは、慣れない英語でも一生懸命に会話をする姿が見られた。始めは附属生もホアチョン校の生徒も表情が少し硬かったが、すぐに和らぎ、ホストファミリーのもとに向かっていった。

空港を出ると真夏の熱気に包まれたシンガポールの街が、私たちを迎えてくれた。ベイフロントにみられる国際的な姿と、屋台街などにみられるアジア的な姿とが混在する街並みが印象的だった。

翌日、生徒の様子を見るために校舎を回ると、既にバディの生徒とともに英語で行われる授業に参加したり、食堂で初めて見る食べ物を楽しんだりしており、生徒はシンガポールでの生活を満喫していた。同年代の異なる地域に暮らす友人との交流は、本やインターネットでは学べない貴重な体験になったであろう。そして、きちんと自己を主張できるようになってきた。



3. 生徒・保護者・外来者へのアピール

国際交流に参加した生徒たちの声を多くの人に届けられるよう、今年度も積極的なアピールの方法を工夫した。その中の1つとして、シンガポール交換留学とアメリカ留学に参加した生徒たちが報告ポスターを作成し、始業式からの約1ヶ月間は1階廊下に掲示した。ポスターを立ち止まって見る生徒も多く、ポスターを見て様子を知ることによって、今年度、アメリカ、シンガポール留学に応募した生徒もいた。

また、アメリカ留学に2年生で参加した生徒は3年進級直後の4月のHRの時間に、活動報告を行った。本人のまとめとなり、また学年全体へのよい刺激となった。さらに、今年度のアメリカ留学プログラムの説明会にも出席し、体験から学んだことや次の参加者へのメッセージを写真と共に発表してくれた。説明会終了後には、個別に生徒や保護者からの細かい質問にも答えてくれる姿も見られ、心強かった。さらに、今年度参加する生徒たちの事前学習に参加し、実際の体験からの学校生活やホームステイ先で注意すること等のアドバイスを行ってくれた。このような活動に参加することで、自身の体験をふり返ることができ、見聞きしたことの意味を考えることもできた。

PTA会報でも、昨年度引率した教員が写真とともにシンガポール留学、アメリカ留学の報告を行っており、学校全体への周知を深めた。さらに積極的な発信を心がけていきたい。

4. 教員・生徒の国際交流

総合的な学習

Bコースにて

筑波大学教員留学生の6名の協力を得て、留学生の出身国について調べるとともに、英語を用いての交流を行った。生徒自身が、自分たちの学校や、日本の教育制度について英語で説明を行った。料理の交流会では、留学生の出身国の料理作りにチャレンジした。レシピを調べ、食材を用意・購入するところから各自で行った。最終回には、教員留学生の出身国についての説明を聞くとともに、日本の習慣や年中行事等についての説明を行った。このような活動を通して、「伝える」ためには、相手が何を知っているかを理解することが大切であると実感することができた。



I ①コースにて

世界で起こっている貧困、飢餓、紛争、環境破壊、人権侵害などによって弱い立場に追いやられている人について考える活動を行った。外部団体の講師も来校し、生徒たちは自分たちの生活がいかに恵まれているものであるかということを実感できた。またそれだけにとどまらず、社会で起こっているさまざまな問題に対して「自分たちにできることは何なのか」ということを考え、具体的な行動まで考えることができた。さらに、物事を多角的に捉えることの大切さを学ぶことができた。

海外から

4月：オハイオ州立大学教師視察。

授業内容の説明の他、英語の堪能な生徒からの説明もあるなど、充実した時間となった。

タイの中学校教師来校。

1時間は授業の自由参観。1時間は1年生の地理の授業に参加し、タイ語について生徒と交流した。



5月：インドネシア小学校中学校の教員20名来校。

授業参観。教員との交流。

筑波大学現職教員と留学生8名来校。

授業参観。教員との交流会。

6月：台湾の台北市立中学校の教員15名来校。



10月：ソニー教育財団より依頼され、10月4日にオーストラリアからの理科教員来校。

2校時に本校の理科の授業見学。3・4校時にオーストラリアの教員が授業を行った。3校時は3年1組に、ワイヤーロープと滑車の乗り物の仕組みから、力と摩擦について考える授業、4校時は3年5組に、(米と粗塩等を用いた)科学者が研究時に行う科学的な探究や考え方を身に付けるための導入部分の授業であった。



2月：上海蘭生複旦私立中学校の教員13名来校。
授業参観。

いずれの参観においても、担当係のみでなく、多くの教員が対応できており、国際交流や授業公開が特別なことではなくなっている。

グローバル人材の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

2014年度から、スーパーグローバルハイスクール（SGH校）としての取り組みが始まり3年目を迎えた。本校は、専門性と教養、問題解決能力、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、主体性と協調性、異文化理解の柔軟性と日本人としてのアイデンティティを備える「グローバル・シチズン」の育成と、それらに加えて高い語学力、議論する力、地球規模の視点を有する「グローバル・リーダー」の育成を目指している。今年度も「グローバル・リーダーの育成」を中心に取り組んだ。

2. 活動の具体

(1) アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（APYLS）

シンガポールにある Hwa Chong Institution（ホワチョン校）主催の第11回 Asia-Pacific Young Leaders Summit (APYLS) は、7月24～31日の日程で開催された。今年度の全体テーマ「Connecting the Dots of an Uncertain Future（不確かな未来の点と点を結ぶ）」の下、英国、フランス、南アフリカ、インド、インドネシア、シンガポール、マレーシア、オーストラリア、フィリピン、中国、韓国、米国、日本の13カ国80名が参加して行われた。日本からは、筑波大学附属高校2年生の儀賀柚奈、辻井萌々香、中嶋俊介と麻布高校2年生の生浪島海央、鈴木悠太、高以良光祐計6人が参加した。

APYLS は、将来を担う若者達の国際交流・友好関係の構築、国際問題の認識と解決を模索することをねらいとして、2006年からホワチョン校が始めた国際交流事業である。本校は第1回から生徒を派遣している。大会期間中、参加生徒は他国の学生と、4人から6人の相部屋で、共同寮生活を送り、1日24時間、異文化を直に体験し、受け入れながら個人的ネットワークを築く。

プログラムには、前回に引き続きシンガポールの大統領府、外務省を始め、国立大学、国営放送局や住宅開発機構等の訪問が組み込まれている。訪問先では大臣や責任者から話を聞き、シンガポールの対外政策や教育方針、都市再開発計画について学習した。大統領府（イスタナ）では、トニータン大統領が自ら優秀発表に耳を傾け、表彰して下さった。

プログラムのハイライトは、Summit Dialogue と Student Dialogue である。Summit Dialogue で



大統領官邸（イスタナ）にて

は、ホスト国の政・財・教育界を代表する人々の講演を聴き、世界の動向に対する理解を深めた。講演後の質疑応答では、日本代表の生徒達は全員が挙手して、質問を行い、積極的に議論に参加した。

Student Dialogue では、事前に、各国代表者に対して、各国に関連した国際問題のテーマが与えられ、課題の調査・研究をもとに解決策を提案するという20分程度のプレゼンテーションを行う。日本に与えられた課題テーマは「Slowing Economic Growth-Charting the Next Step（減速する経済成長－次

の手立てを示す)」であった。世界経済が停滞する中、どのような新たな手立てが効果的であるか、日本代表の6名は、全体テーマの Connecting the Dots を切り口に、日本の産業成功例を基にして、交易の原点にある差異の活用を次世代への第一歩として紹介した。その後の質疑応答では、各国代表者から矢継ぎ早の質問を乗り越え、フロアーから大きな喝采を受けた。最優秀発表には選ばれなかったが、参加した6人は充実した時間を過ごすことができたと言っていた。

閉会式の文化発表では、はっぴを身にまとい、現代風のダンスを組み込み、恒例となっている「よさこいそうらん節」を披露し、式を大いに盛り上げた。参加者全員が、すべてのプログラムをやり終えた達成感とともに、将来世界で活躍するために取り組むべき課題をそれぞれの胸に刻み、日本へ帰国した。



日本チームの発表 1



日本チームの発表 2



日本チームが発表を終えて



お別れパーティーでの恒例の「よさこい」披露

(2) 国際学術シンポジウム (IAS)

7月に韓国・ハナアカデミーソウルで開かれた国際学術シンポジウムに、本校から生徒3名（ケリー・真理香、裴美玲、小林俊介）引率教員2名が参加した。本校チームは第4日のセッションで提案者となった。すべて英語で発表し、他校からの質問にも十分に対応していた。

IASは東アジアの高校生（約200名）による相互発表・討論会である。今年度テーマは Getting Ready for the New Informational Era（新たな情報化時代に備えて）で、これに沿った形で各チームが論文を作成しその内容を提案する。共通言語は英語である。3ヶ月間にわたってテーマに関するリサーチを行い、論文の作成、プレゼンテーションの準備を行う。5月中旬に関東圏の4校間（鷗友学園女子中学高等学校、早稲田大学高等学院、早稲田大学本庄高等学院、そして筑波大学附属高等学校）で集まっていわばシンポジウムに向けて英語でのプレゼンテーションを練習した。7月中旬には、同じ顔触れでさらに本番に近い形での国内ミニ・シンポジウムが企画された。今年は日程の都合で本校は参加できなかった。

7月にソウルに入ってから、主催側のハナ高校生と親睦を深めるアクティビティが設定され、次にアカデミックな取り組み、そして後半に文化交流とホームステイと再び親睦を深める企画であった。生徒たちの感想文から「他校生徒との交流」と「プレゼンテーション・英語」に関する記述の両方が多く見られることから、このシンポジウムの狙いが上手く生徒たちに届いていたと感じる。



発表を行った本校生徒



Hana Academy Seoul にて、参加者全員で記念撮影

(3) UPEI 研修（プリンスエドワード島大学研修）

スーパーグローバルハイスクール指定を受けながら、APYLS に 3 名、IAS に 3 名、Hwa Chong Institution との短期留学に 6 名、日中交流に 20 名しか海外に生徒を派遣できていないという実態から、さらに 16 名をカナダ・プリンスエドワード島大学（UPEI）に送り、研修を経験させるというプログラムが始まり今年が 2 年目である。

8 月 12 日から 8 月 27 日までの 2 週間、本校 1 年生 16 名がカナダ東海岸にあるプリンスエドワード島（PEI）のプリンスエドワード島大学を訪問した。大学では、ホームステイをしながら筑波大学附属高校用に開設された PEI の歴史、環境保護、移民等についての講義を聞き、同じく筑波大学附属高校用に設定された観劇や、赤毛のアンでおなじみのグリーンゲイブルズ訪問等のアクティビティを行った。幸運にも皆既日食を全員で見ることができた。また、地元の国際バカロレア指定の高校生とのディスカッションや本校生によるプレゼンテーションを行った。PEI にはもともとファーストネーションが住んでいたが、フランス人が移民し、その後、七年戦争を経て英国領となった。さらに、カナダが独立する際、カナダ建国会議が開かれた島であり、SGH の研修をするのに、歴史的に興味深い場所である。参加生徒は PEI の海岸浸食の問題やシリア難民受け入れ等の話を熱心に聞いた。最終日には各自の研究についてのプレゼンテーションを行い、UPEI の 3 人の先生方から質問を受けた。後日 UPEI の先生から送られたメールの中で、筑波大附属高校の生徒は、これまで世話をし

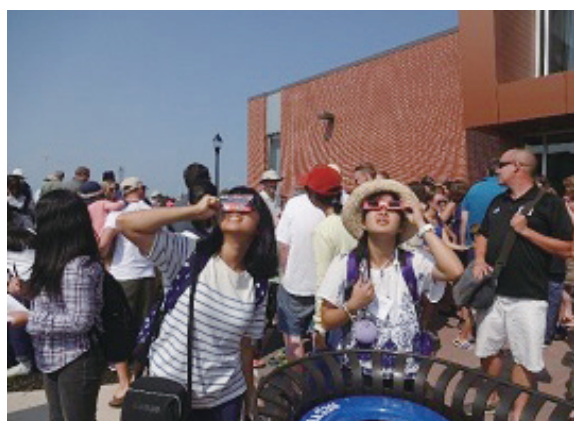
た大学生や高校生と比較しても例外的に優れているというお褒めの言葉をいただいた。参加生徒はこの経験をもとに、将来のグローバルリーダーになることが期待される。



授業の様子1



授業の様子2



（4）日中高校生交流（7月招聘・10月派遣）

日中の高校生が互いの国を訪問し、さまざまな交流活動を通じて理解を深め合う、日中高校生交流。このプログラムはイオン1%クラブが主催し、北京市政府が後援しているもので、2017年度は日中双方74名、計148名の規模で行われた。本校からは20名の生徒が参加し、北京市にある三里屯第一高等学校と景山高等学校との交流を行った。

まず、7月に北京から高校生が来日した。11日（火）の朝には本校で対面式が行われ、生徒はウェルカムボードを持ってパディの生徒を歓迎した。夜には、小大使活動として中国大使館での郭燕公使による質問会および歓迎会に参加。翌12日（水）には首相官邸を訪問し、本校2年神山琢弥君が日中交流の抱負を語った後、萩生田副官房長官から激励のお言葉をいただいた。14日（金）～16日（日）には北京の生徒が本校生徒の家庭でホームステイをし、その内の2日間は本校の授業にも参加した。パディの生徒と同じ授業を受け、昼休みには全校での歓迎集会、放課後は部活動体験に加えて生徒会主催の交流会も開かれ、短い時間だったが日本の高校生活を味わってもらった。

10月16日（月）から1週間、今度は本校生徒が中国に滞在。17日（火）の大使活動では、北京市人民政府、中国人民対外友好協会、日本大使館を表敬訪問した。北京市人民政府では本校1年森岡優佳さんが日本代表として挨拶をし、王寧副



首相官邸での代表スピーチ

市長より中日友好に向けて励ましのお言葉をいただいた。日本大使館では植野篤志公使の質問会に参加し、その後には歓迎会も催された。また、歴史・文化活動として、17日（火）にシェア自転車の大手 ofo を見学したほか、18日（水）には中国の学生と一緒に万里の長城を訪れた。さらに、19日（木）には、北京大学で日本語学科の学生と交流をし、石景山社区学院にてお面作り、茶芸体験、飴細工体験を行った。これらの活動によって、今まで教科書やテレビなどの媒体を通してでしか知らなかった中国の歴史や伝統を実際に肌で感じることができた。20日（金）にはバディの通う学校を訪問し、中国の高校生活を体験。その後の2泊3日のホームステイではそれぞれの家庭で温かい歓迎を受け、北京市観光や家族での食事などを通して忘れがたい思い出ができた。



生徒会主催の交流会



北京市政府表敬訪問での集合写真（イオン1%クラブ提供）



中国の学生と仲良く食事

（5）Hwa Chong 校との間での相互短期留学

3月27日～4月6日の10日間、新2年生6名、附属中学校を卒業したばかりの新1年生2名の計8名が、シンガポール Hwa Chong 校に短期留学をした。両校の交流は今年で11年目となる。

Hwa Chong 校はシンガポールの中西部の閑静な住宅街に位置する中華系の私立学校で、シンガポール屈指の進学校である。広大な敷地を持ち、大規模な運動施設や、理科の実験室、大講義室などが多数あり、敷地内には寄宿舎もあってそこから通学している生徒も多数いる学校である。附属生はバディとなる Hwa Chong 生と共に授業に参加した。大講義室は広い階段教室であり、まるで大学の講義を受けているような感じであった。また、学校全体で行われる集会や、放課後の部活動などにも参加し、異国の地でのスクールライフを満喫した。附属生は各バディの家庭にてホームステイをし、週末にはバーベキューにも招待して頂いたり、有意義な留学生活を送った。

シンガポールは多民族・多文化共生国家であり、小規模な都市国家ではありながら1人当たりGDPは日本を超える。統制された交通システム、近未来を思わせるような整ったビル群や都市構造など、生徒にとっては非常に刺激的な環境が揃っている。こうした中で、生徒達は留学の体験だけでなく、各自でテーマを設定し、研究活動に当たった。例えば、シンガポールの女性の社会進出に関心を抱いた生徒は、ベビーシッター、祖父母、父親という3つの存在に着目し、Hwa Chong 生徒を経由して40以上の家庭からアンケートを集め、分析している。また、シンガポールは法律が厳しいことで有名であるが、ある生徒は、そのことの背景に多民族社会の実態があるのではないかと仮説をたて、民族ごとに習慣や常識が異なることと、社会全体の共通認識や規範のあり方の関連性を議論している。こうした研究活動は例年行っているものであるが、1年次に履修するSGHスタディでの学習も徐々に身につけてきているようで、仮説のたて方、アンケートのとり方や分析、先行研究のひき方など、研究の体裁が以前よりも整ってきたように感じる。

今年度は、東アジア国際情勢により、Hwa Chong 校から附属校への訪問が中止になってしまったことが大変残念であったが、生徒同士の交流は現在に至るまで続いているものと思われる。



Hwa Chong の生徒たちと

(6) SGH プログラム

「SGH スタディ」の授業（9月2日）において、夏休みに行われた「SGH プログラム（海外派遣）」に参加した生徒による報告会が行われた。APYLS(アジア太平洋リーダーズサミット:シンガポール)に参加した3名、IAS(国際シンポジウム:韓国・)参加に参加した3名、UPEI 研修(プリンスエドワード島大学:カナダ)に参加した16名の代表として1名が、課題研究の内容を英語で発表した。1年生にとっては、これから目指す方向性の指針に、2年生にとっては仲間が学んできたことの共有の場となった。発表したどの生徒にとっても、研究・研修をまとめる良い機会となり、今回の経験を今後の「SGH スタディ」に活かして欲しいと思う。そして「グローバル・リーダー」を目指す生徒に向けて、さまざまな立場の人をお招きし、国際的視野・国際的感覚を養うためのお話をいただいた。

① 中国大使夫人 汪婉氏による講演会

6月24日(土)13:00～14:30、桐陰会館にて、中華人民共和国駐日本国大使館中国大使夫人汪婉氏は、中国に関して、社会、歴史、民族、教育、食、娯楽等さまざまな観点から熱心にお話くださった。約1時間の講演の後、何人もの生徒が積極的に質問をし、これからの日中関係を担う若い世代としてどう行動していけば良いかアドバイスをいただいた。



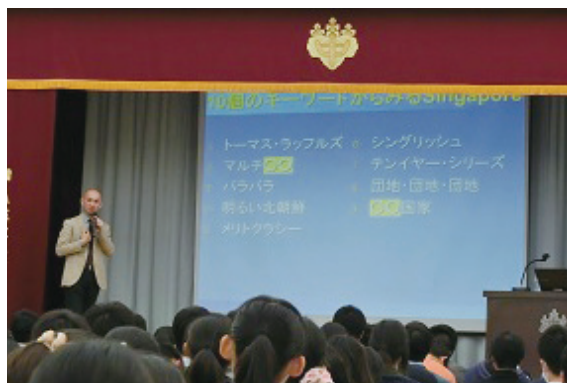
② 韓国講演会

6月24日(土)13:00～15:00 本校会議室にて、韓国での日本人実業家である三好平太氏が韓国の文化や生活について、本年度IAS参加者と希望者向けにお話しいただいた。ご本人の国費留学生としてのご経験から、米国と韓国の留学についてもお話しいただき、大変参考になる内容だった。



③ シンガポール講演会

11月7日（火）育鳳館にて昭和女子大学准教授であり、ホワチョン校卒業生でもある Sim Choon Kiat 氏による講演会が開かれた。6時間目に1年生全体に対する講演が行われ、10個のキーワードによるシンガポールの実態について説明があり、1年後に修学旅行をひかえた生徒たちは非常に刺激を受けたようであった。放課後には、来年度の APYLS、IAS への派遣が決定している代表生徒を中心に、英語によるディスカッションが行われた。これからの国際社会のあり方などについて議論が行われ、生徒たちにとって、非常に有意義なものとなった。



④ EU セミナー「EU が学校にやってくる」

11月9日 13:10～15:00 に桐陰会館で1年生対象に EU セミナーが開かれ、経済部一等書記官のダニエル・オッケンフェルト氏による講演が行われた。前半は1年生全体へ EU についての説明を行い、後半は来年度 APYLS や IAS、UPEI で海外訪問を希望する生徒とその他希望者が桐陰会館会議室で話し合いを行った。生徒はこのセミナーをとおして日本と EU の関わりについてさらに興味をもったようである。



2017 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高6年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、以下のとおりである：本校はスーパー・サイエンス・スクール（SSH）に指定されて第4期16年目であるが、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動が本校の中心になる。その中で最大のものは、2009年より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系の内容でもしっかりしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2013年に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の2つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。2013年にはイングリッシュ・ルーム事業もスタートさせ、英語による学術発表の基礎となる英語でのコミュニケーションの機会を全生徒に提供するだけでなく、実際に海外などで発表をする生徒のプレゼンテーション事前準備にも大いに役立っている。



釜山国際高校の本校訪問における交流（2018年1月22日）

2. 平成 29 年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他の SSH 校（立命館高校・横浜サイエンスフロンティア高校）企画に、本校の生徒・引率教員が参加する 2 つの形態に分かれる。これら以外の活動と合わせて、順に紹介する。

（1）台中第一高級中学（台中一中）

本校の SSH 関連国際交流事業として 2009 年に始まり、今年度で 9 年目となる。当初は本校から先方への訪問のみであったが、2013 年に台中一中の日本訪問旅行に合わせた本校訪問が実現し、本校では国際交流デーとして 1 日の特別スケジュールを組んで迎えた。以降隔年で本校訪問があり、2017 年度は第 3 回目が行われた。それについて、まず述べる。

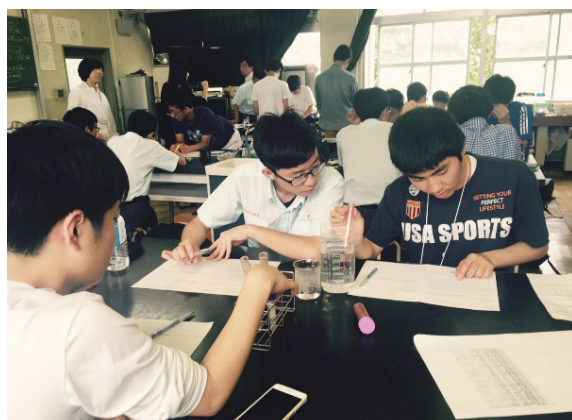
① 国際交流デー 2017 年 5 月 24 日（水）

特別時程を組み、台中一中の生徒 60 名、教員 4 名、通訳 2 名を、本校高 1・高 2 が中心となって迎えた。当日のスケジュールは以下の通り：

9：15～10：20	歓迎セレモニー（体育館）李特別学科長、林校長、両生徒代表挨拶 パフォーマンス（音楽部、剣道部剣道形披露、台中（ダンス、合唱））
10：30～12：20	特別授業（高 1・2 特別時間割） 8 クラス（通常クラス－午後バディ組＋台中一中生徒＝約 40 名）
14：00～15：30	研究発表（OS）発表：筑駒・台中各 2 本（質疑応答含め約 15 分）
15：40～17：00	校内散策・部活動見学 台中一中生徒体験 or デモンストレーション 化学部・生物部・卓球部・ジャグリング部・音楽部・駒場棋院など

企画・準備・当日の業務は教員だけでなく、高校生徒自治会のメンバーがリーダーシップをとって行ってくれた。彼らや高校生バディの中には、台湾や韓国への派遣経験がある者も多く、自分たちが現地で受けたもてなしを今度は日本で返したいという思いもあって献身的に働いてくれた（60 名の台中生に対して午前午後バディ 140 名）。

また、授業などで一緒になった一般生徒も、日本の外で活躍するレベルの高い生徒に出会い、学習などに対する自身のモチベーションが高まったという点でも、収穫の多い行事であったと言える。午後バディに取ったアンケート（回収 38 名）で、A よく会話できた（14）、B まあまあ会話できた（20）、C あまり会話できなかった（4）、ということである。



生物の実験授業で



昨年末台中訪問した高 3 生が歓迎挨拶

② 台中一中訪問 2017 年 12 月 12 日（火）～ 17（日）

2015 年に姉妹校締結した台中一中訪問は、本年度で 9 年目を迎えた。本校より高 2 生・9 名、高 1 生・7 名、引率者 3 名が参加。12 月 13 日（水）に国立自然科学博物館を訪問し、14 日、15 日に台中一中で研究交流を行った。14 日は歓迎会・授業参観（数学・理科実験）・高 1 生徒による学校紹介、台中一中の楽器演奏など、文化交流を楽しんだ。翌 15 日は高 2 生徒による研究発表で発表時間 15 分、質疑 5 分、本校生徒 8 本、台中生徒 12 本の発表が行われた。テーマは理数系が中心であったが、本校からは「障害学」に関する発表もあり、台中一中の教職員の関心も引き、現地での新聞取材も受けたほどであった。研究発表ばかりでなく、昼休みには一緒にスポーツをしたり、終了後には夜市へと案内されたりと生徒同士の交流も大いに盛り上がり、研究・文化交流両面で刺激を受けていた。参加した生徒の感想を一つ紹介する：

「私個人としては、この 1 週間の交流の醍醐味はやはり違う環境で育って言語も違う人たちと交流できたことにあってと考えており、そのような機会がある環境にいられることは幸せだと改めて感じた。一緒に授業を受けて、研究発表を聞いて、休み時間を共に過ごして、夜には地元を案内してもらって、普通では手に入れることのできない機会だ。（中略）特に今回は英語のプレゼンの経験が出来て、自分としても成長できた部分もあるのではないかという手ごたえもあったし、それ以外のコミュニケーションももちろん楽しく、仲を深めることができた。」



発表後の質問に答える



本校の台中一中訪問を伝える記事



研究発表をした「科学院」の正面玄関にて

(2) 韓国・釜山国際高校

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013年より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が1月に行われ、3月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行っている。今年度も1月中旬に釜山国際高生が本校を訪れ、有意義な交流を行った（扉の写真）。詳細を以下に述べる。

① 釜山国際高校からの本校訪問 2018年1月22日（月）

釜山国際高校より生徒・高校生9名（男子2、女子7）中学生6名（男子2、女子4）、引率3名（日本語・地理・看護）が本校訪問をした。本校と同じく、附属中学もあるが、中学生の参加は今回が初めてであった。午前中は、50周年会館にて、釜山国際高生と本校自治会生徒・釜山派遣予定生徒との歓迎交流会を行った。まずパワーポイントを使って両校の学校紹介。その後、小グループに分かれて、お互いの意見交換・アトラクション（ダンス披露）。一緒に昼食をとり、校内を案内しながら散策。昼の高校の集会に出てもらい、釜山国際高生代表挨拶、本校も自治会長が歓迎のあいさつを行った。5時間目、授業参加では釜山派遣予定生徒がバディとなり、それぞれの授業に連れて行き、一緒に授業を受けた（わからないところはバディが適宜英語で説明）。本校では、生徒ばかりでなく、教師も国際交流に協力的で、授業プリントの英語版を準備したり、日本語・ハングルを併記しながら授業を進めてくださった方もいた。



小グループでの意見交換



世界史、ハングルで説明

② 釜山国際高校訪問 2018年3月26日（月）～30日（金）

今年度の釜山国際高校訪問は3月末なので、この報告集を作成時点では準備の段階である。しかし、上でも紹介したように、釜山国際生の本校訪問の際には、意見交換やバディ役として既に交流をはじめ、メールアドレスやライン交換を通じて、お互いのやり取りをしている。また、釜山国際高校でのプレゼンテーション（3チームに分かれ、「おすすめの日本観光」、「日本の年中行事」、「筑駒生の1日」のテーマで発表予定）の練習を、イングリッシュ・ルームの講師の下で開始したところである。



プレゼン練習風景

(3) その他の国際交流事業

本校は、立命館高校および横浜サイエンスフロンティア高校と SSH 校の提携を結び、両校のプログラムに参加させていただいている。また、SSH とは関係なく、本校に来た海外体験募集に応募して合格し海外体験をしてきたケースもある。以下、それぞれについて述べる。

① 立命館高校 SSH 重点枠連携プログラム・共同課題研究海外研修（2017 年 7 月 23 日～ 31 日）

立命館高校・SSH 科学技術人材育成重点枠事業「海外校との取り組み」に本校生徒 2 名が参加した。6 月の東京研修で各校ごとに与えられたテーマ（本校は生物）の研究を行い、台湾高雄高級中学で共同研究発表を行った。相手校とのテーマの決定は SNS などを通じてビデオ・カンファレンスを行い、それぞれが独立して研究を進めながら、現地で最終的なまとめを行った（茶の酵素について）。参加生徒は、ホームステイによるコミュニケーションの大切さ、専門研究者の講義を聴くことで化学生物知識の拡大、英語プレゼンテーションによる、プレゼン能力の向上という 3 点について、この研修を大いに評価していた。



高雄高級中学での実験風景



複数の高校からの参加者と

② YSF 高校プログラム・Thomas Jefferson 高校サイエンス研修（米国）2018 年 1 月 4 日～ 9 日

横浜サイエンスフロンティア高校の SSH プログラム「トマスジェファーソン高校サイエンス研修」に、本校生徒 2 名が参加し、米国ワシントン DC 近郊にある同校との交流を行った。ポスター発表、スミソニアン博物館や NASA、国立衛生研究所（NIH）などの研究施設見学も行い、現地の日本人研究者からも、海外で研究者になった経緯など有益な話を伺うことができ、生徒にとって有意義であった。



スミソニアン国立歴史博物館にてファン博士と



ポスター発表を行う

③ キャンプ・ライジング・サン（CRS）による海外研修 2017年6月24日～7月21日

Camp Rising Sun キャンプ・ライジング・サン（CRS）とは、米国の Louis August Jonas 財団によって設立された、1930 年から続く伝統ある国際奨学金サマーキャンプで、米国全土と世界約 30 ヶ国から、14 歳から 16 歳の男女約 60 名前後が集まり、男女別々の時期にニューヨーク州ラインベック（ニューヨーク市の北約 145 キロ）のキャンプで共同生活を送る。本校からは 1 名選ばれ参加した。キャンプの目的は、世界の多様な文化に触れて国際理解を深め、人種・宗教・国籍を超えて友情を築き、リーダーシップと自立心を養うことで、多数の異なる国々の若者と英語のみの生活をほぼ 1 か月にわたり経験することは、参加生徒の心の成長に大きく役立ったようである。



キャンプ参加者せいぞろい（過年度参加者が作った木造の建物で）

（４）その他の交流活動

① タイの Ubon Ratchathani University より本校訪問 2017 年 10 月 18 日（水）

日本の高校の教育システムを見学ということで、タイの大学附属高校生 29 名と引率 7 名が本校を訪れた。理科系に特化したコースの生徒で、女子が多かった。自治会役員生徒及び台湾派遣予定生徒が対応し、午前中双方の学校紹介、小グループによるディスカッション、化学・生物の授業参観を行った。タイのダンスを披露するなど文化交流も行うことができた。



小グループのディスカッション



タイ高校生のダンス披露

② 筑波大学外国人教員研修留学生による本校文化祭などの参観

ここ数年にわたり、筑波大学外国人教員研修留学生を本校の音楽祭と文化祭に招待し、交流する企画を実施している。今年度は6月21日に本校の授業参観、6月24日に音楽祭、11月4日に文化祭に来ていただいた(37期生8名、38期生7名、引率1名)。事後の感想文では、それぞれの行事に対して高い評価をいただいた。



音楽祭（人見記念講堂の前にて）



文化祭（テーマ垂れ幕の前で）

③ 国際交流プログラム参加生徒による報告会 2018年2月17日

2018年2月17日、同年度（前年度）の国際交流プログラムに参加した生徒による報告会が行われた。これは、国際交流に興味のある中学生に対して現地での体験を語り、フィードバックするもので、参加した中学生は、高校での国際交流について展望を持つ良い機会となり、報告した高校生にとっても、自分の経験を下級生に語ることで、もう1度その体験を振り返る機会となった。



3. まとめ～生徒の変容などに関して

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることである。台中一中の研究発表では、高2課題研究で自分の研究テーマとしたものを半年かけてまとめ、それを英語でプレゼンする。釜山国際高校との交流では、3班に分かれた参加者がやはりテーマを決めて、プレゼンの準備をし現地で発表する。つまり、現地での交流以前に、相当に自分を追い込んだうえで異文化生徒との交流をし、また新たな刺激を受けるわけである。当然のことながら、これらの経験を通して、参加者は学力面でも文化面でも大いに成長を遂げる。卒業後、大学で海外留学をし、本格的な研究を行う者が多いこともそれを示している。

今年度は、教育局プロジェクト研究P3国際交流にて、飯田順子先生（附属学校教育局准教授）のご指導で、台中一中派遣生徒の事前・事後アンケートのデータ比較を行うことができた。その結果を次ページに掲載する。統計上も参加者の意識に有意な変化が見られたと報告し、まとめとしたい。

（文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫）

本校、台中一中派遣生徒の事前・事後のアンケートに見る変化について

表1 駒場高校 海外研修 事前事後比較

	項目		事前 (N=16)		事後 (N=16)		t 値	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1.	いろいろな国のの人たちと知り合いになるのは楽しい	1	4.31	0.70	4.63	0.50	- 2.61	*
2.	異なる文化に触れることは、興味深い体験だと思う	1	4.63	0.50	4.75	0.45	- 1.00	
3.	世界の自然を守るために活動している機関を支援したい	2	3.44	1.03	3.69	1.08	- 1.17	
4.	日本は素晴らしい国だと思う	4	3.94	0.57	4.25	0.58	- 2.61	*
5.	今後、さまざまな国の言語を学ぶ気はない	1R	2.06	0.93	1.75	0.68	1.23	
6.	外国で起きたいくつかの歴史的イベントについて詳しく説明できる	3	2.69	1.20	3.25	1.24	- 3.09	**
7.	海外に行ったら、地元の人の習慣に触れたいと思う	1	4.31	0.87	4.56	0.63	- 1.46	
8.	日本の独自の文化や歴史をもっと知りたい	4	3.81	0.66	4.00	1.15	- 0.72	
9.	自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できる	2	4.00	0.63	4.19	0.75	- 1.14	
10.	海外へまた行きたい	1	4.69	0.48	4.88	0.34	- 1.86	+
11.	開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい	2	3.69	1.01	4.00	1.15	- 1.78	+
12.	外国人とはあまり話をしたくない	1R	2.25	0.93	1.63	0.89	3.48	**
13.	英語などの外国語で書かれた新聞や雑誌が読める	3	3.19	0.98	3.56	0.89	- 1.38	
14.	他人の意見を聞ける	2	4.00	0.52	4.25	0.77	- 1.29	
15.	英語以外の外国語を学びたい	1	4.19	0.66	4.25	0.93	- 0.29	
16.	日本の伝統的習慣を説明できる	4	3.50	0.63	3.75	1.00	- 1.07	
17.	困ったときに話し合っ、アイデアを出そうと思う	2	3.63	0.72	4.06	0.85	- 1.96	+
18.	同年齢の外国人が話せる程度に自分も英語を話せるようになりたい	1	4.63	0.50	4.81	0.54	- 1.38	
19.	世界の主な宗教の特色を説明できない	3R	2.69	1.30	2.75	1.29	- 0.17	
20.	多くの外国人と友達になりたいと思う	1	4.38	0.72	4.56	0.63	- 1.86	+
21.	外国語で書かれた新聞や雑誌に関心がない	1R	2.31	0.95	1.94	0.93	1.86	+
22.	日本人であることを誇りに思う	4	3.81	0.75	4.13	0.72	- 2.08	+
23.	困難に直面しても、人と協力して問題解決に取り組む	2	3.69	0.60	4.06	0.85	- 3.00	**
24.	各国に見られる独自の習慣を尊重したい	1	4.19	0.75	4.56	0.63	- 2.42	*
25.	日本の独特な習慣を大事にしたい	4	3.88	0.96	4.44	0.73	- 4.39	**
26.	自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる	3	3.13	0.62	3.75	0.58	- 5.00	**
27.	将来、同僚として外国人と仕事をしたい	1	3.25	0.45	3.69	0.70	- 2.78	**
28.	相手の気持ちを理解しようとする	2	3.94	0.77	4.38	0.81	- 3.42	**

- 1 異文化との交流に対する肯定的意識 2 国際理解における他者理解と協働
 3 国際的事象に関する知識やスキル 4 自国文化への理解・尊重 R 逆転項目

表2 駒場高校 国際的資質尺度短縮版の留学前後の変化（平均得点）

	N	T1	T2	T2 - T1	95%信頼区間		統計値	
		M	M	M	下限	上限	t (df)	
		(SD)	(SD)	(SD)				
異文化肯定意識	16	4.16	4.45	0.29	0.14	0.43	4.29	**
		0.44	0.39	0.27			15	
国際理解における他者理解	16	3.77	4.09	0.32	0.10	0.54	3.09	**
		0.51	0.64	0.42			15	
国際的事象の知識・スキル	16	3.08	3.45	0.38	0.06	0.69	2.51	*
		0.69	0.78	0.60			15	
自国文化への理解・尊重	16	3.79	4.11	0.33	0.53	0.12	3.31	**
		0.46	0.57	0.39			15	

* $p < .05$ ** $p < .01$

<注釈>

表1の28項目の質問は、内容的に表2の4項目に該当する。T1が事前アンケート、T2が事後アンケートの数値で、事前事後の数値の差は（*, **）で示したように、いずれの項目も、統計的に有意な得点の上昇が見られた。

(総合学科 + SGH + IB) × SDGs = APA ?

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成20年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして20年以上歩みを重ね、平成26年度のSGH指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。そしていよいよ、2018年4月から、国際バカロレア日本語DPの1期生が入学する。

「総合学科」+「SGH」+「IB」の学校運営の中で、国連持続開発目標SDGsを実現できる人材育成を目指し、筑坂（つくさか）の未来を考えた2017年度であった。本稿では、本年度はじめてジャカルタで実施した、第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティングおよび、10回目を迎えた海外卒業研究支援制度について報告する。



第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ
—インドネシア5校、SGH校3校が参加—
(2017年8月10日、於：インドネシア政府環境林業省ホール)

2. 第1回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ

SDGs とは、Sustainable Development Goals の略である。2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」で、193 の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（2030 アジェンダ）」が。全会一致で採択された。この、2030 アジェンダでは、「誰一人取り残さないー No one will be left behind」を理念として、国際社会が 2030 年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17 の目標（ゴール）が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）として設定された。

これまで日本国内では、本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012 年から「高校生国際 ESD シンポジウム」を実施してきた。SGH 指定から組織した S-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）のメンバー（本校の 1 ～ 3 年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している）が中心となり、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行ってきた。この活動を海外にもひろげ、本校と海外の学校との実質的な交流を深め、さらには SGH の成果を国内だけではなく海外へも発信していくために、本年度、あらたな取り組みとして、平成 29 年 8 月 10 日、中央ジャカルタにあるインドネシア政府環境林業省のホールにおいて、「第 1 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を開催した。ESD は、広い概念的な言葉のため、各学校の ESD 活動をより具体的に位置づけ、それぞれの関連性を可視化するツールとして有効であると考え、SDGs を用いることとした。

当日は、日本から本校、大阪府立泉北高等学校、中部大学春日丘高等学校の SGH 3 校、インドネシアからは、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、プナブル高等学校、ブカシ国立第 1 高等学校、ダルマガ国立第 1 高等学校の 5 校、計 8 校が参加して実施した。

各学校の課題研究の発表を SDGs と関連付け、発表を行った。当日は、ポスターセッションも行い、これまで国際で実施してきた ESD シンポジウムのノウハウを生かした国際シンポジウムを海外で運営することができた。



日本でのノウハウを生かして
ジャカルタでもポスターセッションを実施



国境を越えた友情がひろまりました



第 6 回高校生国際 ESD シンポジウム@東京も盛況



ポスターには SDGs のマークを記載してわかりやすく

3. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 28 年度までの 9 年間で計 55 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 18 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

29 年度においては 2 年次生を対象に募集した結果、5 名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	フィリピン	フィリピンにおける女性の社会進出に関する研究
B	ベトナム	ベトナムの特別支援教育について
C	タイ	タイの日本語教育について
D	中国	中国の水質問題について
E	フィリピン	フィリピンの英語教育について

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒 A 1 名を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施してきたが、毎年、予算が厳しくなってくる中で、遠方への派遣が厳しいこと、また 2 年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っていることから、渡航先をアセアン+2（中国・韓国）に限ることとした。

フィリピン渡航に関しては、昨年度国際連携協定を締結したフィリピン大学附属ルーラル高等学校、本校の英語科教員（フィリピン出身）が連携して準備を行った。内容も、非常にすぐれたもので、SGH 開発科目「グローバルライフ」・「T-GAP」などの効果が出ていると考えられた。

4. 生徒の変容について

SGH 指定 4 年目に入り、全校を対象にした国際教育活動も浸透してきた。生徒の変容に関しては、詳細は本校の SGH 報告書に譲るが、文部科学省が SGH の成果指標にしている「卒業時における生徒の 4 技能の総合的な英語力として CEFR の B 1～B 2 レベルの生徒の割合」は、指定前はわずかに 3 %であったが、英検 2 級取得者が大幅に増加し、さらに英検準 1 級合格者もでた。

卒業生の追跡調査でも、大学入学後に海外に留学したり、国際交流基金の「日本語パートナーズ事業」により日本語教師として、アセアンの国で日本語教師として活躍する卒業生もでている。今後、このような卒業生の追跡調査も含めて、生徒の変容をとらえていきたい。



カセサート大学附属高等学校とも
国際連携協定を結びました



様々な企業、団体との連携もすすみました

【資料】平成 29 年度 国際教育・ESD 活動一覧（一部抜粋）

月	内 容
4 月	インドネシア・バンドン第一職業高校 生徒 4 名、教員 2 名が来校
5 月	AIMS プログラム筑波大学留学生 41 名来校・2 年次生と交流
6 月	台湾・復興実験高級中学 生徒 83 名、教員 3 名が来校
6 月	長野県上田高校主催「北陸新幹線サミット」生徒 10 名参加・発表
7 月	韓国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員 1 名参加
7 月	3 年生 1 名が姉妹校インドネシア環境林業省附属高校に 1 年留学へ
7 月	3 年生 1 名が姉妹校フィリピン大学附属ルーラル高校に 1 年留学へ
8 月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒 7 名教員 2 名参加
8 月	第 1 回日本インドネシア高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ開催
8 月	第 1 回全国高校教育模擬国連大会 生徒 16 名 教員 2 名参加
8 月	京畿外国語高校主催模擬国連大会 生徒 3 名 教員 1 名参加
8 月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施 生徒 23 名、教員 3 名、筑波大学留学生 2 名参加
8 月	国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（フィンランド）生徒 2 名 教員 1 名参加
8 月	教員 4 名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでカナダ・トロントに渡航
9 月	インドネシア・台湾・カナダから 3 名の留学生が来校（1 年間）
10 月	姉妹校コルニタ高校から 5 名の留学生が来校（3 週間）
10 月	タイ・カセサート大学附属高校カンペンセン校舎 教員視察受け入れ・研究協議
10 月	福井県立高志高校（SGH 校）生徒 25 名、教員 3 名来校、卒業研究発表会で交流
11 月	インドネシア・フィリピン・タイより生徒 8 名・教員 4 名ホームステイ受け入れ
11 月	高校生国際 ESD シンポジウム@東京 2017（第 6 回）開催
11 月	第 3 回 SGH 生徒成果発表会開催 海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
11 月	タイ・カセサート大学附属高等学校と協定校提携調印
11 月	AIMS プログラム筑波大学留学生 42 名来校・1 年次生と交流
11 月	SGH 全国高校生フォーラム 生徒 1 名発表、教員 2 名参加
12 月	フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒 5 名、教員 1 名が来校
12 月	SGH 国際 FW「インドネシア・ボゴールリーダー会議」教員 2 名、生徒 2 名渡航
1 月	イオン 1 %クラブ日本プログラム インドネシア生徒 16 名来校
2 月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒 1 名・教員 2 名がフィリピン渡航
2 月	第 4 回 SGH 研究大会・第 21 回総合学科研究大会開催
2 月	東京学芸大学主催 SSH/SGH 課題研究成果発表会 生徒 8 名参加・発表
2 月	栃木県立佐野高校「海外グローバル研修課題研究発表コンテスト」生徒 1 名招待発表
3 月	1 年次海外校外学習（カナダ・トロント）実施
3 月	イオン 1 %クラブ日本プログラム 生徒 16 名インドネシア渡航

（文責：建元喜寿、今野良祐）

国際的活動への積極性向上を交流相手の変容に繋げる

I 本校の国際教育活動

本校における国際教育活動としては、イングリッシュ・ルーム活動、小学部児童と鍼灸手技療法科在籍留学生との交流会、高等部の先輩を訪ねるタイプログラム、トビタテ！留学 JAPAN への参加、毎年対象国を決めて調査・発表を行う高等部国際交流部の活動、高等部英語科の授業での取り組みが、ここ数年継続されている。こうした活動を通して、幼児・児童・生徒が外国人と接することへの抵抗感を持たなくなったのみならず、積極的に働きかけたり、自ら目的意識を持って活動する等、国際的活動への積極性が向上している。年間を通した国際教育活動の継続がこうした変容をもたらしたもののといえる。

また、専攻科鍼灸手技療法科へのアジア各国からの留学生（就学生）受け入れは、さらに以前から継続されている。そのため、日本人生徒は留学生との日常的な交流を通して海外への興味・関心や国際活動への積極性を持っている。一方、留学生側も帰国後、タイの大学で教員となったり、モンゴル、マレーシア、ベトナム、ミャンマー等で視覚障害者団体のリーダーとなり、母国の視覚障害者のために活動しており、本校の国際教育活動が相手国に大きな変容をもたらしたといえる。昨年度の国際教育活動で、先に帰国した先輩留学生を訪ねたミャンマー人留学生は、日本に留学した先輩のマッサージ治療院で、治療の技術に加えて電話の応対、白衣等の身だしなみ、室内の清潔等が、ミャンマーにある他の視覚障害者の治療院と大きく異なることを実感し、自らも留学終了後にこうしたことをミャンマーで広めたいという意識を高めた。これも本校の国際教育活動が相手国に変容をもたらした事例といえる。

今後は、高等部をはじめとする他の部における国際教育活動においても、これまで達成してきた本校幼児・児童・生徒の変容に加えて、本校の国際教育活動による対象者や相手国の変容という観点からも活動をとらえ、対象者・相手国の変容がさらに本校の変容につながる相互関係に発展するように活動を展開していきたい。

（文責：黒岩 聡）



チェコ留学における化学実験の様子

Ⅱ 海外で活躍する先輩を訪ねて 憧れの世界で活躍する先輩を目指して！ タイプログラム

1. 海外で活躍する先輩を訪ねてこんにちはプログラムについて

本プログラムは、海外で活躍する先輩のもとを生徒たちが実際に訪れ、本校卒業生やタイの盲学校の生徒たちとの交流や、視覚障害当事者や支援者との交流を通して、異文化や視覚障害者のアクセシビリティを学ぶプログラムである。本年度で第3回目の実施となり、タイで「アークどこでも本読み隊」を運営され、活躍されている本校卒業生の堀内佳美さんやタマサート大学障害学生支援センター職員のジンタナーさんと共に5日間、バンコクを中心とした研修を実施した。

2. 主な活動内容について

日程：2017年12月19日（火）～23日（土）

研修生：4名 高等部普通科1・2年 男子生徒1名、女子生徒3名

① モンティアン先生（全盲の国会議員の先生）との会食会

タイの障害者が暮らしやすい生活環境を整えるために、法律・権利制度を見直していった実情と課題について先生からお話を伺った。また、日本の視覚障害教育について意見交換ができた。

② タイ盲人協会（TAB）訪問、意見交換会

タイ盲人協会の設立から現在までの歴史について、視覚障害者の教育や就労がどう変わってきたのかを伺った。また用具部も訪問し、タイでの生活・学習補助具を実際に見ることができた。

③ バンコク盲学校訪問と生徒同士の交流

音楽の授業見学やゴールボールの交流試合をした。また生徒たちの前で、研修生による発表会を行い、地元について、日本での日常生活や本校の学校生活、障害者スポーツについて各自報告した。

④ ホームステイ体験

タイの文化を直に体験したいという研修生の強い思いから、タイの視覚に障害のある小学生がいる家を中心に、1人1家庭のホームステイ体験が実現し、家庭での生活や文化の違いについて実体験した。

⑤ タマサート大学キャンパス体験及び学生との交流

障害学生支援センターに在籍する学生とペアになり、1日共に過ごすことができた。日本語や日本文化に興味のある学生が多く、研修生は積極的に英語やジェスチャーなどを用いながら交流を深めた。

⑥ タイでやってみたいことの実現と堀内さん・ジンタナーさんとの交流

堀内さんがタイで移動図書館を運営されるようになったきっかけなど、たくさん話が伺えた。将来、国際舞台で障害者リーダーとして活動する意識を向上させることができた。



3. 研修を通して学んだこと（研修生の感想）

高等部普通科1年 原 理子

モンティアン先生からタイの視覚障害者の教育制度や就職に関する話、現在でも働くことのできない視覚障害の方もいるという事を聞き、驚きました。日本とタイを比較し、日本の制度が現在に至るまでに多くの人の努力と時間がかかって、積み上げられた結果ということを改めて感じました。

高等部普通科1年 三好里奈

英語圏ではない国の人たちと、どうコミュニケーションを取ると良いか、またその難しさを実体験できた。普段あまり使わない、指を指す、手で幅を表現するなどのジェスチャーが役に立ち、相手に理解してもらえることが多かった。より相手に気持ちが伝わるためのスキルをこの研修で獲得できた。

高等部普通科2年 岩井迫孟徳

この研修で一番印象深いのは、現地で暮らす障害者当事者の方々からの話である。特に日本の環境とは異なり、タイでは視覚障害者が街中をどう安全に移動しているのかを調査できた。タイの障害者支援の実情、障害者が安心して生活できる政策と、法の整備に向けての動きを知ることができた。

高等部普通科2年 鈴木琳子

ホストファミリーとは主に英語で会話していた。最初は話の流れを読み取り、自分の脳内で英語から日本語に変換するまで時間がかかっていた。しかし、時間が経過するにつれ、英語の発音やアクセントなどが自然と聞き取る事ができ、会話がより弾み、楽しい時間を過ごすことができた。

（文責：佐藤北斗）

Ⅲ トビタテ！留学 JAPAN 世界の中で共に生きる～チェコ留学から未来に向けて～

1. トビタテ！留学 JAPAN の制度でチェコ共和国へ

トビタテ！留学 JAPAN（以下、トビタテ）高校生コースは将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する制度である。

本校では本制度を利用してのチェコ共和国（以下、チェコ）への留学を積極的に行っており、昨年度は高等部の生徒2名が留学を果たした。本年度も昨年に引き続き、高等部2年の生徒4名がトビタテのアカデミック・ショートコースに合格し、3週間チェコに留学する機会を得た。

2. 主な活動内容について

2017年9月16日（土）～10月8日（日）19日間 リベレツ（2週間）およびプラハ（1週間）

○ Základní Škola a Mateřská Školá Pro Tělesně Postižené LIBEREC（リベレツ特別支援学校）

- ・本校の紹介や盲学校教育、日本の伝統文化を紹介するムービーを、iPadを活用して渡航前に生徒たちが作成し、その動画をもとに発表した。また、生徒同士の交流と行事への参加、化学や数学などの授業参加、心のケア「リラクゼーションルーム」での取り組みを学ぶことができた。

○ Speciálně Pedagogické Centrum pro zrakově postižené（リベレツ視覚支援センター）

- ・本年度も視覚支援センターにて、リベレツでの支援の実情を学んだ。視覚障害の生徒が在籍するインクルーシブ教育校も訪問し、共に授業を受けた。また、センターに在籍する生徒たちと、チェスキーライ（リベレツにある山）に出かけることで交流を深められた。

○ Gymnázium pro ZP a SOŠ pro ZP（プラハの視覚支援学校）

- ・本年度はプラハで1週間の研修を受ける機会を得た。日本とチェコの盲学校の環境や教育の違いを授業を通して学習した。社会や生活の授業において、日本の歴史やニュース（日本の出来事）をテーマにしながら、生徒同士の交流が活発に行われた。また、寄宿舎で生活したため、生徒たちがおにぎりを作り、振る舞うことで、日本文化を伝えることもできた。

3. 研修を通して学んだこと（生徒の感想）

高等部普通科2年 藤岡郁弥

最初はリベレッツ特別支援学校が用意してくれた授業に参加することで精一杯だったが、学校生活に慣れてくるにつれて、自分の受けた授業を先生にリクエストして、授業を受けさせてもらった。生物と地理はチェコ語だけの説明だったが、周りの生徒が地図を見せてくれたり、授業内容を英語で説明してくれたりと多くのフォローを受けながら、授業を受けられたことが自信につながった。リベレッツ特別支援学校は、私にとって第2の母校となった。

高等部普通科2年 横山政輝

チェコの人たちとのコミュニケーションに最初は苦労したが、簡単な英語と留学前にチェコ出身の筑波大学の留学生から習ったチェコ語を使うことで、だんだんと笑い合うこともできるようになった。お互い伝え合うことの大切さをこの留学を通して学ぶことができた。また、プラハの盲学校の社会の授業では、「原子力発電についてどう思うか」や「フグの食べ方」などの難しい質問を受け、驚きの連続だった。これほどコアな質問をする分、日本に興味を持ってくれている生徒が多いことがわかった。

高等部音楽科2年 田中綾乃

私はこの留学で、音楽家として、とても大切なことことに気づくことができた。私は普段、クラシック音楽を学びながら、その音楽が作られたときの様子や時代背景などを調べ、想像するが、文字や写真で見ると、実際にその場所に行くことで新たな刺激がたくさん得られるということを発見した。音楽家にとって音楽が生まれた土地に行き、そこに広がっている情景や溢れている音に出会うことで、音楽との向き合い方を変え、音楽をより深く、より身近なものとしてとらえることができた。

高等部音楽科2年 橋本 陸

チェコの異文化を実体験できる貴重な留学だった。リベレッツやプラハでできた仲間たちと共に、チェコの文化をたくさん吸収できることが、何より楽しかった。そして、日本のイメージを僕たちで払拭でき、正しい日本の文化を伝えられた。言葉の壁はあったものの、言葉以外のコミュニケーションを用い、工夫することで相手と理解し合い、物事を共有できた瞬間が嬉しかった。

（文責：佐藤北斗）



Ⅳ 高等部国際交流部 きっかけはスウェーデンからの留学生「The World of Friendship」

1. The World of Friendship 活動について

The World of Friendship 活動とは、本校高等部国際交流部の生徒が、文化祭に向けて生徒たちが興味のある国について取り上げ、展示という形で紹介する活動である。本年度はスウェーデン王国について取り上げた。きっかけは、4月に本校高等部がストックホルム市トンバ高校から受け入れた弱視生徒の短期留学をきっかけに、本校とスウェーデンとの国際交流が広がっていったことからだった。留学生は国際交流部にも参加し、お互いの文化や言葉について紹介し合う等により、スウェーデンを深く知ることができた。その後、国際交流部の生徒たちは、スウェーデン大使館の訪問や留学生との skype での交流会を開くなどして調査を進めていき、文化祭で成果を発表した。



(文責：高等部国際交流部顧問 佐藤北斗)

Ⅴ 話してみよう、聞いてみよう！通じるかな？僕の、私の英語

～ Friendship English Lesson について～

英語科

本校高等部1年と東京都調布市にあるアメリカンスクール（ASIJ）の生徒とスカイプを活用して交流授業を行っている。今年度で2年目となる。文化祭終了後の11月から3月までの、月曜日および火曜日の5時限目の授業13：20～13：30で毎週約1回、計16回実施である。2台～3台のiPadを用いて1台で1ペアずつ英語で会話をしている。

正味10分をいかに充実したものにするか。これを最優先にして行った。

まず話題を右の表のように設定をし、これを基にASIJの生徒が質問を作成し、教員が少し修正をする。質問数は15問から20問。これをプリントで事前に配布し、授業内にペアで応答の仕方や表現を学び、口頭練習で慣れた後、実際のスカイプのレッスンに臨む。当日は質問プリントも、応答文を書いたノートも見ないで会話をを行う。10分の間、次々と質問、応答をしていく。例えば、話題がHobbiesの質問の一部は次のようなものである。

回数	Topic
第1回	Self-introduction
第2回	Oshougatsu
第3回	Hobbies
第4回	School Life
第5回	Dream

- (1) Do you have a hobby? (2) What is it?
(3) When do you usually participate in your hobby?
(4) How did you get interested in your hobby? 等。

例えば(4)の応答を考えているとき、生徒から「先生、『気がついて見ると読書が好きになっていった。』は何ていうの？」などの質問があり、それを授業で共有する。

事前に日本人学習者同士で応答練習しているので、スカイプレッソンの当日は自分の答えは速答という形ではない。が、自分の発音した英語が通じるか、確認する場である。また本校生徒が質問した内容に対してのASIJ生徒からの応答はfirst listeningになる。この質問の応答はculture exchangeとなり、双方の学校の生徒が楽しんでいる場面である。普段、英語を書くことを億劫に思う生徒もノートに書いて準備している。相手がいるレッスンであり、相手から“Nice. や “Cool!” と反応があり、やりがいを感じるのではないだろうか。

3月には、実際に対面して交流をする運びとなった。前は小グループでクッキング活動をした。今年度は ASIJ の生徒 15 名と本校の国際交流部と高等部 1 年の希望者で集まり、何か実物を触ったり聞いたり見たり味わったりしながら、文化紹介や学校紹介活動をして交流を深める。声のみの交流から、実際に対面しての活動となり、交流が深まることを期待している。



最後に、高等部 1 年生では特に中学英語から高等学校の英語の移行するなかで、英文の量や質でハードルを感じ興味、関心を落とす生徒も少なからずいる。そのような中で、この Friendship English Lesson は、生徒たちに「実際に使う英語」を意識させる機会となっている。（文責：大橋映子）

Ⅵ 本校小学部の「国際教育活動」～「外国語活動」と「英語クラブ活動」を両輪として～

1. 本校小学部の国際教育活動の特徴

本校小学部の国際教育活動の特徴は、5、6 年生の週 1 回（45 分）の「外国語活動」と、1 年生から 6 年生までの月 2 回の「英語クラブ活動」を両輪とする「国際教育」という「車」を走らせていることである。また、月 1 回は 1、2 年生合同参加の「子ども会」活動の一環として、英語を学ぶ“Kids' Club”も実施している。そのゴールは、遠くには、将来世界の舞台で活躍できる「国際人」として「使える英語・通じる英語」、近くには、「中学校での学習につながる英語」の基礎を習得することを目指している。そのために指導者は常に発音、文法ともに「正しい英語」を話し、児童にも、不正確な表現を言ったり聞いたりすると「うっ、何かおかしい…」と即座に感じる「絶対語感」（『我が子に伝える「絶対語感」 外山滋比古 飛鳥新社 参照）を身に付けさせることを旨としている。

「外国語活動」では、文部科学省発行の“Hi, friends!” ①、②を使用して、その『指導編』に準拠しつつ、視覚特別支援学校で使用可能な指導案を工夫している。その補助手段として、盲児、弱視児、重複障害のある児童が共に学ぶ本校で使用可能な独自の「ユニバーサル教材・教具」の作製に努めている。そうした教材・教具作製に当たっては、使用する児童の主体的な意見を取り入れ、支援教育の専門家である教諭の目を通し、更に、本校中等部や高等部の卒業生の触察によるアドバイスも取り入れて、試行錯誤を繰り返し、入念に作製することを心がけている。

「英語クラブ活動」においては、『指導編』に言う「英語に慣れ親しむ」手法は主に幼稚部で取り入れ、小学部からは、本校で学ぶ「自立活動」にも通じ、「実生活で役立つ英語」のカリキュラムを組んでいる。1 年生から 6 年生までを通し、各月、季節に応じた英米の「子供の歳時記」をテーマに、関連の用語や伝承童謡やチャンツを通して、子供の視点で異文化や海外のマナーにも触れ、英語を楽しく学んでいる。

「外国語活動」及び「英語クラブ活動」の指導案作成に当たっては、学年、参加児童の実態に即して、共通して以下のことに留意している。

1. 「既知の学習事項」を使って「未知の学習目標」を導入する
2. その内容を丁寧に「練習」し、「定着」させ、「応用・発展」学習へと導く
3. 「絶対語感」をつけさせるため、指導者は常に「正しい英語」使用に努める
4. 「自立活動」に必要な位置感覚（上下・左右）や、「実生活」に必要な用語（天候・時刻・暦）などは、教科書の学習「課」に依らず、適宜毎活動時に繰り返し取り上げていく
5. 英米の子どものマナー、常識などにも「耳学問」として常時触れる

2. 2020 年度からの「教科としての英語」の教育法試案

新指導要領では、「教科としての英語」指導に当たっては、文字や文法も取り入れ、「聞く・話す・読む・書く」の 4 技能の習得を目指すという。従来の歌やゲームを楽しみながら「英語に慣れ親しむ」

という、児童にとっては受け身の学習のみではなく、「聞いて話す」「読んで書く」という積極的な自己表現のできる学習が求められる。それに伴い、指導者にも更なる指導法の工夫研究が求められる。

2013年夏、本校では5年生の全盲女子を家族の転勤に伴って、米国の公立小学校へ送り出す経験をした。その後2年余の保護者の報告書から得た「海外校で役に立つ小学生の英語」の知見は、①アルファベット文字に精通していること②通じる会話には文法（語順）の知識が必須であること③他教科での発表には、作文能力と口頭発表能力が必要であることの3点であった。

グローバル化の時代に、視覚特別支援学校からも海外転校生の出現する可能性を考慮した時、「今後求められる英語」はまさに、「海外校で続きが学べる英語の基礎」と考えられる。

3. 今後の課題

本校では現在、5、6年生には2-①に関しては、ルイ・ブライユ考案の点字法に基づき、数字と関連して「文字の形」を、児童が選んだキーワードによる“The Phonics Jingle”で「文字の音」を指導している。2-②の語順は、本校独自の教具「形による文章作成ボード」により、教科書にある例文を使って、一般動詞、be動詞、助動詞（can）の平叙文肯定・否定、一般・特殊疑問文までゲーム感覚で指導している。

今後の課題として、2-③の「作文」を、「起・承・結」あるいは「結・理由」の順で意見を発表する練習を、“Show and Tell”などの手法を導入して行っていく必要があると考えられる。口頭発表に必要な「正しい発音」、特に「日本語にない音」の指導方法が次の大きな課題である。一般校でも“th”や“f”, “v”の「音の可視化」に力を入れるが、本校では、音の聞き分けに加えて、的確な「口頭による説明」が必要であり、更なる「触れる音の教具」の工夫と作製が急務と考えられる。

（文責：小学部 股野儼子）

VII 鍼灸手技療法科の国際教育活動

今年度の鍼灸手技療法科の国際教育活動内容は、毎年行っているアジア等各国からの留学生の受け入れ（各年2名）に加え、2013年からのJICA草の根支援事業で本校がインドに初導入した、盲学校における日本式手技療法教育のフォローアップ活動を行っている。主な内容は、1. インド盲学校における日本式手技療法教育に対する、筑波大学教育局からの修了証の発行（今年度分）。2. 本校教員による、インド国立視覚障害者支援施設に1年間滞在（自己啓発休業）しての日本式手技療法教育指導、及びその臨時教員養成課程運営、さらに生徒への日本語指導である。

インド国立視覚障害者支援施設からの要請を受け、鍼灸手技療法科の寺崎（国際教育拠点係）が昨年4月より北インド、ウッタラーカンド州デラドゥーン市にある当施設に滞在し、現地で手技療法教育（インドではJMMT: Japanese Medical Manual Therapyと呼んでいる。）を行うインド人教員への追加指導、及び将来日本への留学を夢見る生徒達への日本語点字教育（ヒンディー語、1日1時間）を行いつつ、新しく教員を養成するための臨時教員養成（英語8ヵ月課程）を運営した。

教員養成課程は西インド、グジャラート州から来た4人の候補生（2人は理学療法士、2人は日本式手技療法科卒業生）を対象に、1日5時間（座学3時間、実技2時間）の授業を行い、西洋、及び東洋医学を含めた日本式あん摩の理論と方法を指導できるように訓練した。知識を身につけ、診察や施術が行えるのは勿論、それを盲学校の生徒に説明し、理解させるための指導法、模型作成等の教材作りも含めて指導を行った。彼らが今後のインド盲学校における手技療法教育を支えていくことになる。インド国内での教員養成施設常設に向けた計画も、



教員養成課程、洗濯紐を使った
腕神経叢模型作成の様子

JICA インド事務所と協議中である。インド盲学校における日本式手技療法教育の自律的運営に向けて歩を進めた一年となった。

(文責：鍼灸手技療法科国際教育拠点事業係責任者 寺崎 直)

Ⅷ 2017 年度 本校生徒・卒業生 国際大会参加報告

- 1 ドバイ 2017 アジアユースパラ競技大会に高等部普通科 2 年の鈴木海人君が参加した。
出場競技；陸上競技 種目および結果；100m 走 12"89 金メダル、走幅跳 5 m 30 で金メダルを獲得した。

アジアパラユース大会は 4 年に 1 回 アジア地区で 20 歳以下を対象とした大会である。
本校のクラブでの練習の他に 夜や休日に大きい施設に行き練習を重ねていた。

- 2 2017 ジャパンパラゴールボール大会 8/4-8/6 千葉ポートアリーナにて
出場国 日本 カナダ ギリシャ 韓国に本校鍼灸手技療法科 3 年の安室早姫と 本校卒業生の若杉遥 天摩由貴が日本代表チームとして参加し 優勝した。

また タイで行われた 8/19-8/27 アジアパシフィックゴールボール選手権では 女子チーム優勝 男子チーム 3 位という結果でした。男子チームには 本校卒業生の 信澤用秀、小林裕史、川島悠太の 3 名が 代表選手として参加した。

ゴールボールの選手たちは 日頃の練習場所が無いために 日中は大学や会社で仕事をし 夕方から本校体育館に週 3 回集まって練習をしているのが現状である。

- 3 2017 IPC 世界選手権水泳大会に本校卒業生 木村敬一 小野智華子が代表選手として選出された。
開催地のメキシコシティーは標高が 2100M あり 4 月、6 月と高地トレーニングを海外で積み重ねて 8 月の合宿から大会に臨んだが 現地入り 2 日目にメキシコ大震災に遭い大会は延期になり 残念ながら日本選手団は不参加となった。選手団全員無事に帰国することが出来た。
メキシコ震災で犠牲になられた方々に ご冥福をお祈り申し上げます。
また 復興されることを願っております。

卒業生の水泳選手達は 毎日夕方都内のプールで練習をしている。
タッピングやコーチングなど必要に応じて、勤務後に合流して練習をしている。

(文責：寺西直人)



鈴木海人選手 伴走者との記念写真



2017 日本代表女子ゴールボールチーム

聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下「本校」）における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、本校生徒が国際教育推進事業の経験により、聴覚障害者の中や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

2. 平成 29 年度パリ聾学校相互訪問交流教育の推進事業報告

2003 年以来姉妹校締結をしているフランスの国立パリ聾学校との相互訪問交流を通じて、異文化を理解し、グローバル社会の中を生きる力を育成するために、今年で 6 回目を迎える相互訪問交流が平成 29 年 12 月 11 日から 16 日にかけて行われた。昨年度はテロの影響で教員のみの交流であったが、今年度は生徒 10 名を引率して交流ができた。以下、交流の事前準備も含めて報告する。



歓迎セレモニー後の集合写真

（1）事前学習

パリ聾学校との交流参加は希望制であったが、教員の予想を大きく上回り、20 名以上の応募があった。本校生徒が他国の聾者と関わり合いを持つ機会は少ないため、生徒の興味関心が高まったと思われる。結果的に意欲的な生徒が集まってくれたので、今年度は交流方針として「生徒の自主的・主体的な活動を通して、生徒自身が興味関心のある分野を見つけ、積極的に学習に取り組むこと」とした。そして、事前学習として興味を持って調べたいことのアンケートを取り、その結果を大まかなグループに分けて調べ学習を進め、発表会を行った。

例えば「言語」のグループでは、フランス語やフランス手話などを中心に調べ、パリ訪問時のコミュニケーションのきっかけを作れるような学習を心がけさせた。「常識」のグループでは、訪問前に注意しておかなければならないことを生徒自身が把握し、相互に説明できるようになることを考え、お金や服装など生活に密着した内容を調べさせた。その結果、現地において生徒たちは迷うことなく筆談や簡単なフランス語を使って買い物や移動を行うことができた。本校のように耳の聞こえない生徒の場合、場に応じて臨機応変に対応することが難しいため、事前学習の必要性を改めて感じる。

また、生徒の側から「ビデオレターを作成したい」という提案があり、自己紹介 VTR を作成し

た。英語で全員の自己紹介と好きな日本文化の紹介をし、パリ聾学校の生徒にもわかりやすくするために英語字幕を付けた。生徒に向けたビデオレターということだったので、英語が得意な生徒に字幕等の最終確認もさせ、責任を持って最後まで自分たちだけの力で取り組ませた。このビデオレターはパリ聾学校の英語の授業で活用されており、後述する英語授業参加において相手が既知の友達が来たような雰囲気で接してくれるきっかけを作り、生徒の授業参加をスムーズにさせる効果が得られた。



抽選の様子



生徒ミーティング



事前発表会

(2) パリ聾学校訪問

訪問1日目は10時から歓迎セレモニーが両校の教員紹介、生徒による自己紹介と日本文化紹介の順で行われた。日本文化の紹介では事前に準備していたスライドや簡単なフランス手話や指文字を用いるなど相手に理解してもらおう、積極的にコミュニケーションを取ろうという姿勢が垣間見られた。相手の学校の生徒もそれに応えてくれる形で、代表の生徒が壇上に上がり、日本とフランスの手話表現を相互に確認し、教え合う場面も見られた。

終了後はパリ聾学校の生徒と一緒に昼食を食べた。生徒はわからない表現がある場合、ジェスチャーや持参したiPadを使った筆談でコミュニケーションを取っていた。また、昼食後の休憩時間には男子がサッカーを行った。相手校の生徒の身体の高さに圧倒されながらも、言語を介さないで交流ができるので楽しくサッカーに没頭していた。終了後に生徒からは、「自分たちの学校と比べると運動レベルが遙かにパリ聾学校の方が上の生徒が多いと感じた」、「基本的には休み時間には身体を動かす生徒が多いらしく、その辺りから本校とは違う」など、学校間の差を実感する体験ができたようだった。



到着直後、触れ合いの様子



歓迎セレモニー教員紹介



相互に手話を教え合う様子

午後は13時半から18時まで校内見学、授業参観が行われた。園芸科では生徒が実習するビニールハウスや肥料作りの見学をした。ただ栽培するだけではなく、年に数回教員や地域の人にも販売をし、しっかり売れるものを学習段階から作っていくという姿勢が感じられた。さらに、生徒が昼食で残した残飯を捨てることなく発酵させて肥料に使っていた。無駄なものをなくし、資源を大切にすることの大切さには生徒たちも感心していた。

次に体育の授業に参加をした。体育はパリ聾学校の中学生と合同で授業を受け、半分ずつ2チームに分かれて足を使ったバレーボールのようなスポーツを行った。特徴的だったのは、教員が生徒の状況を適宜判断して、使用するボールを様々な種類のボールと変更することで生徒に飽きさせない工夫がされていた。お互いのチーム内でパスをすることも可能だが、ボールを落としてはいけないなどチーム内でも交流ができるようなルールになっていた。そのため、生徒たちはお互いに譲り合いながら蹴る人を決めるなどチーム内でコミュニケーションを取りながら参加することができた。

体育終了後は、被服科、衛生設備科（配管）、木工科の見学をした。生徒の「専門の職業を勉強することが将来の職業につながるのか」、「就職先はどのようなところがあるのか」といった質問に対し

て、「被服科では有名ブランドに就職する生徒も多くいるし、パリは古い石造りの建物が多い町だから配管工が大切にされる」という説明を受け、生徒たちは学校の学習がそのまま職業に活かされる社会の構図があることを理解し、だからこそ学習意欲も向上するのではないかと考えている生徒もいた。



園芸科見学



体育の授業参加



木工科見学

訪問2日目も園芸科の見学から始まった。園芸科では2人の生徒が季節や需要に合わせて花や野菜を作る様子を説明してくれた。現在では機械化も進み、土壌整理には機械を使うなど技術の進歩に合わせて学習内容が変化していく感じが感じられた。その後、蜂蜜作りの部屋で蜜蝋キャンドルを作った。蜜蝋キャンドルとは板状に加工された蜂の巣で作る蝋燭であり、灯心に紐を巻き付けるという簡単なものであったが、生徒たちは初めて触る蜂の巣の感触や匂いにそれぞれが興味津々であった。また、部屋の中には蜜蝋に細工をほどこした様々な形のキャンドルが置いてあった。生徒は同じ素材でも全く別のもののように変化する蜜蝋に興味を持ち、どのように作成するのかを質問する場面もあった。

終了後は音楽室に移動し、1時間半ほどパリ聾学校の中学生2グループと交代で音楽の授業を体験した。色鮮やかな音楽室にはドラムやギターなどの楽器が置かれており、日本の音楽室との違いに驚いている様子だった。特に、音を振動で感じるができる装置があり、音を聞き取ることが難しい生徒でも肌で音を感じて楽しめる工夫がされていた。生徒たちは1グループ目の中学生たちとそれぞれが好きな楽器を持ち、指揮者の指示に従いながらセッションを楽しんだ。正解がないセッションの中で各々がリズムを感じながら活動できたので、生徒も恥ずかしがることもなく参加していた。2グループ目の中学生とは二人一組で、手拍子に合わせて自分達が考えたジェスチャーを交代で行うゲームを楽しんだ。出来るだけパリ聾学校の生徒と本校の生徒がペアを組むように配慮をしてくれたので、ジェスチャーには日本のお笑い芸人の動きなども混じってパリ聾学校の生徒も楽しんでいるようだった。複雑なコミュニケーションを必要としない、参加型の授業だったので生徒同士も意気投合する様子がみられた。2日目になると、サインネームを使って自分を表現したり、簡単な言葉はフランス手話を使って話をしたりする生徒もあり、生徒の順応力の高さには驚かされた。



蜜蝋作り体験



音楽の授業①



音楽の授業②

午後は英語の授業に参加後、校内・寄宿舎見学、フランス手話の授業参観をした。

英語の授業ではパリ聾学校の生徒が

What are your hobbies? Do you like French food? What did you already taste?

というような簡単な質問をし、本校の生徒が答えるという形で進んだ。基本的に口話中心で行われたため本校の生徒が理解することは難しかった。そこで、適宜本校教員が内容をホワイトボードに書き取り、生徒に示すという形を取った。解答に迷う生徒がいる一方で、積極的にパリ聾学校の生徒の隣に座って筆談等で会話を楽しむ生徒もあり、積極的に交流をする生徒はそれだけ適応も早いことがわかった。

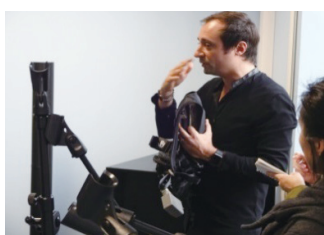
授業見学後、生徒が教員と一対一で口話を学ぶ教室を案内された。生徒がさわりながら音や画像を感じられる機械や背中から振動を感じる機械など日本ではあまり見られない機械が敷設されており、本校の口話学習の部屋との差に生徒たちも興味を持って眺めていた。特に、自分が話している声の大きさが自覚できる機械や周波数によって音を変えることができる機械などがあり、使う場面は見られなかったが、教員にとってもこのような機械があることを知るよい経験となった。

パリ聾学校の寄宿舎見学では、寄宿舎が校舎上層部内に併設されており、学校と一体化した寄宿舎という印象を強く持った。他にも個人の部屋にシャワールームや洗面台がついており、日本よりも個々人の生活を重視した環境が整っていた。一方で、個人の部屋とは別に皆で集まる部屋もあり、休みの日には生徒が集まって食事をする話を聞き、個人と集団両方の生活を大切にしている環境が垣間見られた。

最後に短い時間ではあるが、フランス手話の授業に参加した。VTRを見ながら「çava」（元気、大丈夫）や「salut」（やあ）といった基本的なフランス手話を体験した。基本的に手話の授業はVTRを見て日常使うような単語を見て、まねて学習をしていく様子が見て取れた。



英語の授業



背中で振動を感じる機械

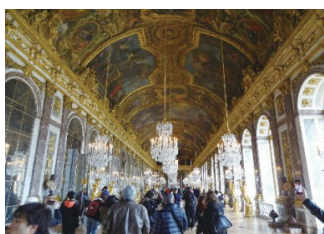


寄宿舎で歓談

訪問3日目はパリ聾学校の生徒と一緒に文化施設を訪問した。ここでも数名の生徒が交代で参加してくれたので、生徒同士で文化施設を見学することができた。このように今回の交流は全体を通して、生徒主体の充実した交流が行われたと思われる。そのことは生徒の事後アンケートからも窺えた。



ベルサイユ宮殿



ベルサイユ宮殿・鏡の間



クリスマスマーケット

(3) 事後学習

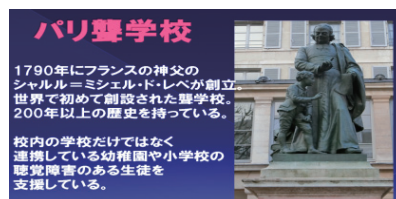
帰国後、生徒たちによる事後発表会を行った。生徒たちは自分達で担当を決め、「暮らし」「文化」「コミュニケーション手段」などについて現地での体験を通して気付いたこと、日本との違いなどを本校の生徒に向けて発表してくれた。また、事後アンケートでは交流を通して、環境に配慮して生活することの大切さや異文化理解の深まりを感じた生徒が多かった。コミュニケーション面では「思っていた以上に相手に伝わる」という感想を持つ生徒もあり、日本人はもっと積極的にコミュニケーションする必要があると感じていた。



事後発表の様子



質疑応答



スライドの例

(文責：芳之内修、松本 愛、伊藤詩織、高木智史)

附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告

1. 本校の国際教育の特徴

本年度、附属大塚特別支援学校は主に以下の国際教育に関する取り組みを行った。

- ① 本校高等部における国際教育の取り組み（TIAS 留学生との交流会等）
- ② JICA 研修生の受け入れ
- ③ インドネシアとの教育研究交流

それぞれの活動について以下に報告する。



【チバガンティ特別支援学校（インドネシア）との国際交流協定調印式】

2. 本校高等部における国際教育の取り組み

本校高等部では、国際理解学習を通してオリンピック・パラリンピック教育を推進している。授業は「総合的な学習の時間」のなかで、オリンピックやパラリンピアン、つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）留学生との交流会を設定し、交流相手の国々や自国についての自然、文化、伝統について調べ、発表する学習に取り組んでいる。

単元の指導計画では、「国際理解」と「伝統・文化」、それぞれ2つの柱において以下の目標を設定している。

「国際理解」：多様な民族・自然・文化・産業などの学習を深めることを通して、興味・関心を世界の事柄に広げる。

「伝統・文化」：日本の伝統と文化の理解を深める学習を通して、郷土を大切にし、他国を尊重する態度を身につける。

今年度、前期に取り組んだ学習活動を以下に紹介する。

- ① 「総合的な学習の時間」による、自国の「伝統・文化」について調べて紹介する学習と学校のPR動画やオリジナル楽曲を作って交流会で発表する学習に取り組んだ（継続中、3学期に TIAS 留学生と交流会を企画）。

【生徒の様子】

ここ数年間に取り組んでいる交流会では、留学生の出身国の言語や文化について興味を持ち、自分から留学生に質問する様子が見られるようになってきており、「次は、自分たちの国のことを伝えよう」という動機が高まっている。

1 学期は、日本の伝統的な遊びやゲームについて調べ、坂戸高校の生徒に紹介したり、オリジナル

のゲームを考案して活動したりした。交流相手に向けて、自分たちが調べたことを発表する経験を通して、うまく伝えるためのまとめ方を考える生徒や、積極的に人前で表現しようとする生徒が増えてきている。



② 交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業として企画した筑波大学・坂戸高校・TIAS 留学生との交流会。筑波大学体育専門学群野外活動場にてデイキャンプを実施した（8月28日）。

【生徒の様子】

筑波大学の学生によるネイチャーゲームに TIAS 留学生、坂戸高校生徒、本校生徒が参加し、自然体験を通して互いの仲間関係を深めることができた。昨年度から TIAS 留学生との交流を行なっている本校生徒は、コミュニケーションの壁を感じさせず、身振り手振りを織り交ぜながら積極的に関わる姿が印象的であった。

今回は、交流相手が大学生、高校生、留学生と多く、また野外の活動であったために、じっくりと留学生と話をすることが設定できなかった。しかし、インド出身の TIAS アカデミックスタッフが用意した本格インドカレーの昼食をとりながら楽しく談笑し、インドの食文化についての話題を共有することができた。



③ 未来のオリンピックとの交流会を企画し、アルゼンチン女子卓球選手（アグネスティーヌ・ナオミ・イワサ選手）を招聘した（9月4日）。

【生徒の様子】

現在、アルゼンチンの代表として日本で練習している選手と卓球交流を行った。高等部は、昼休み卓球を行う生徒が多く、馴染みのあるスポーツである。アルゼンチンの選手とのラリーを経験した生徒達は、日頃の練習について、アルゼンチンの言葉や食べ物について、日本のどこに観光に行ったかなどについて質問した。本校生徒は、これまでの国際理解学習で学んできた経験が生かされているようであった。



【教師から】

高等部では、諸外国に対する生徒の興味・関心を育てるためには、実際に外国の人々と交流する機会を作るなかで、相手の国の名前、言語、身近な生活や文化について知りたいという動機を高めてい

くことが重要ではないかと考えた。年間通してオリンピックやパラリンピアン、筑波大学の留学生との交流会を企画し、直接的な関わりの場を設定することが、生徒達の学びの意欲を刺激し、主体的に学習に向かう姿勢や生活の中で諸外国についての事柄を探したり、知ろうとしたりする気持ちが育まれると考えている。

(文責：中村 晋)

3. 海外からのお客様へのおもてなしー JICA 研修の来校に機会を活用してー

特別支援教育研究センターでは、毎年 JICA 研修生を受け入れており、筑波大附属の 5 つの特別支援学校の視察が研修プログラムに含まれている(研修プログラム名「障がいのある子どものための授業づくり 2017」：以下；JICA 研修)。附属大塚特別支援学校では、これまでも JICA 研修の機会を活用して幼児・児童・生徒に対し国際教育を行ってきた。

本年度は、事前に海外からお客様をお招きする際の「おもてなし」について学ぶ機会を設定し、JICA 研修生と給食の時間に交流する機会を設定した。

本校には知的障害を主障害とする 3 歳から 18 歳までの幼児・児童・生徒が在籍しており、その障害種はダウン症、自閉性障害など様々である。今回の取り組みでは合同朝会における「おもてなし講座」への参加は、内容に応じて幼稚部を除く小学部、中学部、高等部の児童生徒 65 名を対象とした。給食の時間を活用した交流は、幼稚部、小学部、中学部、高等部の幼児児童生徒 75 名を対象とした。

① 合同朝会における「おもてなし講座」の実際(11月27日)

おもてなし講座の前に、特別支援教育研究センター教員が、JICA の研修生が大塚特別支援学校に来て、給食の時に交流する旨を伝えた。スライドで国旗と研修生の顔写真を写し、視覚的にわかりやすいように提示した。

おもてなし講座では、筑波大学客員教授江上いずみ先生をお招きし、外国のお客様への「おもてなし」をテーマに児童・生徒向けに講演をしていただいた。

内容は、笑顔で目を見て挨拶をする大切さ、握手の仕方、英語での簡単な挨拶等で、江上先生は知的障害の児童生徒にもわかりやすい例を用いて紹介してくださった。握手はしっかり握る、握手の時は両手ではなく右手です、握手の時おじぎはしない…等々、児童生徒だけではなく、一緒に講演を聴いていた教員にとっても参考になる話が多く、勉強になったという声が聞かれた。



【おもてなし講座の様子】

② 給食の時間を活用した交流(11月30日)

11月30日に JICA 研修員 12 名が本校を来校した。研修生の出身国は、ケニア、レソト、フィジー、ミャンマー、ベトナム、アフガニスタン、サモア、ソロモン諸島、モンゴル、パラオの 10 カ国である。

給食の時間に、各クラスに 1～2 名の研修生が入り、給食の準備・片付けの様子を見学し、幼児・児童・生徒と交流をした。交流の例を挙げると、高等部では、生徒が自己紹介をし、研修生からも自己紹介をした。研修生の話を、熱心にメモをとる生徒もあり、海外に興味をもつ生徒の様子がみられた。中学部では、イングリッシュルームの予算で ALT の先生に来てもらい英語の授業を普段から実践していることから、積極的に英会話でコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿が多くみられ

た。自分の好きなものをタブレットを見せながら紹介するなど、ICT ツールを活用した交流も行われていた。小学部では、英語のやりとりは難しい面もあったが、子どもたちは研修生とダンスをしたり様々なコミュニケーションをとったりしており、「笑顔は最高のおもてなし」という江上先生のお話を実感するような場面が多くみられた。幼稚部では研修生に給食の様子を見ていただき、教員が間に入り子どもたちと研修生のコミュニケーションをはかる様子がみられた。



【JICA 研修生来校時の様子】

③ まとめ

JICA 研修生との交流の前に、江上先生の「おもてなし講座」でおもてなしについて学ぶことで、学校全体で温かい気持ちで JICA 研修生を受け入れることができたと感じた。海外からのお客様の見学には慣れている子どもたちではあるが、海外の方と実際にコミュニケーションをとる機会は、ALT の先生の英語の授業を行っている中学部以外はそう多くはない。今後 2020 年東京オリンピック・パラリンピックを控え、海外の方と関わる機会は増えていくと思われるが、実際にコミュニケーションをとる機会とともに「おもてなし」の基本を学ぶ機会を設定していくことで、幼児・児童・生徒にとってより豊かな学びの機会となるのではないかとと思われる。

(文責：本間貴子)

4. インドネシアとの教育研究交流

本校は、今年度より 2 年間の計画で、インドネシア共和国のチパガンティ特別支援学校（私立）との国際教育研究交流協定を踏まえたに教育研究交流に取り組んでいる。具体的な内容や方法については、現在チパガンティ特別支援学校と協議中であり、2 月に交流協定締結式を行った。

それに先立って、11 月に本校より 2 名の教員がインドネシアを訪問し、チパガンティ特別支援学校の視察と、授業参観および授業研究会における指導助言、そして国立インドネシア教育大学（UPI）において教育行政担当者、大学関係者、教員、学生に向けて「日本における個別の指導計画と個別の教育支援計画」についての講演を行った。以下、インドネシア共和国への教育交流派遣に関する概要を紹介する。

① インドネシア共和国への渡航計画

11 月 20 日（月）～11 月 23 日（木）

11/20 移動：東京 → ジャカルタ → バンドン

11/21 チパガンティ特別支援学校の視察・授業参観・授業研究会

11/22 インドネシア教育大学（UPI）での講演 移動：バンドン→ジャカルタ

11/23 移動：ジャカルタ→東京

② チパガンティ特別支援学校の概要と視察の状況

チパガンティ特別支援学校は、知的・発達障害児を対象として 1927 年に設立された、特別支援学校である。校長のジュハナイニ先生は、インドネシア教育大学の教授であり、学校を運営する「特別支援教育財団」の依頼で校長をつとめている。小学部から高等部段階まで全校で 89 名の児童生徒が在籍している。また、卒業生の移行先が十分でないというインドネシア共和国の事情から、27 名の卒業生が通所している。この他、学校の職員や指導スタッフとして卒業生が雇用されている。寄宿舎

があり、平日はそこで生活している生徒もいる。



③ チパガンティ特別支援学校における授業参観と授業研究会

チパガンティ特別支援学校では日本の授業研究の手法を取り入れた授業研究会をおこなっている。今回は本校教員の訪問に合わせ、授業研究会を実施した。実施に先立ち、2つの研究授業を参観した。1つは、初任者であるメリンダ先生による中学1年生の学級におけるスندا語（インドネシア、ジャワ地方の言語）の授業、およびハヌン先生による中学部の体育の授業を参観し、2つの授業について協議する授業研究会を行った。最初に、西ジャワ州教育局の指導主事の先生より、指導案の書き方、目標設定のあり方について、助言があった。その後、2つの授業について、本校教員2名より優れている点と、授業の手だての改善のポイントについて、生徒の授業の様子に基づきながらコメントをおこなった。



④ インドネシア教育大学における講演

インドネシア教育大学（UPI）からの依頼で、バンドン市域の特別支援学校教員とインドネシア教育大学の障害児教育学部の学生を対象として、日本の個別の指導計画（IEP）と個別的教育支援計画（IESP）を紹介する講演をおこなった。西ジャワ州全体からの参加者を得て、500名の参加があった。

講演では、日本で取り組まれている個別の指導計画と個別的教育支援計画の概要と運用の方法を紹介し、その上で、日本の特別支援教育は「自立と社会参加」を目指しており、個別の指導計画や個別的教育支援計画もそれを達成するプロセスの中で取り組まれていることを論じた。さらに日本における「自立と社会参加」には職業的自立が重要視されているため、卒業生の就労の状況や卒業後の生活に向けてどのような進路指導をおこなっているかについて論じた。

フロアーとの間で、日本の知的障害者の卒業後の生活の様子や個別の指導計画の運用に関する細かいプロセスについて質疑が行われた。



（文責：田上幸太）

上述のように、本校とチパガンティ特別支援学校の交流は、2017年11月に本校の教諭2名が相手校を訪問するかたちで交流が開始されたが、2018年2月には、チパガンティ特別支援学校校長と教諭1名を本校に招聘し国際交流協定調印式（2月9日）を行った。国際交流協定調印式に先立ち、イ

インドネシアの先生がたは、2月7日に本校の授業の視察および今後の交流への意見交換に参加。8日には本校の卒業生がはたらく福祉作業所の「やまどり」を見学し、9日には「第53回知的障害児教育研究協議会」に参加した。今後2年間の交流事業においてお互いに実りある研究交流の実現が期待される。

(文責：本間貴子)



【調印式の様子】



【左：ジュハナイニ校長、右：柘植校長】

国際的視野を広げ、積極的に自己発信する桐が丘

1. 本校の国際教育の特徴

国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育は、これまで国際交流協定を締結している韓国・社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校や、昨年度に同協定を締結した台湾・国立和美実験学校と同・国立南投特殊教育学校との交流を中心に取り組んでいる。両国に児童生徒の代表が赴き、各学校の児童生徒との交流活動や公共交通機関の利用体験などを通じ、社会の様子やバリアフリー環境などの異文化を体験している。帰国した代表児童生徒は代々自己の体験を報告し、国際交流体験は広く校内で共有されてきた。近年は、外国人研修生や留学生と交流する機会も充実し、児童生徒の挨拶や交流活動時の物怖じしない様子に、国際教育の取り組みが徐々に浸透し、本校が掲げる目標の実現に着実に向かっている手応えを感じ取ることができる。

今年度は台湾交流のみとなり、国際交流協定締結に関する教員同士の手続きが昨年度で終了したため、本格的な生徒同士の直接交流を開始する年となった。そこで、訪問当日の交流を円滑に行うために、代表生徒が所属する学年全員の簡単な自己紹介のスライドを事前に送付し、交流が代表生徒だけでなく学校全体に広がるような機会とした。

また、2020 年に行われる東京オリンピック・パラリンピックが徐々に児童生徒に意識され始めており、外国人に積極的に接し、コミュニケーション力を高めようとする気運が高まりつつある。



国立南投特殊教育学校訪問



国立和美実験学校訪問

2. 活動報告

(1) 台湾 国立南投特殊教育学校・国立和美実験学校訪問

昨年度、両校ともに国際交流協定を締結し、今年度より生徒同士の交流をより一層深めていくための訪問となった。

期 日：平成 29 年 11 月 5 日～8 日（6 日に南投特殊教育学校、7 日に和美実験学校）

参加者：生徒 2 名【高等部 1、2 年男子】

教員 3 名【校長、教員 2 名】

① 国立南投特殊教育学校

南投特殊教育学校（以下、「南投」）は、主として知的障害のある児童生徒を対象とする学校である。しかし、肢体不自由を併せ有する児童生徒も在籍しており、障害の程度が重度である者を対象に、校内で理学療法や作業療法が行われている。小学部 2 学級、中学部 2 学級、高等部 6 学級の計 10 学級という規模に比べ、校舎は大変大きく設備も充実している。高等部は職業訓練が中心で、清掃、園芸、ケータリング、軽作業等の授業がある。

訪問日には、最初に双方が学校紹介を行った後、校内を案内してもらった。その中で、実際に訓練に使用されている設備や機器のいくつかに直接触れることができた。そして、生徒同士の直接交流として二つの授業に参加した。一つは体育館でパラ・スポーツのボッチャを行い、もう一つは教室で本校生徒が一人ずつ日本文化紹介のスピーチを英語で行った。それぞれが興味のある分野を選び、一人は若者に人気の芸能人について、もう一人は日本の伝統芸能である歌舞伎について紹介した。時折り、通訳者や南投の先生が間に入り補足説明をする場面もあったが、彼らにとって初めての海外でのスピーチを無事終えることができ、安堵と充実感に包まれていた様子であった。その後は、同じ教室で南投の生徒と一緒に過ごし、給食時間を共にした。配膳から片づけまでのほとんど全てを生徒たちが行っている姿を見て、本校生徒は「自分たちも見習わなくてはいけない」と感想を漏らしていた。



ボッチャ交流



給食交流



視線運動訓練機器体験



訓練用バイク体験



英語による
日本文化紹介

←「歌舞伎」

「芸能人」→



昼食で学校訪問は終了となったが、午後は「全国障害者親子スポーツ大会」と呼ばれるイベントの開会式に参加した。代表者のスピーチや関連団体のパフォーマンス等を鑑賞して、台湾での障害者の社会参画の様子を見て学ぶことができた上に、突然の依頼で本校生徒がステージ上に呼ばれて挨拶をすることとなった。午前中の交流で緊張が解けていたのか、本校生徒たちは堂々と英語で自己紹介を行った。1人は、念のため練習してきた中国語での自己紹介を披露する場となり、聴衆の拍手大喝采を浴びることとなった。その物怖じせず臨機応変に対応する姿には、痛く感心させられた。

この日の夕食は夜市へと出向き、地元の食文化に触れた。日本の屋台に似た雰囲気ではあるが、それは主に夏祭りに限られたものである。毎日行われている台湾の夜市は規模も大きく、客も店の人も活気に満ち溢れており、直接訪れたことは台湾の食文化や国民性を肌で感じ取ることができる貴重な体験となった。



② 国立和美実験学校

和美実験学校（以下、「和美」）は、本校と同じ肢体不自由特別支援学校で、小・中・高を合わせて生徒数が500を超える大規模校であり、普通科の高等学校も併設している。挨拶や校内見学を済ませた後に、授業に参加することとなった。英語の授業に参加することは事前の打ち合わせで承知していたが、約40名の普通学級に案内されたことには驚いた。それでも、本校生徒はこれを好機ととらえることができたようで、和美の生徒たちの大歓迎にとっても嬉しそうに笑顔で応えていた（写真1）。最初に、和美の生徒による太極拳の演舞披露があり（写真2）、続いて2、3人のグループごとに台湾文化の紹介が行われた（写真3）。



写真1



写真2



写真3

その後で、本校生徒のスピーチとなった。前日の反省を活かして、まずは和美の生徒に質問することから始めたところ、その反応が予想以上に大きく、教室全体が一体となってスピーチは進行した。特に、歌舞伎を紹介した生徒は実際に稽古に通っていることもあったため、この日は歌舞伎の化粧である隈取（くまどり）を施してスピーチを行い脚光を浴びた（写真4）。スピーチの後には、和美の生徒から代表的な台湾料理を差し出され、談笑しながらそれを食した（写真5）。これは、原稿を準備して行うスピーチとは異なり、その場でのやりとりになるので、短時間ではあったが直接交流を図る上で最も意義のある一場面となった。

その後の昼食は控え室でとることになったが、そこでは和美の生徒のギターの弾き語りとともに民謡「野ばら」を合唱した（写真6）。「野ばら」はシューベルトの曲ではあるが、日本人にとっても馴染み深い歌である。日本人と友好関係を築くような内容の、台湾で人気のドラマにおいて使われてい

たため、我々のために選んでくれたという話を事前に聞いていた。本校生徒たちは台湾の人々のおもてなしに心を打たれたようで、前夜から移動のバス内でも懸命に練習に励んで当日の合唱に臨み、和美との絆を深めることができた。



写真 4



写真 5



写真 6

以下に代表生徒の感想を抜粋する。

- ・台湾の人々の温かさに触れ、英語力・台湾語力のスキル向上につながられた。
- ・バリアフリーの観点では、車いす量・障害を持つ人の多さには驚いた。
- ・3日目夜のレストランでのダウン症の人の雇用などを見て、多様化・共生化社会のあり方という点では台湾を見習うべきだと思った。
- ・物事への瞬発力。2日目の突然の式典参加挨拶にも臨機応変に対処できた。
- ・夕食時はどこの店も混んでいたのも、自炊はあまりしていないようである。車や電車、特にバイクに乗る人が多く、徒歩や自転車はあまり見なかった。
- ・無愛想な人というのがおらず、特に学校の先生や生徒は予想以上にフレンドリーだった。
- ・自分の車いすの踏破性能をだいたい把握できた。

(2) 高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

平成 29 年 12 月 12 日、高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。留学生との交流は今年度で 12 年目となり、「自国の文化や環境を見直すとともに、他国について調べ理解しようとする中で、様々な人々が多様な環境のもとで文化を育んできたことを学び、視野を広げる」こと、「様々な手段で意思疎通を図ろうとする体験を通して、言語の異なる他者とのコミュニケーションに対する積極性を養う」ことを目的とした学習を行った。

今年度は、ブラジル、インドネシア、ベナン、ブルキナファソ、モロッコの 5 か国 5 名の留学生を迎えた。国際交流実行委員である生徒たちが企画・運営して、留学生から教わりたいことと留学生に伝えたいことの二部構成にすることにした。前半は、留学生からの自己紹介を通して 5 か国の文化を学び、後半は、5 グループに分かれてテーマごとに生徒によるプレゼン・質疑応答を留学生がローテーションで回り、日本文化や肢体不自由者の生活について伝えるという内容で行った。テーマは、事前打ち合わせで留学生の方から直接意見を収集して、「桐が丘の生徒の通学方法や学校生活」「日本の英語学習」「日本文化」「日本のスポーツ」「日本食」の 5 つとした。これら 5 つのテーマについて、生徒は事前学習を通して自国文化理解を深めながら、それをプレゼンテーションソフトを利用して英語で発信することに加え、留学生との質疑応答を通して、実践的なコミュニケーション能力を身につけることができた。

また、今回の実行委員長は台湾を訪問した生徒が立候補した。実行委員会の運営や各学年の生徒たちとの連携に主体的に行動を起こした。交流会当日においても、全体の司会だけでなく、意欲的に留学生との会話を膨らませてグループの活動を牽引するなど、台湾訪問での経験を遺憾なく発揮することができた。



留学生自己紹介



グループトーク



(4) 小学部と JICA 研修生との交流

11月27日（月）、28日（火）の2日間、JICA 研修生10名（モンゴル、ベトナム、ミャンマー、アフガニスタン、パラオ、ソロモン、フィジー、サモア、ケニア、レソト）が来校し、28日の5校時には1・2年生が交流の時間をもった。研修生の自己紹介において、ベトナムではフォー、オセアニアの国々ではタロイモを食べることや、ほとんどの国がお風呂はシャワーや水浴びのみで、国によっては川や海で体を洗うことなどを教えてもらい、日本は水に恵まれていることを実感することができた。その後、児童が英語で自己紹介をして、研修生と一緒に歌やダンスで盛り上がった。中には、ベトナムやケニアの言葉であいさつする児童もいて、相手に伝わった時はとても嬉しそうであった。普段の総合的な学習の時間等で学んできたことが実際に生きた、貴重な機会となった。



3. 児童・生徒の変容

海外からの来校者と触れ合う機会が校内外において統合的に活用されている。総合的な学習の時間や特別活動と各教科が、普段から横断的に指導されているため、JICA 研修生や筑波大学留学生との交流会や台湾訪問などでその成果が表れている。とりわけ、台湾を訪問した生徒の一人は校内で開催された報告会において、「英語弁論大会に出場したい。」と今後の抱負を述べた。このように、学校生活の中で与えられた活動に積極的に取り組むだけでなく、主体的に校外にも活動の場を探し求める姿勢が身についてきたことは、本校の国際教育の成果を上げつつあると言える。

この成果は是非とも2年後の東京オリンピック・パラリンピックにつなげていきたい。2020年には現在在籍している高等部の生徒は卒業している。それまでに、生徒が東京オリンピック・パラリンピックに向けて主体的に行動を起こせるように、体育科や英語科、社会科だけでなく、どの教科においてもオリ・パラ教育を意識して指導にあたるべきである。本校の生徒は元来、おしゃべりが好きで人懐っこく、学習に熱心に取り組むことができる。その良さや学習の成果を最大限に発揮できる実践の場を最大限に活用するために、今後の国際教育をより一層充実させていきたい。

附属久里浜特別支援学校の国際交流

1. 本校の国際教育の特徴

本校は、毎年、海外から多数の見学者があり、本年度は、10を超える機関、団体から約100名が来校された。幼児児童は、見学者に授業や活動の様子を見ていただいたり、時には一緒に遊びや活動を通して触れ合ったりする機会となっている。教師にとっては、本校の子どもたちや学校、そして自閉症教育の実践について紹介し、時には感想や意見をいただく機会ともなっている。また、姉妹校との間で定期的に授業研究会を実施すること、海外からの依頼に応じて受け入れ型の研修を行うこと、そして本校教諭が海外の機関等で研修を受けて学ぶこと、などを通じて海外の人と交流し、文化の理解を深めたり、グローバルなコミュニケーション力を高めたりしている。

2. 活動報告

(1) アメリカ TEACCH センターへの教員派遣研修事業

平成29年8月7日（月）～11日（金）の5日間、アメリカノースカロライナ州ウィルミントン TEACCH センターで、幼稚部、小学部、寄宿舍の教職員8名と東京経営短期大学の三宅篤子先生とで研修を受けた。本校では平成24年度に、同センターから3人の先生を迎え、研修会を行っている。本研修では、事前に、同センターとメールでやり取りをして、内容を決めた。



TEACCH センターの前で

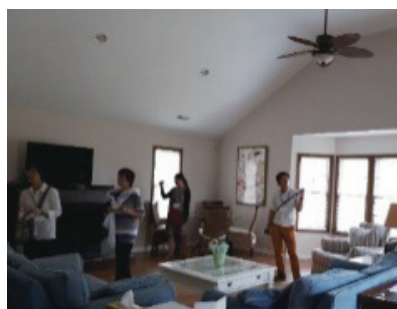
まず、本校のアセスメントの実施状況や実態把握に基づいた指導実践を知らせ、フォーマル及びインフォーマルなアセスメントの方法やその分析について学びたいことを伝えた。また、子供に合った教材・教具やその教授の仕方について、できるだけ実際の子供たちと関わる様子を見たり演習をしたりしたいと要望した。さらに、地域での大人の自閉症の方々の生活を知るために、グループホームの訪問、ジョブコーチ支援や働いている様子の見学、月に一度の自閉症の青年の夕食会への参加を要望し、それらはすべて実現した。また、特別支援学級のある地域の小学校の見学や障害のある人たちが働いているコーヒーショップにも出掛けた。

初日には自己紹介と学びたいことについて一人ずつスライドを使って説明をした。また、最終日には学んだことや感想を発表した。英語で苦戦したが、センターの先生方には伝わったようだった。TEACCHの概要や自閉症の人の学び方など基礎的な内容の講義も受けたが、資料のまとめ方も分かりやすく見習うべきところが多かった。最新の研究である FITT（幼児の家庭生活支援）についても情報を得た。

特に、3歳児の子供たちの指導の様子は現場でしか見れないものであった。子供の些細な反応をしっかり受け止め、子供に合った言葉掛けや教材・教具の提示、思わず子供が注目してしまうような先生の表情、楽しい雰囲気の中で学習している様子を見学できた。ねらいが明確で、アセスメントとの結び付が理解できた。指導のフィードバックなど保護者とのやりとりの一部を見ることができた。その直後、同じ教材・教具を使って、本校の教職員が子供役となり、デモンストレーションを行い、理解を深めた。



自己紹介等



グループホームの見学



見学後のデモンストレーション



20年以上続く夕食会(30人程の参加)



「何をどうやって教えるか」



感想や学んだことを発表

その後、校内で研修報告会を行い、情報を共有するとともに、成果を生かしつつある。今回の訪問の中心となったアセスメント委員（本校のアセスメントを運営する委員会）や研究部員はそれぞれの分掌で成果を発揮し、具体的な子供との関わり方についてもすぐに生かし、さらに磨きを掛けている。また、TEACCHを参考にしながら、日本や神奈川、横須賀の文化や現状を理解し、その中で本校が果たす役割を考え、自閉症のある人の生活を支援する体制づくりなど、時間を掛けて進めていく予定である。今後も、ウィルミントン TEACCH センターと意見交換し、学びながら進めていきたいと思う。

（2）受け入れ型研修：中国達敏学校（姉妹校）

7月10、11日の二日間、達敏学校の教員10名に対し、以下の内容で研修を行った。

本校紹介、施設見学、授業参観、寄宿舎見学、小学部交流学习見学、給食見学及び体験、授業研究会、講義（幼稚・小学部の教育について、寄宿舎の生活について、小学部交流学习について、教材教具について）、幼稚部実習、歓迎交流会



講義では、5つのトピックから2つを選んでいただく方法で、達敏学校のニーズに応じられるようにした。講義資料については、パワーポイントを用い、写真と簡潔な言葉で説明し、スムーズな理解を促した。また、資料は事前に中国語翻訳したものを当日に用いた。



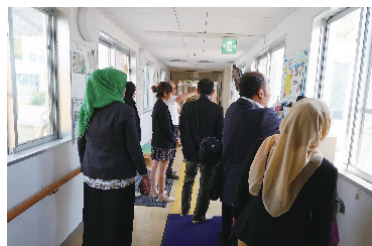
授業研究会では、翻訳した指導案で児童の実態、授業の進行、教師のねらいなどを参照しながら授業を見学できるようにし、後の授業研究会で質疑応答や意見交換が活発に行われるようにした。質疑応答では、音楽という教科や、単元の目標設定の仕方、授業・単元・教科それぞれの評価方法、そして事前のアセスメント方法などへの質問や達敏学校での実際についても紹介され、活発な意見交換の場となった。



歓迎交流会では、達敏と本校の教員が食事、餅つき、ダンスを通じて交流を深めた。餅つきでは、各校の教員がペアとなり、息を合わせて交互に杵で餅をついたり、周囲は日本風、中国風それぞれの掛け声で応援をしたりして大変盛り上がった。ダンスでは、達敏教員が国民的人気のダンスを披露し、本校教諭も見よう見真似で踊った。本校は、盆踊りを紹介し、全員で大きな円を作って一緒に踊りを楽しんだ。

(3) 海外からのお客様との交流

本校には、毎年、海外から多くのお客様がある。本年度は、様々な国々から約 100 名が訪問され、授業や生活の様子を見学したり、幼児児童と一緒に活動を行ったりした。本校は、幼稚部（3 歳～5 歳）と小学部 6 学年からなる学校で、幼児児童は、海外からのお客様に気付いて始めは「怖い。」と言うこともあったが、回を重ねると、教師がするのを見て自らも「ハロー！」と挨拶をしたり、お客様から「ありがとう。」と言われると自ら相手と視線を合わせて「ありがとう。」と応じたりするようになってきた。また、お客様に近付いて自分の好きなおもちゃを見せたり、手を差し出して遊びに誘ったりするなど、積極的に関わろうとする幼児児童の姿も見られるようになっている。以下、幼児児童の様子を写真で紹介する。



インドネシアより
幼稚部：施設見学



オーストラリアより
幼稚部：生活場面



タイより
幼稚部：フロア遊び



タイより
幼稚部：庭遊び



JICA アフリカより
幼稚部：教室遊び



インドネシアより
幼稚部：生活場面



中国より
小学部：給食



JICA アフリカより
小学部：休み時間



韓国より
小学部：玄関前で記念撮影



インドネシアより
小学部：個別の課題学習



タイより
小学部：自立活動



中国より
寄宿舎：生活場面

JICA 研修「障害のある子どものための授業づくり」を終えて

1. 研修の概要

本センターは独立行政法人国際協力機構（JICA）筑波からの委託により課題別研修「障害のある子どものための授業づくり」を行った。本センターがこの研修を行うのは昨年度に引き続き2回目であり、プログラム構成および参観先の調整など研修全体のコーディネートをした。

研修員は昨年から引き続いてのケニア、レソト、フィジー、パラオ、ソロモンのアフリカ・オセアニア諸国に加え、今回はアジア諸国からの研修員も迎えた。アフガニスタン、ミャンマー、ベトナム、モンゴル、サモアからも今年度初めて参加し、世界の広い地域から合わせて10カ国12名の研修員が参加した。研修員の役職はそれぞれ違うが、いずれも特別支援教育・インクルーシブ教育に携わり、障害のある子どもの教育について熱心に取り組んでいる。

本研修の目標は障害のある子どもの授業づくりのために、個別の指導計画が導入されるようその中身や活用方法について検討することであった。

主な研修の内容は、附属特別支援学校5校およびインクルーシブ教育の実践校である守谷市立大井沢小学校の参観、筑波大学人間系障害科学域を中心とした講師による特別支援教育・インクルーシブ教育に関わる講義、本センターの教材・指導法データベースや附属特別支援学校で実際に使っている教材を用いた演習などであった。

2. 研修の様子

<講義>

講義は日本の教育と特別支援教育の概要と現状、日本のインクルーシブ教育、アセスメント、個別の指導計画・自立活動等について、障害のある子どもの教育を考える上で必要と考えられる内容について多角的に学び、毎回熱心な質問に時間が足りなくなるほどだった。

公立学校の元教員で現在は退職されているお二人にお話いただいた講義「通常学級で学ぶ子どもたち—ある難聴学級での取り組み—」「特別支援学校のセンター的機能」については、研修員からとても印象に残ったという

意見が多く上がった。
ご自身の経験と実践をもとに講義をしてくださり、大変熱意のある講義に研修員も感銘を受けていた。また、退職された元教員の方が講師をするという人材の活用についても参考にしたという感想があった。



人間系障害科学域・岡崎慎治先生によるアセスメントの講義

<参観>

学校参観は筑波大学附属特別支援学校5校と茨城県守谷市立大井沢小学校を訪れた。

附属聴覚特別支援学校では、小学部4年算数の研究授業の参観とその後の授業研究会にも参加し、活発な意見交換を行った。授業研究会に実際に参加することにより、指導案のポイントや授業研究会の進め方がわかり、実際に取り入れていきたいという研修員もいた。附属視覚特別支援学校では高等部家庭科調理実習を見学し、視覚障害者の日常生活に関わる技術的な指導を初めて見たという声が複数あった。また、附属視覚特別支援学校と附属久里浜特別支援学校では寄宿舎を見学した。それぞれ入舎している児童生徒の発達段階や実態が違うため、特色ある寄宿舎生活の様子や役割があることを説明され、寄宿舎に関する質疑も熱心であった。附属桐が丘特別支援学校と附属大塚特別支援学校では短いながらも研修員と子どもたちとの交流の時間をもつことができた。附属大塚特別支援学校では昼食をそれぞれの教室に分かれて一緒に食べ、その時間がとても印象に残ったという研修員の感想が多く聞かれた。また、桐が丘特別支援学校では、小学部1年生6名と2年生5名が教室に研修員たちの国旗を飾って歓迎し、ともに1時間を過ごした。子どもたちは自分の好きなものを一生懸命英語と画像で紹介し、研修員にも好きなものを質問したり、一緒にダンスをしたりして笑顔あふれる時間となった。

唯一の通常学校の参観であった大井沢小学校では、普通小学校における特別支援の実際、特に特別支援学級の授業を参観した。ある特別支援学級の授業では、1年生から6年生までの児童がグループに分かれておにぎりを作る活動と一緒に参加させてもらった。5、6年生の先輩たちは研修員たちにも後輩たちにも手順や作り方を教えてあげながら率先して動き、最後にみんなでおいしくおにぎりを食べた。大井沢小学校では日本の一般的な学校の様子も見ることができ、特に1年生の給食準備の様子を見た研修員らは、1年生ほどの小さい子どもも自分たちで役割を決めて食事の準備をしているということに驚いていた。

いずれの学校においても障害特性と子どもの実態に応じた特別支援教育の実践を見ることができ、研修員にとっては大きな収穫となった。しかしながら、研修員らの国の事情に照らし合わせると、附属の特別支援教育や日本の学校とのギャップは少なからずあり、こんな風に自分の国でも障害のある子どもたちの教育ができれば・・・という思いは研修員らの感想から伺えた。



算数の研究授業を参観（附属聴覚特別支援学校）



授業研究会に参加（附属聴覚特別支援学校）



学校参観の様子（附属久里浜特別支援学校）

<ワークショップ・演習（データベース・教材紹介・指導案作成）>

本センターの教材・指導法データベースは、附属特別支援学校5校で実際に使われている教材を障害種別や単元・活用場面によって簡単にボタン検索ができ、170以上の教材が英語に対応している。これを用いることで研修員に多くの教材を紹介することができた。

最初にデータベースの概要と操作・検索方法についてマニュアルに沿って説明し、一人一台のPCで使い方を一通り体験した。また、英語の教材集（パンフレット）を作成し、PCでデータベースを見る前にいくつかの教材を知ることによって興味が高まり、実際にデータベースでたくさんの教材を見てくれた。教材を見た後3グループに分かれて情報を共有してもらい、感想を聞いた。



データベースで教材を閲覧する研修員

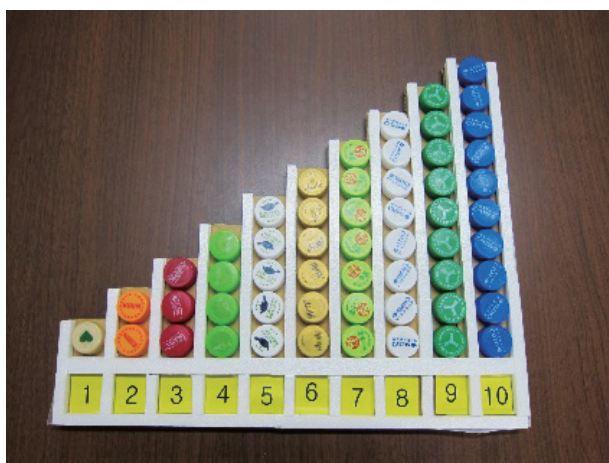
【研修員からの感想】

教材名：『Sea Kayak Challenge（シーカヤックに挑戦しよう！）』



パラオは海に囲まれているが、障害のある子はあまり海に連れて行ってもらえないことがよくあるので興味をもった。カヤックのようないろいろなウォーター・アクティビティがあることを子どもたちに気づかせてあげたい。パラオの竹で作られた伝統的なイカダについても教えてあげたい。（パラオからの研修員）

教材名：『Stairs of Numbers（数の階段）』



この教材は子どもたちが数を学習するのにとてもいい。障害児だけではなく他の子どもたちにも使えて、対象がとても幅広いと思う。違う材料や色でこの教材を作ろうと思う。コストがかからずリサイクルですぐ手に入る材料で作れるのもいい。この教材をアレンジして100までの数を学ぶ教材を作りたい。マグネットを使ってアレンジすれば肢体不自由の子どもにも使える。また、指先を使う微細運動のトレーニングにもなる。（多くの研修員から）

教材名：『Javelic throw practice string（ジャベリックスロー練習紐）』



ケニアのカリキュラムではゲームとスポーツは主要な部分。視覚障害のある子どもがゲームに参加する機会を拡げることができる。この教材は槍投げの方法を教えるだけでなく、メートルなどの長さを教える算数の授業でも使いたい。さらに知的障害のある子どもに体の使い方や手と目の協応を教える際にも使えると思う。（ケニアからの研修員）

教材についてはデータベース上で見るだけでなく、実際に各附属特別支援学校で使われているものをいくつか持ってきて紹介した。実物の教材に触れることへの研修員の関心は高く、その場での質問も多く聞かれた。日本の特別支援教育で利用されている教材に関心をもち、自国での指導に活かす方法や教材の開発等を考えることができたようであった。自作教材を含め、身近なものを生かして教材を作る工夫や応用ということが理解され、障害のある子どものための教材は高価で入手できないという課題に対して、たくさんのヒントを得られたという研修員からのコメントもあった。



実際に教材に触れ、笑顔の研修員

演習では「数の学習」について、授業計画の立て方や実際の指導法と授業改善をテーマとして指導案の作成を行った。数に関する教材を持ってきて紹介し、それらの教材を指導案の中に取り入れたり自身で教材を考えたりして、それぞれが独自の発想をもって授業展開を考えた。研修員はそれぞれに対象の子どもをイメージして、自分が授業をするならこうするという思いが詰まった指導案を発表した。

現在は直接子どもの指導に関わっていない研修員も多いが、教材を前にするとみんなこれはどんなふうに使えるかということに思いが膨らんで、いきいきと取り組んでいた。



数に関する教材を手に指導案を考える



自作の教材で指導案を作成

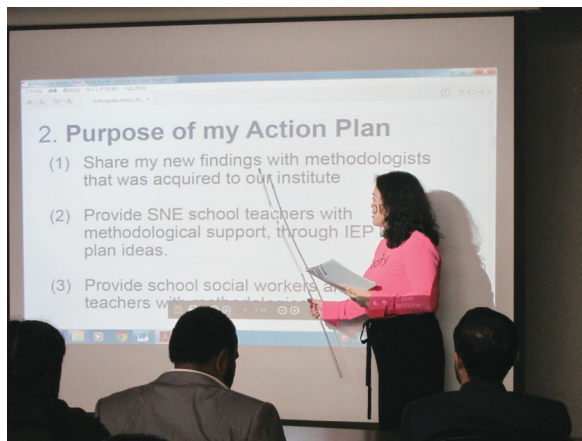
＜成果報告会・評価会・閉講式＞

成果報告会では、研修員が自国より持参した個別の指導計画の改善点と帰国後のアクションプランについて発表をした。

研修員一人ひとりが研修を通して学んだことを自国の教育事情と合わせ、アクションプランに反映させた。各自が持参した現状の個別の指導計画をより有益なものとして活用するために内容を加えたり、形を変えたりしたものを示し、その導入についても述べられた。それぞれに研修の中で触れられた内容が具現化されており、今後アクションプランが実行され、研修員たちの国々で障害のある子どものための教育が充実していくことを期待できる内容であった。

その後の評価会では研修員から率直な感想や意見が述べられた。4週間の研修を通して非常に多くの学びを得たという感想をはじめ、国の事情から考えると普通学校でのインクルーシブ教育の現場や通常学級をもっと見たかった、教材・指導法データベースをPCで見るだけでなく、実際の指導場面を見たかったというような要望や、学校参観の度にどうして日本では靴を履き替えるのかという素朴な疑問もあった。また、研修員同士で学び合ったことが大きな財産であったというコメントにはみんなが納得した表情だった。

最後に研修を締めくくる閉講式で研修員は修了証書を受け、4週間に渡る本研修は終了した。ケニアからの参加した2名の研修員は閉講式翌日20時間のフライトで帰国するとのことであった。2人は早速この研修を仲間たちに伝えるためにどうするかをフライト中に話し合い、20時間はあっという間に過ぎてすぐにケニアに着くだろうと語っていた。



成果報告会での発表



修了証書を受け、無事に研修が終了

3. おわりに

世界の広い地域から集まる研修員たちの国の事情はそれぞれ異なるが、障害のある子どものための教育を親身になって考える志はみんな同じだと感じた。国の事情は違っても私たちの日ごろの実践が、世界各地で障害のある子どものための教育に少しでも還元されていくことを心から願いたい。

【研修員からのコメント】

- ・研修を通じて教材、指導法、使用法について学んだ。教材はシンプルで応用が利き、使いやすい。すぐに使いたい。ぜひ国に持ち帰りたいポイントである。
- ・障害をもつ生徒の本質を理解し、生徒が卒業後に自立して生きていける力と働くスキルを身につけさせることが個別の指導計画をつくる目的なので、その点においてとても刺激を受けた。
- ・障害を持つ子どもが将来社会の役に立ち、自立して生きられるようになるために、自立活動こそが特別支援教育の中核をなすものだと感じた。
- ・たくさんの有益な知識を得たが、一番心に残ったことは「チームワーク」。生徒を支援するために家族を巻き込んで強いチームワークを作り上げていきたい。
- ・学校訪問を通じて、自信をもって自分の力を最大に発揮している障害児にたくさん出会い、とても感激した。日本の教員が愛と奉仕の心をもって子どものために一生懸命働いている姿に感銘を受けた。日本人はお互いにも訪問者にも敬意をもって接し、文化や環境を大切に思いやりがある。また、これほど人口の多い国なのに、小学1年生の子どもでも歩いて帰宅できるほど治安が良いのにも驚いた。
- ・日本人はうそをつかない。責任感が強い。マナーがよく、秩序正しい。小さな子どものころから、時間を大切にするように教えられ、時間に正確である。

(文責：氣仙有実子)

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

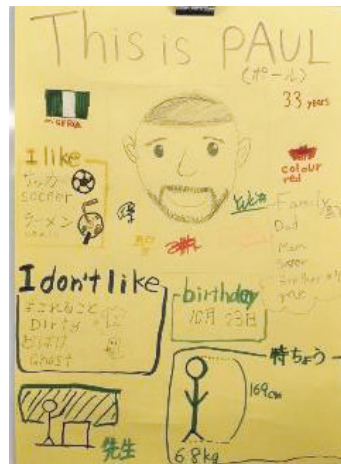
留学生との交流会

① 活動報告

来ていただいたゲストティーチャーの出身国の言葉であいさつタイム



小さなグループになってひとり一人がポスターを使って自己紹介を行う。さらに、英語で質問しながら留学生の紹介ポスターを作成



② 児童生徒の感想

- ・今回の交流会はとても勉強になったと思う。自分で言ったり、書いたりするだけでなく、相手の言葉をしっかり聞き取り、コミュニケーションをとることができればいいと思う。外国の人といろいろ会話して、分らない単語はいくつもあった。だから、もっと英語を勉強して、日本語のようにすらすら言えるようになったら良いと思う。
- ・ぼくの交流会前に立てた目標は「外国の人と仲良くなる」ということだった。学校案内の時はドキドキしたけれどゲームの時などにはいっぱいもりあがって仲良くなれたと思う。
- ・英語の授業で習ったことがちゃんと出来ていてよかったと思う。英語はむずかしいけれど、しゃべれた時はとても達成感があった。もっと英語がしゃべれるようになったらいいと思う。
- ・外国人に日本の文化を伝えることは、想像していたよりもとてもむずかしかった。身振りや手振りをつけると、伝えやすいことが分った。
- ・とても楽しかったです。かなり留学生と話せた気がします。もっと英語を使って話をしたいと思いました。色いろな国からの留学生の人達のプレゼンテーションで、その国の文化や風習を知ることができたと思いました。

附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

① 基本的には例年通り実施

- ・前期は週1回（火曜日）、後期は週2回（火・水曜日）、昼休みと放課後に開設。
- ・開室中は TT 授業担当の ALT 2 名が常駐。
- ・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
- ・夏休みまでは3年生を2名ずつ割りふり、全員に体験させる。
- ・アメリカ短期留学プログラム参加希望者は2回利用していることを応募条件にする。
- ・来室した生徒を毎週記録しておく。
- ・1年生の利用は夏休み後からとする。
- ・アメリカ留学短期プログラムの写真や参加者レポートを部屋の外に展示している。

今年度も多くの生徒に利用されてきた。アメリカ短期留学プログラム参加者決定後は、参加予定者の利用も順調に進んでいたが、それ以外の生徒もよく来室していた。

夏休み後から多数の1年生の参加も見られるようになった。授業での発表活動の練習のために訪れる生徒もあり、活用の幅が広がっている。12月に発行されたPTA会報に、リピーター生徒2名とネイティブ教員へのインタビューが掲載され、English Room 利用の利点や来室を促すメッセージが生徒と保護者に伝えられた。



② 生徒の感想

- ・気軽に英語を使える。初回は不安や抵抗もあったが、行けばすぐ慣れる。授業と違い自分で話したい内容も決められる。英語に自信がなくても、好きな話題なら、伝えたいという気持ちで何とかなる。 (2年)
- ・英語上達には短時間でも多く話せる ER がベスト。初回は一年次で英語力もなく不安だったが、友人の誘いで思い切って行ってみた。きっかけがない人は友達を誘ってみては。先生方の故郷の話や体験談などを聞けるのも楽しい。以前物理の話をしたいが、「原子」「中性子」「陽子」などの表現がわからず、図で伝えようとした際、先生が各単語を教えてくれ、とても勉強になった。何度も行くと先生方と打ち解けられ、授業で緊張しなくなった。 (3年)
- ・緊張や不安があっても、まずは一度来てみた方がよい。 (2年)
- ・英語は使わないと伸びないのでどんどん ER で使った方が絶対によい。即反応する力も伸びるし、会話学校に比べたら、お金も時間もかからない。 (3年)

附属学校のイングリッシュルーム活動について

(1) 附属高等学校

① 活動内容

2013 度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度 5 年目を迎えた。前期は毎週木曜日の放課後と金曜日の午後に、後期は金曜日の午後、マクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）にお越しいただいた。前期木曜日の放課後は、各 SGH プログラムに参加する生徒に対して、英語による研修を実施した。前期および後期の金曜日の午後は、昼休み、午後（授業のない 3 年生対象）、そして放課後の 3 部に分けて実施した。1 コマ 20 分に設定し、事前予約を含めた先着順で生徒が参加した。目的や学年を問わず幅広く誰でも参加できる場として設定して、今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のように分けられる：

- ✓ 国際交流事業への参加者選考へ向けた準備（1 年生）
- ✓ 英語表現 I の授業で行うスピーチの原稿の添削（1 年生）
- ✓ 海外留学や国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（1～2 年生）
- ✓ 大学入試に向けた英語のエッセイの添削や英語面接の指導（3 年生）
- ✓ 英語の運用能力を伸ばすため（1～3 年生）

② 生徒からの反応

個別にじっくり対応としてくれるため、エッセイの添削やスピーチの準備などを必要としている生徒には非常に好評であった。国際交流事業（国際シンポジウムなど）に参加する生徒は、英語運用能力のみでなく幅広い話題に対応する知識や柔軟性が必要である。このため、マクレイ先生は毎回異なるトピックを提示し、楽しくも時折鋭く切り込んでくださった。参加生徒はやり甲斐を感じて懸命に取り組んでいる様子であった。

参加した生徒達からは、「マクレイ先生のおかげで、授業課題のスピーチが上手にできた」、「授業内だけでは英語を話す時間が限られているので、良い機会になっている」、「短期留学に行くための準備として役立っている」、「進路の相談などもでき、英語だけではなく将来を考えるきっかけになった」、「入試の英語面接に向けて練習ができ、自信になった」という感想がありました。



③ 今後へ向けて

「イングリッシュルーム」については、ポスターを学校中に掲示することで案内をしている。また、後期が始まるタイミングでマクレイ先生に 1 年生の英語の授業にお越しいただき、英語を学ぶ重要性や「イングリッシュルーム」でどのようなことができるかについてお話しいただいた。その結果、参加する生徒が限定されていた前期に比べ、後期はさまざまな生徒が利用し、予約が常に埋まる状態となった。来年度は早い段階でマクレイ先生に授業で宣伝をしていただこうと考えている。より多くの生徒が気軽に利用し英語力を高められる環境が提供できるよう、さらに工夫を重ねていきたい。

English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援

1. 活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは2013年にスタートした。月に2回ほど、放課後3:30～5:00に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語イベントのコーチを受けたりしている。(もちろん、希望者が参加することも可能である)

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。

中3のテーマ学習や高2の課題研究のScience Dialogue(講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動)。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。登録されている方が6～7名おり、それぞれがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第2外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦勞も心得ており、英語のティーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

2. 生徒の感想

以下に、最近、釜山派遣生徒のプレゼンテーション・リハーサルでイングリッシュ・ルームの講師の方々の指導を受けた、生徒たちの感想をあげる。

- ・今回のイングリッシュルームでは僕たちはガイドブックには載っていない神社での手を清めるなどの行動もおりまざるとより面白いという指摘をいただきました。また他にも自分たちでは気づかなかった文法的なミスについても指摘していただきました。感想としては、今現状としてありふれた発表にならないためにアイデアが欲しい状況であったので、すごくためになりました。さらに外国人からの視点を聞くことができ、より良い発表を作って行く上で有意義なものであると思いました。
- ・今回のプレゼン指導を通じて文法のミスや、コロケーションなどネイティブの人でなくてはわからないような点を様々指摘してくださったり、プレゼンでの態度を直していただきました。この経験を釜山での発表に生かしていきたいです。
- ・今日のEnglishroomはとても有意義なものでした。僕の班は日本の観光がテーマですが、自分たちだけではわからない、外国人の方から見た日本の観光地をコーチの実体験に基づいて色々提案してくださり、外国人にとってのツボのようなものがわかってとても良かったです。

(文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫)



中学生と英会話の練習



海外でのプレゼン事前練習の指導

楽しい英語活動と SGH 校としての活動の両立を目指して 2017-2018

① 活動報告

2013 年より、本校ではイングリッシュルームの活動として、昼食時の English Lunch（イングリッシュランチ）と、放課後の English Salon（イングリッシュサロン）に、週 1 回取り組んでいる。2 つを総称して English Lounge（イングリッシュラウンジ）としている。

English Lunch	12:30 ~ 13:10	Tuesday	40 分
English Salon	15:40 ~ 17:40	Tuesday	120 分

English Lunch では、校舎の中でも生徒の出入りの多いスペースを使用し、ALT と昼食をとりながら英語に親しむ機会を設けている。生徒も教員も各自弁当を持参し、会話のテーマは特に決めずに自由に話している。English Salon では、ボードゲームや映画鑑賞をしながら ALT との会話を楽しみ、時には検定試験の対策のための会話練習を行ったり、ハロウィンやクリスマスといった季節行事を開催したりしている。

本校では B 館の各階ロビーに学習スペースを設けている。ここは生徒が勉強をしたり、教員と面談をしたりするなど、様々な用途に活用されている。本校の「イングリッシュルーム」活動は主にこの開かれた場所で行われるため、写真でも分かるように English Lunch、English Salon では、気が向いたタイミングで生徒が参加することができる。Salon と名付けたのは、多様な人が立ち寄る、集会の場として機能することを期待したためである。

本校は 2014 年にスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されて以来、プレゼンテーションを英語で行う機会や英検受験者が急増した。これに伴って、① SGH 関連開発科目における英語プレゼンの添削指導、② 本校主催 ESD シンポジウム及び全国 SGH 校生徒成果発表会に向けたプレゼンの指導、③ 生徒の SGH 報告書についての添削指導、④ 本校を訪れる海外生徒との交流の場の提供、⑤ 英検の面接試験対策練習といった活動に特に力を入れている。

一方で課題も多くある。特に放課後の時間帯に開催される English Salon では、部活動や委員会活動とのバッティングから希望しても参加できない生徒が少なからずおり、参加者が固定化する傾向も見られる。また、英文報告書やプレゼンテーションなどに関しても、多くの授業やプロジェクトで生徒に課されているものの、いつが締め切りなのか、英語科として把握しきれていない部分があり、せっかく英語母語話者に添削等をしてもらえる機会があるにも関わらず、活かしきれない場面が見られる。より効果的なイングリッシュルームの運営ができるよう、校内の国際教育推進委員会で更に検討して行きたい。

② 児童生徒の感想

- ・部活があるため、毎回は行けないのが残念。
(1 年男子)
- ・英検の 2 次試験対策をしてもらった。本番ながらの練習が事前にできてよかった。
(1 年女子)
- ・英作文の表現について、たくさんアドバイスをもらい、より良いものにすることができた。
(2 年女子)

(右の写真) クリスマスパティーの様子

本校を訪問していた、フィリピン大学附属高校の生徒と一緒に

<文責：福田美紀>



附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

【幼稚部・小学部】

2013年度に始まった本校幼稚部・小学部の「イングリッシュルーム活動」も5年目に入り、幸い昨年度からの退部者は1名もなく、参加者は幼稚部年少1名、新1年生3名以外は全員リピーターとなった。一方、年々学習経験を重ねるメンバーと、全て新しい学習内容に取り組むメンバー間の「学年差」が顕著となり、全員が楽しめる指導案作成が課題となった。クラブ活動担当教諭間での話し合いによる「工夫」を以下に報告したい。

Apple Club:

参加者は年少1名、年中3名、年長1名の小人数ではあったが、月1回金曜日に保護者と共に元気に活動した。本年度は、他の保育授業の計画変更に伴い、活動回数は全6回と少なかった為、幼稚部教諭の協力を得て、各回完結で有意に「子どもの歳時記」が学べる指導案を考案した。10月のHalloweenでは、事前に保育授業で作製されたバッグを持ち、各自英語で選んだコスチュームを着けて、“Seven Steps”を歌いながら館もらいに回った。11月のThanksgiving Dayの活動では、Horn of Plentyの角型バスケットに野菜や果物を飾り付け、“I like apples. Yummy!” “I don't like potatoes. Yuck!”と、don'tのところでは、机をげんこつでドーンと叩いて元気いっぱい意思表示。今年度は、物の名前だけではなく「会話」も楽しく学んだ。

★幼児や保護者の感想：「ハロウィーンで保健室に館もらいに行ったのが楽しかった」「英語の豆まきが面白かった」「家でもtrick or treatと言って遊んでいた」「英語のDVDを聞いて真似するようになった」「2年目は慣れたのか、より楽しんでいる」「保育の時間に “She is absent.” と英語で答えている」（教諭）

Blueberry Club:

参加者は幼稚部からの継続者1名を含む1年生4名と、リピーターの2年生3名で月2回月曜日に活動した。活動開始の挨拶も、2年生の真似をして1年生も競って手を上げてリーダーとなり、日本語点字の読める2年生がRoll Callの担当を務めて、活動は活発に行われた。歳時記に沿った英語学習も、昨年度の繰り返しは避けて、6月は梅雨をテーマに“Head and Shoulders …”を学んだ後は体の部位に“ache”を付けて病気を学び、“Rain, Rain, Go Away”の歌から“Pain, pain, go away! Take care.”へと発展させる工夫をした。10月のHalloweenは、季節限定のHalloween sweets持参で訪問してくださったペンギン（Peggy Breer）先生と一緒に、2グループに分かれて、館もらいと尋ねてきた子供たちに館を上げる側の体験もした。口真似をさせながらの先生の絵本の読み聞かせが好評だったこともあり、今年度はイラストに代わる「触れる絵カード」を作製し“Today Is Monday”など「絵本の読み聞かせ」も取り入れた。

★児童の感想：「病気の勉強が嫌だった。僕元気だもん」「クリスマスとハロウィーンが楽しかった」（全員）「野球が楽しかった」（野球選手の言い方（○○+ er）を学び、各自に配布した立体コピーによって印刷された野球場の凸凹上を、実況放送に合わせて塁を2本指で走るゲーム）「ぬいぐるみを触りながら干支の勉強をしたこと」「お歌が楽しかった」「何曜日に何を食べたか早く言わされるのが怖かった」「今日の英語の豆まきが楽しかった」

Coconut Club：

このクラブの趣旨は「アルファベット文字を学ぶ」で、ローマ字未学習の3年生7名と既習の4年生、6年生各1名の全員リピーターで月2回月曜日に活動した。ルイ・ブライユ考案の数字と連動した点字指導を試みた為か、“a～j”までの「文字の形と名前の学習」までは一緒に楽しく学べたが、「文字の音」に入ったところで、学年差、個人差が表れ始めた。担当の教諭と相談し、昨年度使用の文字教材に代え、各自の名前のスプリングを使った替え歌を試みたり、月や曜日の名前の復習を「頭文字当てゲーム」と連動して試みるなど、指導案に最も工夫を要したクラブ活動であった。一方、ク

ラブ活動の感想を問うたところ、それぞれ学んで楽しかった事として、Coconut Song、数や曜日の名前を、自主的に競ってよい発音で発表したのが印象的であった。

★児童の感想：「Xmas and Halloween が楽しかった」（全員・and も英語で発話）「もっとたくさん文字の勉強がしたかった」「お家で What color do you like? って聞いたら、お母さんが Green って答えました」（文責：股野儼子）



【中学部】

1. 実施内容

中学生の希望生徒を対象に放課後（月曜 15:20 ～ 15:50）、英語のネイティブスピーカー（English native speaker）と自由に話せる教室を用意し実施した。中学生の場合、学年ごとに英語力が異なるため、それぞれの学年レベルにあった話題となるよう学年別の実施とし、ローテーションで回した。

中学生の英語力では英語だけで会話をするのは困難なため日本人英語教師を配置し、学年が上がるにつれ、日本人教師の助力を減らし、中3段階では、日本人教師を配置せず、生徒が英語だけで会話することを一つの目標においたが、今年度はそこまでは至らなかった。

1 月末現在の実施回数は 10 回と昨年度と同じだったが、参加のべ人数は、昨年度の 62 から 53 と若干減少し、全体としての参加率は 50 パーセント弱だった。

2. 参加生徒の主な感想

< 1 年生 >

- ・英語の授業ではまだ習っていない単語や文法もたくさん出てきてわからない時もありましたが、いろんな話ができて楽しかったです。
- ・外国人と話す機会が増えて良かった。少し難しい所もあったが、楽しかった。英会話により興味を持てた。
- ・外国人と話すのは、初めてで緊張したけれど、優しくて面白いと思った。英会話をする楽しみを覚えた。
- ・私は 3 回中 2 回しか参加することができませんでしたが、授業で学んだことを活かして、外国の方からいろんなお話を聞くことができて良かったです。また外国の方と話す機会があまりなかったのでもろんな国の文化なども学ぶことができ、良い経験ができました。中学生になり、授業と English Room が始まってから、英語への関心が高まりました。

< 2 年生 >

- ・私は英語力が低いため、言葉に詰まったことはありましたが、とても勉強になったので良かったです。English Room を通じて、話すということの大切さ、文化の違いを実感することができました。また、日本ではある物がなかったり、日本ではない物があったりして、話を聞いていてとても楽しく感じました。

- ・中1の時よりリスニングが苦ではなくなりました。少しは聞き取れるようになったので、英語が「とても苦手」から「少し苦手」になりました。
- ・中1の頃とは違って先生の援助がなく、本格的に外国の方と話すことができた。また、たくさん英語の知識を持っていなくても外国の方と会話ができるとわかり、外国への興味も増した。

＜3年生＞

- ・できるだけ先生の手を借りずに外国人講師の先生と、一つの話題について、話していくことができて良かった。英文の作り方は習っていても、会話する時に文が浮かんでこないことがあるので、ライティングなどをもっと練習しようと思った。
- ・当日、決まった話題について組み立てたストーリーを英語で話すのはとても大変だったが、知っている単語では伝えたい通りに話せないこともあったので、もっと語彙を増やしたいと思うようになった。自分から話題提供したり、もっと質問したりと自分から話しかけられたらいいと思った。
- ・外国の先生との生の対話を通して、教科書では学べない、自分で考えた英文を話すという貴重な体験をすることができた。緊張感を持ちながら、会話を楽しむことができた。

3. 考察

感想に見られるように、参加した生徒は、外国人と話すことに慣れ、英語を話すことへの抵抗も少なくなり、英会話を楽しみながら、英語や異文化への興味・関心を深めている。また、授業で培った英語力を実践的に使う場になるとともに、イングリッシュルームを通して生徒の英語学習意欲も向上している。

各学年の平均参加者数は、中1が8、中2が6、中3が2.3と学年が上がるにつれ減少し、参加者も固定する傾向が顕著に見られた。思春期を迎え、人前で英語を話すことへの抵抗感、思っていることを英語で表現しきれないもどかしさなどが次第に強まっていくものと思われる。

出席率を上げるため、昨年導入したポイント制は一部の生徒から反対の声が挙がったので、今年度はクラスごとに話し合い、導入したクラスと廃止したクラスがあった。どのように動機付けしていくかが、引き続きの課題である。

また、中学生には英語ネイティブスピーカーとの英語だけの会話は困難であり、日本人英語教師がどのように関与するのが良いのかも、引き続きの検討課題である。（文責：金野 孝）

【高等部】

① 活動報告【高等部】

高等部では、5月末から3月末まで、計15回のイングリッシュルーム活動を実施した。具体的には、ジョアンナさんというアメリカ人女性講師を招き、火曜日の放課後の約2時間、生徒が英語だけでコミュニケーションする時間を設けた。各学年とも最初の2回は、全員がそれぞれ6分ずつの個別の面談形式で行った。3回目以降は、学年を2分割したクラスごとに希望者を募り、約40分間のグループでの英会話の機会を設けた。

② 生徒の感想

- ・1対1の会話の時間はあっという間に終わってしまい、少し物足りなく感じることもありましたが、ジョアンナさんが私の趣味やペットのことなどを覚えていてくださるのが嬉しく、次のイングリッシュルームが毎回楽しみになっていました。短い時間の中でも、少しずつお互いのことを知ることができる有意義な時間でした。グループでの時間は、その季節にあった話題について学ぶ中で、自分とは違った色々な意見に触れることができる刺激的な時間でした。一年を通して、ジョアンナさんと会話ができるイングリッシュルームの時間は、私にとってとても楽しいものになりました。ありがとうございました。

- ・私はイングリッシュルームがいつ回ってくるのか、いつも楽しみにしていました。短時間だったけれど、1対1で、英語でいろんなトピックについて話すことができて良かったです。
- ・イングリッシュルームの先生は明るく話しやすく、英語の発音も聞きやすく、僕たちの英語力でもわかるので、英語で楽しく学んでいます。これからもイングリッシュルームを楽しみにしています。
- ・日常的な英会話を練習する貴重な場となりました。また、ネイティブの発音や話し方も学習することができました。
- ・イングリッシュルームを開いて下さり、ありがとうございます。私は英語が大好きで、ずっと誰かと話したいと思っていました。また、うまく話せなくて少し不安でしたが、参加でき、とても楽しく、いい思い出になりました。今までは受け身な感じで会話していましたが、自分から話せるよう頑張ります。
- ・英語を使ったコミュニケーションを取ることができ、英会話の知識が向上した。また、異文化に対する知識も深まり、例えば前回、様々な国のクリスマスの楽しみ方について知った。個人的には今後の目標として、日本文化の紹介を会話の中に取り入れ、より楽しく伝え合える時間にしたい。
- ・Thank you for coming to our school and talking with us in English. We can enjoy talking with you. If I have more chances, I want to talk in English again.
- ・Thank you for English room! I joined it every time and had happy memories. Especially I enjoyed talking about Christmas! I was surprised that Christmas ornaments came from many countries. I'm looking forward to joining again!
- ・I participated in the English room. I could learn culture from a foreign country as well as speaking English. Because I obtain a chance of joining the English room, I feel happy.

(文責：宇野和博)

イングリッシュルーム活動

本校では、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科毎にイングリッシュルームを開設している。

1. 中学部

中学部では、主に昼休みの時間に、英語の授業でお世話になっている外国人講師の方を招いて、イングリッシュルームを開いている。本校中学部は各学年 14 名という少人数なので、できるだけ全員に話す機会を与えるために、前半は学年を指定し全員参加とし、後半はどの学年の生徒でも自由に会話に参加できるように工夫している。

何を食べているのか尋ねたり、講師からの季節、行事、時事、学習した文法などに合わせた質問に答えたり、生徒の方から質問をしたりしている。英語が得意ではない生徒も周りの生徒の助けを借りながらコミュニケーションをしている。イングリッシュルームを非常に楽しみにし、質問や伝えたいことをあらかじめ英語に直してきている生徒もいる。

今年度は他学部でお世話になっている講師の先生に来ていただく機会も持つことができ、より有意義なものとなった。



2. 高等部普通科

平成 29 年度イングリッシュルームはグアテマラ出身の Diana Ubeda Cabrera さんをお迎えし、6 日間、延べ 9 回実施した。担当者と Ubeda さんが内容について事前に相談し、Ubeda さんにあらかじめ準備していただいたスライドを使用して、自国の文化等について紹介していただき、その内容に関する質疑応答を英語で行う形式で進めた。生徒は聴覚に障害があるため、口頭での英会話は難しいが、できるだけ教員の通訳を介せずにコミュニケーションをとるように促した。具体的な手段として、生徒に各自所有の iPad を持参させ、筆談アプリ等を用いたコミュニケーションの内容を TV モニターに投影する方法をとった。こうすることで、複数の聴覚障害を持つ生徒と Ubeda さんとの自由な会話を可能にした。生徒の発問に対して、Ubeda さんにはホワイトボードに書くことで応答してもらった。生徒の発問とそれに対する Ubeda さんの応答は時に難しい内容のこともあったが、Ubeda さんが英語だけではなく、絵を描いたり、ジェスチャーを使ったりしてより多くの生徒にわかるように工夫をしてくださったおかげで、生徒たちはほとんどの発話を理解することができた。そのおかげで、回を重ねるごとにイングリッシュルームへの参加生徒は増え、また生徒の発問の内容は深まっていった。聴覚に障害がある生徒は、たとえ英会話に興味があったとしても、他の多くの高校生が行っているように英会話スクールに通うなどの行動がとれないことが多い。イングリッシュルームのように、英語で自由に会話ができる機会を学校で提供することは、生徒の国際的なあるいは異文化コミュニケーションの視点を養うのに非常に重要であると感じている。

3. 高等部専攻科（造形芸術科 ビジネス情報科 歯科技工科）

専攻科では本年度7回のイングリッシュルーム活動を行った。普段の英語の授業ではなかなか知る機会のない他国の文化や、日本と海外の習慣の違いについて学ぶとともに、簡単な英単語を使ったゲーム（Guessing Game 等）を通して、国際文化や生の英語に触れる大変良い機会となった。実施に際しては、講師と事前の打ち合わせを行い、生徒が楽しめるような内容とした。

歯科技工科の生徒は、講師の出身国についての話を聞いたり、英語を使ったやりとりを通して、言語や文化について体験的に理解を深めることができた。「Guessing Game」は、回答者が他の生徒のジェスチャーをヒントに英単語を連想するゲームである。iPad を使い、皆が回答を共有することで、一人ひとりが楽しんでいる様子が見られた。また、Dance lecture では、最初は恥ずかしそうな様子であったが、徐々に慣れていき、最後は全員が笑顔で楽しんでいる様子が見られた。

造形芸術科とビジネス情報科の生徒たちも同様に、意欲的に取り組んでいた。授業で使い方を学んだ翻訳ソフトを用いて、先生から発信された意味を日本語に訳して理解したり、伝えたいことを英文にして質問したりする様子が見られた。活動後に送られる先生からの英文メッセージも楽しみの1つとなっていた。掲示されると、生徒は熱心に英文を読み、わからない単語を辞書で確認していた。生徒からも短いメッセージカードを送るようになり、英語でのコミュニケーション意欲の向上につながった。

生徒から先生へのメッセージ

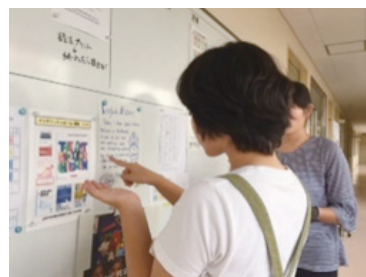
- ・ I enjoyed the game!! I want to do it again.
- ・ I didn't know much about the festival in Guatemala, so it was fan.



iPad を使ったやりとりの様子



Guess Game の様子



放課後の様子

4. イングリッシュルーム担当講師（Diana Ubeda Cabrera）より

As a language teacher, it never stops to amaze me to think on what a teacher is possible to make their students learn when we communicate with them. Language is a defining feature of people. But definitely after interacting with students in English I was able to see how they grew not only academically but personally, believing and trusting themselves to communicate with a foreigner. English is a key language to communicate with people from all over the world, and English Room gives students the opportunity to open many doors to new experiences.

It is estimated that 3/4 of the world's population is bilingual to some degree, that is more than 4 billion people have different ways to interpret the world.

附属大塚特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動

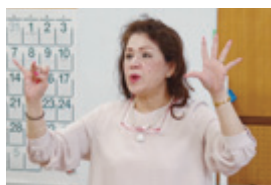
① 活動報告

本年度、本校中学部ではイングリッシュルームの予算を用い、学部の英語の授業に ALT を招聘し、一学期 5 回、二学期 4 回、三学期 1 回の年間で全 10 回の授業が行われた。

一学期は英語での挨拶を中心に色々な物の名前等を学習。フレーズを繰り返し学習するうちに、英語でのやりとりにも少しずつ慣れ、だんだんと積極的にみんなの前で発表する生徒の姿が見られるようになってきた。

二学期は、これまでに積み重ねてきた挨拶等のフレーズに加え、ハロウィンやクリスマスといった季節の行事の紹介があり、異文化を生徒が楽しみながら活動に参加する姿が見られた。

三学期は、学校の行事と講師の都合が折り合わず、1 回のみであった。生徒たちからは「高校生になっても英語をやりたい。」「楽しかった。また（ALT の先生と）会いたい。」といった感想が多く聞かれた。



② 生徒の感想

- ・ハロウィンのイングリッシュのれんしゅうが楽しかったです。ブラックスパイダーとパンプキンがいっぱいできたのが楽しかったです。英語をおしえてくれてありがとうございます。あいさつの英語も楽しかったです。(中学部 1 年男子)
- ・むずかしかったです。ハロウィンのべんきょうをよくおぼえています。かぼちゃができました。(中学部 1 年男子)
- ・私は、ALT の先生と一緒に英会話やジャンケン、歌等、色々な会話ができたのが嬉しかったです。また先生と一緒に色々な会話ができれば嬉しいです。(中学部 1 年女子)
- ・最初は少しはづかしかったけど、だんだん楽しくなりました。ALT の先生がハロウィンのかぼちゃや魔女をはさみで紙を切って作ってくれたのがすごかったです。(中学部 2 年女子)
- ・ALT の先生の授業はとても楽しかったです。先生の質問に答えて正解できてうれしかったです。高等部でも英会話の授業をやりたいです。(中学部 3 年女子)
- ・僕は、ALT の先生のことが大好きです。笑顔で明るくて、ハキハキしているところがとても好きです。それから授業がとても分かりやすかったです。歌をうたったり、体を動かしたり、楽しく勉強できました。また ALT の先生の授業が受けたいです。(中学部 3 年男子)
- ・ALT の先生の英語の授業はとても分かりやすくて、勉強が楽しみでした。特にクリスマスの授業がおもしろかったです。高校生になっても英語の授業があったらいいなと思いました。(中学部 3 年女子)

(文責：厚谷秀宏)

児童生徒の主体性を引き出すイングリッシュルーム

① 活動報告

3名の外国人講師が、それぞれ小学部、中学部、高等部の各イングリッシュルームに待機し、児童生徒のニーズに対応する形で実施している。

小学部は毎週木・金曜日に開設している。中学部と高等部は木曜日か金曜日のどちらかで週1回は開設をしようとしているが、講師の都合や学校行事、検定試験などで金曜日は開設できないことが多い。また、高等部は普段から放課後が忙しく、イングリッシュルームになかなか参加できない生徒が多く、中高合同で実施することもある。活動の内容や進め方は各担当者に任せているので様々である。

小学部では、歌やゲームを通してコミュニケーションをとるために必要な単語（食べ物、動物、色、数、曜日、天気、体の部位など）や表現（挨拶、自己紹介、好きなもの、電話での表現、できることなど）に慣れ親しんでいる。また、ハロウィンやクリスマスの時季にはパーティーの雰囲気で保護者も交えて賑やかに行っている。

中学部では、生徒が主体的に参加できるように、適宜どのようなことを学びたいかを生徒に聞きながら活動内容を計画している。生徒が普段の授業でわからないことや気になっている表現などを取り上げて、普段の授業とは違う楽しい雰囲気では英会話を楽しんでいる。

高等部では、日本語（外来語）と英語の違いや文化の違いを紹介することで生徒の興味・関心の幅を広げている。生徒は毎回、新鮮で興味深い知識を吸収しながら英会話を楽しんでいる。

どの学部においても、児童生徒はイングリッシュルームを楽しんでおり、積極的に活動に取り組んでいる。また、英検の2次試験直前には、受験生徒には優先的に面接練習を行える時間を設けている。そして、英語力だけでなく、コミュニケーションをとろうとする態度や表現しようとする意欲を高めている。イングリッシュルームは、本校の国際教育活動を支える大きな役割を果たしている。



② 児童生徒のアンケート回答より抜粋（回収数：小 22/33、中 16/23、高 7/29）

アンケート質問項目

- 1 イングリッシュルームが楽しいと思った理由。
 - ・英語の学習というより、英語のゲームをしている感じなので。 (小4)
 - ・みんなと関わり合いながら、一緒に学ぶことができるから。 (小5)
 - ・ゆっくり進んでくれるから。 (小5、6)
 - ・授業っぽさがなく、先生と話せる。 (中2)
 - ・英語が苦手でも会話できたから。 (高3)
 - ・先生が面白い／好き。 (多数)
 - ・他学年／学部と交流できる。 (多数)

- 2 イングリッシュルームが役に立つと思った理由。
- ・耳から生でいい発音が聞ける。日常的な会話をたくさん話してくれるから。
(小2 保護者代筆)
 - ・これから先、必要だと思うから。外国の先生が教えてくれることで、外国へ行きたいと言っていた。
(小2 保護者代筆)
 - ・英語の歌が歌えるようになる。
(小3)
 - ・あいさつができたり、英語で自分のしょうかいができる。
(小3)
 - ・将来大人になったとき、体は不自由でも英語を使って交流することができるから。
(小5)
 - ・将来、外国の方と会話したいから。
(小6)
 - ・会話表現などは中々実践しないと積めないなので、話す上でより良い表現が学べる。
(中2)
 - ・今学んでいる日常会話も東京五輪の時に役立ちそうだから。
(中3)
 - ・固くなく、気軽に使える表現ばかりだから。
(高2)
 - ・日常生活で使う語は意外と授業では学べないから。
(高2)
- 3 イングリッシュルームで学んだことを、他のどんな場面で使うようにしているか。
- ・家で家族と話す時。
(小学生低学年多数)
 - ・登校時のあいさつなど知っている単語を使おうとしている。
(小2 保護者代筆)
 - ・英検や英語の授業。
(中高多数)
- 4 イングリッシュルームに参加して自分は変わったと思うこと
- ・英語を（もっと）好きになった。
(多数)
 - ・もっと知りたい、たくさんの人と話したいという思いが出てきた。
(小2 保護者代筆)
 - ・英語の発音の仕方や英会話の仕方が少しずつ上手になっていった。
(小6)
 - ・英語で話す時に楽しいと感じるようになった。
(中3)
 - ・外国の方と話すこと / 英語を話すことに抵抗がなくなった。
(中3、高2)

児童生徒は、一様にイングリッシュルームは楽しいと口をそろえて言う。楽しいだけでなく、特に中高生は普段の英語の授業において、イングリッシュルームで学んだことを積極的に使うようにしているようである。しかしながら、外国の方が来校して給食で交流するときや国際交流活動などでは、イングリッシュルームで学んだことを活用しているといった回答は見られなかった。これは、今年度は高等部でのイングリッシュルーム開催が少なかったことが大きく影響していると思われる。来年度は国際交流活動が近づいてきた時期には、イングリッシュルームの利用を促し、生徒が自らその理由と共に授業内容の要望を出せるような主体性を育てたい。

また、イングリッシュルームの授業内容は講師に任せていたが、アンケートに「ひたすら英文を読んで…、英語が苦手なわたしとしてはちょっときつかった。」という中学生の回答があったので、イングリッシュルーム担当教員は、毎回の授業内容を簡単に確認していく必要がある。イングリッシュルームは、英語が苦手でも気軽に英語を楽しめる場であることを大切に、そこから英語学習に自ら進んで取り組むことができる態度を育成し、他の国際教育活動にもつなげたい。

イングリッシュルームの評価について

1. 目的

附属学校で行われているイングリッシュルームの活動の評価のため、各学校に共通のアンケートを実施し、「活用状況」「効果」「課題」を整理することを目的とした。

2. 方法

調査時期 2018年1月上旬～2月上旬にかけて実施した。

調査対象者 各附属学校にてイングリッシュルームの運営に関わる教員（各学校3名～5名、各学校段階を含む）ということで依頼した。

調査内容 附属学校国際教育推進委員会報告書（2014年度第6集～2016年度第8集）の各学校のイングリッシュルームの報告内容を基に、以下の3点を測定する項目を作成した。国際教育推進委員会委員・国際教育推進委員会委員で項目内容を検討・選定した。

①イングリッシュルームの活用状況について イングリッシュルームがどのように活用されているかを尋ねる8項目からなる。1. あまり利用されていない～4. とてもよく利用されているの4件法で尋ねた。

②イングリッシュルームの効果について イングリッシュルームの効果を尋ねる12項目からなる。1. 全くあてはまらない～4. とてもよくあてはまるの4件法で尋ねた。

③イングリッシュルームの課題について イングリッシュルームの課題を尋ねる8項目からなる。②と同様の4件法を用いた。

調査手続き 調査用紙作成後、Google Formの回答票を作成し、Web上で回答を求めた。調査は無記名で行われた。

3. 結果

① 回答者数

33名から回答が得られた。回答者の内訳は、以下の通りである。

附属桐が丘特別支援学校3名、附属視覚特別支援学校6名、附属大塚特別支援学校2名、附属聴覚特別支援学校4名、附属駒場中学校・高等学校5名、附属小学校2名、附属中学校3名、附属高等学校5名。

② イングリッシュルームの活用状況

学校段階によって、活用の仕方が異なることが推定されることから、以降の分析は、学校段階ごとの数値を算出した。各学校段階の回答者は、小学校6名、中学校10名、高校15名、専攻科2名であった。主な特徴を述べると、「グループでの利用」の得点が最も高かったのは中学校・中学部であり、 $M = 3.30$ であった（図1参照）。「英作文の添削」「英語でのプレゼンテーションの練習」「海外渡航前の準備」「生徒の自主活動の補助」の得点が最も高かったのは高校であった（ $M = 1.73 \sim 2.60$ ）。一方、「文化的イベントの実施」の得点が最も高かったのは小学校であり、 $M = 3.33$ であった。聴覚特別支援学校・視覚特別支援学校の専攻科においても、「グループでの利用」がされていることが示された。

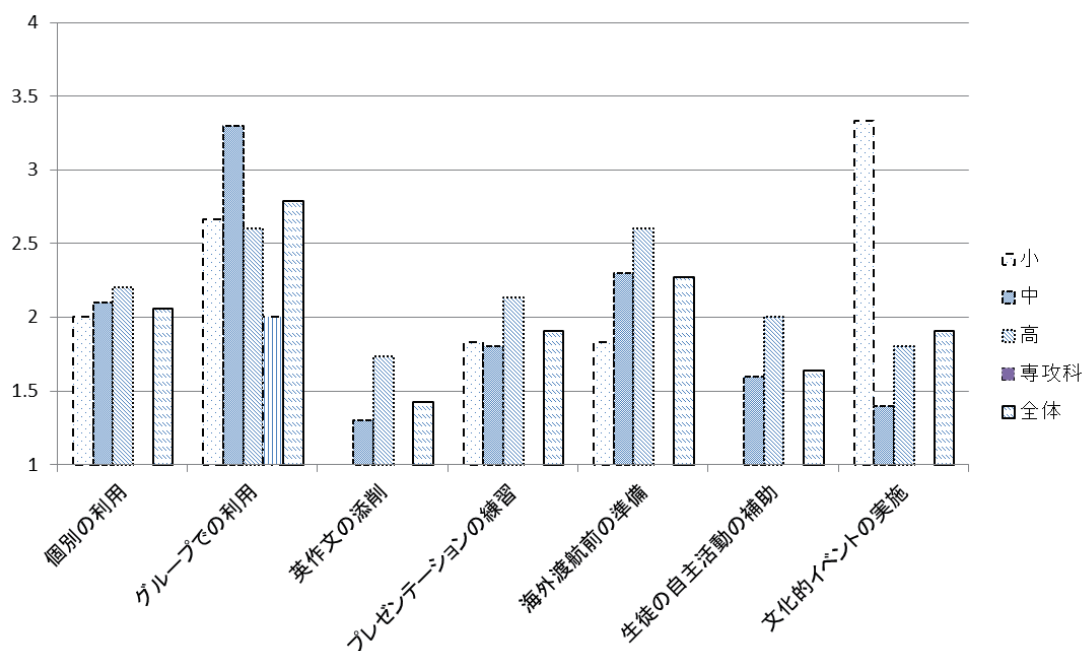


図1 イングリッシュルームの活用状況

③ イングリッシュルームの効果

各学校段階の教員が感じている効果について、主な結果を報告する。児童生徒に関する5項目の得点は、小中高段階でいずれもほぼ3点台を超えており、効果を感じられていることが示された。「児童生徒の外国への興味関心の高まり」「児童生徒のグローバルな視野の広がり」の得点が最も高かったのは小学校であり（ $M = 3.83 \sim 4.00$ ）、小学校段階で外国人や外国文化に触れることは効果が大きいことが示唆された。また、教員に関する3項目も比較的高い得点を示しており、教員の英語を話す機会になっていたり、教員が質問できるという効果も示されている。保護者に関する3項目では、小学校、中学校が高く、次に専攻科が高いことが示された。専攻科のある聴覚特別支援学校・視覚特別支援学校では、通常の英会話教室に通うことが難しいという保護者の声もあり、学校でこのような機会が設けられていることを保護者が肯定的にとらえている可能性が示唆された。

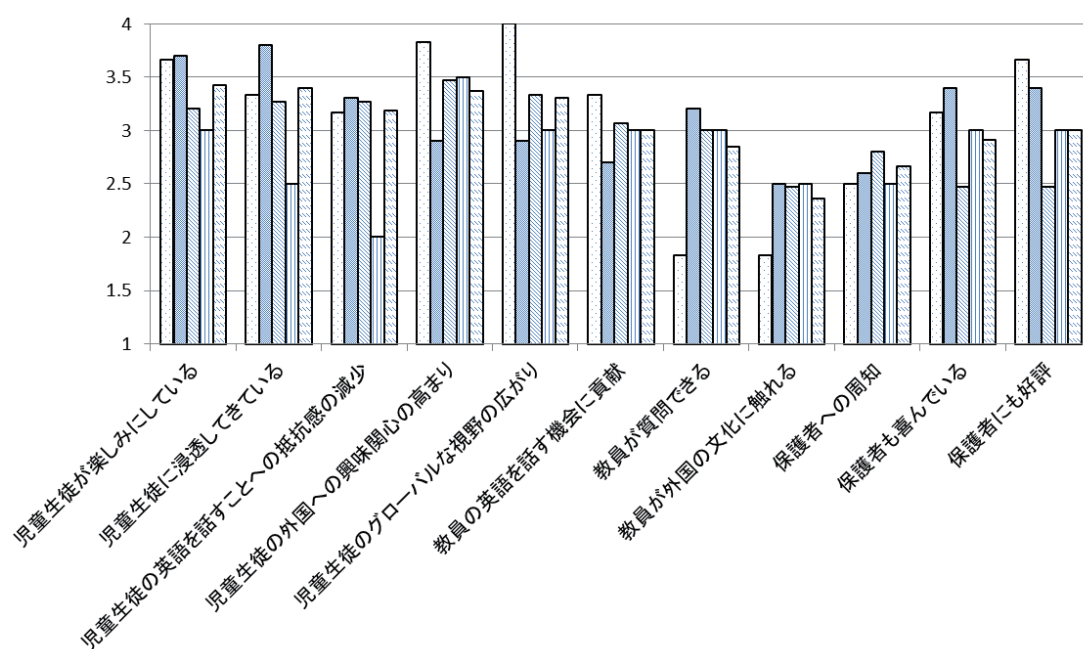


図2 イングリッシュルームの効果

④ イングリッシュルームの課題

各学校段階の教員が感じているイングリッシュルームの課題について、主な結果を報告する。全体の平均点が最も高かったのは、「講師を探すのが大変」(M = 2.73)であり、次に「講師との日程調整が大変」(M = 2.68)、「興味関心の個人差があり利用者が限定される」(M = 2.68)が続いた。さらに、「活動の範囲を広げてほしい」(M = 2.63)、「児童生徒の関心を高めることが大変」(M = 2.60)も、理論的中間点である2.50を超えており、これらのことが現場で課題になっていることが示された。この他に、自由記述の内容から、予算運営面での支援が不足していることや、学校行事と重なって時間がとれないといった時間の確保の困難さ、どうしても活動の中心が放課後になるが部活や委員会に専念している生徒ほど利用できないといった課題があることが指摘されている。

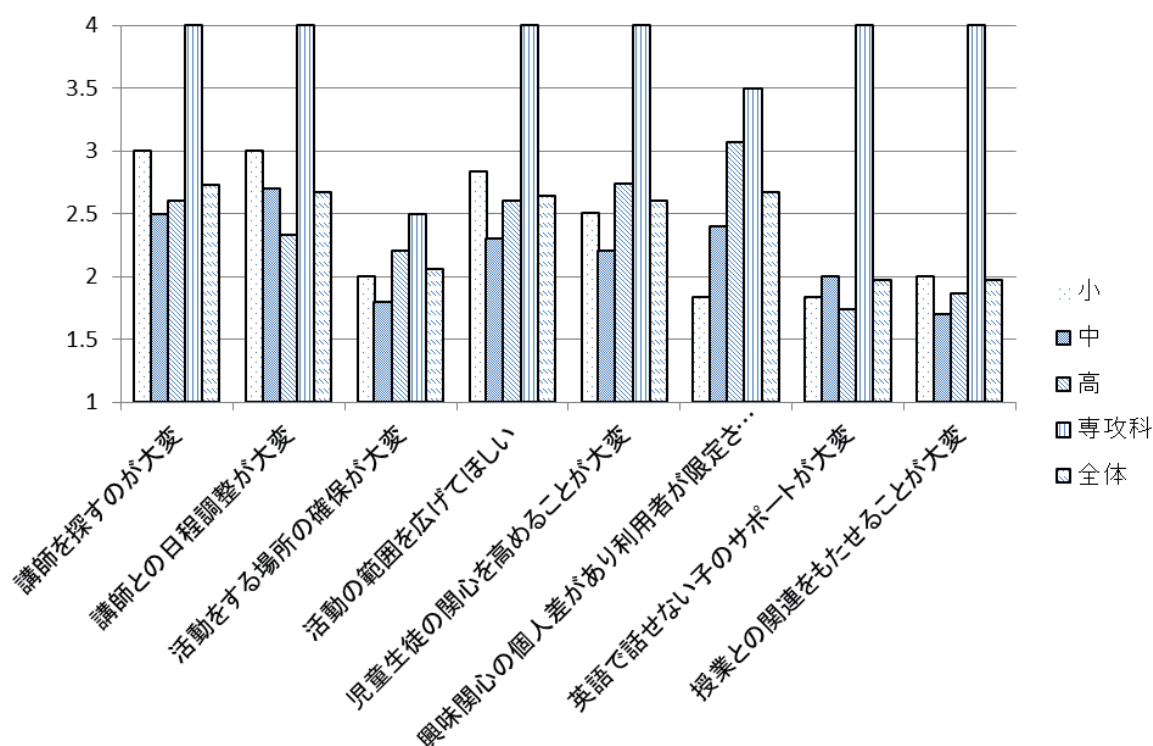


図3 イングリッシュルームの課題

4. 考察

以上の結果から、イングリッシュルームの活用状況に関しては、各学校段階で利用状況が異なっており、学校のニーズに応じて活用されていることが示された。またその結果、小学校段階から、児童生徒の外国に対する興味が高まることや、グローバルな視野が広がってきているという効果が実感されており、中学校、高校でもそれらがさらに高まることが示されている。また、教員も必要に応じて利用できること、また保護者にも好評であることが示された。以上のことから、イングリッシュルームはALTの授業での配置とは異なる一定の効果を上げていると考えられる。今回は効果を教員評価で行っているが、利用者である児童生徒や、イングリッシュルームの講師を対象に調査を実施することも必要であろう。また、運営面の課題を軽減する方策の検討も必要であろう。これらは今後の課題である。

(文責 附属学校教育局国際教育推進室室長 飯田順子)

6. おわりに

まとめに代えて

附属学校国際教育推進委員会副委員長 小林美智子

年を重ねるごとに、各学校の国際教育活動が進化している。様々な機会を活用して、児童生徒が一人でも多く海外に出向き、貴重な経験が出来るようプログラムを展開している。

また、先生方も積極的に他国の教員や児童生徒と接し、異なる教育環境や教育方法に触れ、スキルを上げていることに敬意を払う。

現在、グローバルリーダーとかグローバル人材という言葉は今いたるところに氾濫している。内容といえば、「仕事で世界に通用するプロフェッショナルな人」「目的に向かって人々を動かす能力を持つ人」「異文化を理解ながら自己を主張できること」「多様性を理解し協働できること」「目的を意識してメンバーと共有してその人たちを巻き込みながら結果を出すこと」「決して語学堪能が第一条件ではありません。」などなどなど。

表現は様々だが、目指す本質は同じであるような気がする。

そのような中で私が注目したいのは「異文化コミュニケーション能力」である。今、世界が自国の利益を優先した主張を続けている。このバランスの欠いた社会の中で、いかにバランスよくコーディネートできるかが重要となるでしょう。そのためには、相手によってチャンネルを合わせる、すなわち「コミュニケーションスタイル」の使い分けにより、信頼関係を樹立させることが要求される事と思う。では、どのような教育をしたらその能力を身につけさせることができるのだろうか。これは一朝一夕に身に付くものではない。座学による知識はもちろんであるが、児童生徒の時から多様な人々との交流経験が、やがて強い能力となっていくものと信じている。

附属学校群の様々な取り組みは、その後の成長と共に大きな能力となって行くことであろう。

今年度は「イングリッシュルーム」の取り組みについての検証を行った。アンケートの回答には“積極的に英語でのコミュニケーションの機会を持つとする生徒にとって非常に効果的であった”また、“児童生徒が外国の文化に触れることに役立っている”という意見も目立っていた。日々の国際的経験が、他の学問と融合しグローバルなリーダーと成長していく姿が楽しみである。

(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校	光州松源初等学校	2016.10.11	2016.10.11～ 2019.10.10	教員同士の授業技術 の交流		
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒 の相互交流の意義とその 可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的 として結ばれた協定のなかで、北京師範 大学第二附属高校と筑波大学附属中・高 等学校及び附属駒場中・高等学校も付随 して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間 交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結 んだ際、附属高等学校も交流組織の一つ として参加した。
附属駒場中・ 高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	北京師範大学附属実 験中学との中等教育 分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学 との交流協定締結に協力した。
	台湾 台中市立中第一高級中 学	2015.12.11	2015.12.11～ 2020.12.10	研究発表（主に理系 分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校 間の提携を促進し、生徒 達の国際的な視野の拡大 を促進することを目的と する。	本年 4 月、相手校から姉妹校協定締結 の申し出あり、5 月 1 日に本校校長他 が訪問した際に詳細な打合せを行った。 5 月 27 日、相手校校長が来校し、詳 細事項を詰めた。
附属坂戸高等 学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属 コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1 ～2020.11.30	国際教育（教員間の 教育研究、生徒の協 力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが 2008 年に採択を受けた文部科学省 「国際協カイニシアティブ」教育協力拠 点形成事業に端を発する。その後トヨタ 財団「アジア隣人プログラム」の助成を 受けた活動や「アジア高校生聞き書きプ ログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育セ ンター	2013.3.19	2013.3.19 ～2018.3.18	国際教育・ESD（教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や 「アジア高校生聞き書きプログラム」等 でのインドネシアでの活動の際に協力を 得たことから交流が始まった。林業教育 センター・インドネシア林業省・在日イ ンドネシア大使館の強い要望を受け協定 締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第 6 高等 学校	2015.9.1	2015.9.1～ 2020.8.31	国際協働学習、 ESD、ユネスコス クール間の国際ネッ トワーク構築	生徒及び教師の異文化理 解及び国際的研究活動の ため	2012 年 5 月のインドネシアユネスコ 国内委員会との交流を契機として、毎年 本校と同委員会との交流を深めていっ た。2014 年ユネスコスクール関係者 他が来校し、パダン校から強い関心を示 され、2015 年本校教諭が訪問し準備 を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ル ーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～ 2021.10.31	国際教育（生徒の協 働学習活動とくに SGH および ESD での連携、生徒の相 互留学、教員間の教 育研究、研究大会で の発表）、科学教育 分野における共同研 究・国際インターン シップの開発	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施、英語に よる国際 FW プログラム の開発	2010 年の高校生国際 ESD シンポジ ウムでの交流から始まり、2016 年 には、学内プロジェクト「革新的な教育プ ロジェクト」で、本校の生徒を派遣、現 地で筑波大教員と合流し、IMAP (International multilevel academic program) を試行した。2016 年国際 ESD シンポジウムの際に連携協定書を 交わした。2017 年度から、本校の生 徒の留学が始まった。
	タイ カセサート大学附属高 等学校	2017.11.9	2017.11.9～ 2022.10.31	国際教育（生徒の協 働学習活動とくに SGH および ESD での連携、生徒の相 互留学、教員間の教 育研究、研究大会で の発表）、日本語教 育に関する共同研究	アセアン各国との SDGs ベースの国際交 流促進。日本語教育など を通じた高大連携の促 進。	2010 年の高校生国際 ESD シンポジ ウムでの交流から始まり、2015 年 には、学内プロジェクト「革新的な教育プ ロジェクト」で、本校の生徒、筑波大学 の大学院生を同時に派遣した。2017 年国際 ESD シンポジウムの際に連携協 定書を交わした。
	タイ カセサート大学附属高 等学校	2017.11.9	2017.11.9～ 2022.10.31	国際教育（生徒の協 働学習活動とくに SGH および ESD での連携、生徒の相 互留学、教員間の教 育研究、研究大会で の発表）、日本語教 育に関する共同研究	アセアン各国との SDGs ベースの国際交 流促進。日本語教育など を通じた高大連携の促 進。	2010 年の高校生国際 ESD シンポジ ウムでの交流から始まり、2015 年 には、学内プロジェクト「革新的な教育プ ロジェクト」で、本校の生徒、筑波大学 の大学院生を同時に派遣した。2017 年国際 ESD シンポジウムの際に連携協 定書を交わした。
附属聴覚 特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2015.12.1～ 2020.11.30	初等中等教育（特別 支援教育）における 生徒間交流	フランスと日本両国の友 好と親善を促進すると ともに、両国の聴覚障害 教育の発展に寄与する	1999 年頃、本校高等部専攻科生徒と パリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通 を開始した。 2002 年、パリ聾学校長から姉妹提携 の申し出があり、2003 年 9 月、パリ 聾学校にて、交流協定書を交わした。
	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1 2015.6.2	2015.6.1～ 2018.5.31 2015.6.2～ 2018.6.1	生徒間の学習活動の 交流、聴覚障害教育 および関連分野に関 する情報交換	両校は、特別支援教育と りわけ聴覚障害教育に関 わる教員交流・生徒交 流・情報交換を通して、 両国の文化について深く 学び合うとともに聴覚 障害教育関連の活動を推 進し、両国並びに両校の 発展に寄与する。	2008 年、筑波大学教員と本校校長他 が美術教育における ICT 教材の共同研 究をすすめるために訪問、その後、本校 中学部生徒との E-mail での交流活動 を行うなど交流協定の基盤を築き締結に 至った。

(2016 年 4 月～2017 年 3 月)

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日体験入学及び文化交流		2009 年 10 年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007 年、2008 年に SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH 事業として北京を訪問	SSH 事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は 1 ヶ月程度～1 年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する 5 つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESD およびその後継事業である GAP 活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	・高校生国際 ESD シンポジウムにおいて、教員間の交流を図る。 ・日本およびインドネシアのユネスコスクール活動や ESD に関する情報交換、教材研究を行う。	・高校生の国際交流。ESD に関するシンポジウムや SGH 研究大会における課題研究の成果発表と共有。 ・交流人数：派遣 5 人／年（最大）、受入れ 5 人／年（最大）	世界のユネスコスクール間の国際連携モデルをなるように両校の交流を進めていく。	インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生としてフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	・高校生国際 ESD シンポジウムにおいて、教員間の交流を図る。 ・英語教育の方法について研究交流を行う	・長期休業中、あるいは 1 年間、留学するプログラムを開発する。 ・日本訪問プログラム（科学分野のインターンシップ）を開発する		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	・高校生国際 ESD シンポジウムにおいて、教員間の交流を図る。 ・日本語教育の方法について研究交流を行う	・長期休業中、あるいは 1 年間、留学するプログラムを開発する。 ・日本訪問プログラム（日本語学習のインターンシップ）を開発する		
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立バリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属大塚 特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学 校	2009.12.29	2009.12.29 ～ 2014.12.28	知的障害教育の実 践・研究（指導法・ 教育課程・教材教具 等）	教員の交流、生徒の交 流、共同研究・研究交流 の推進、研究成果・研究 資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児 教育が既に交流協定を締結しており、本 学と同様の特別支援学校を有することか ら、学校間交流にまで協定を広げ、現場 での教育実践・研究の国際教育協力を推 進する必要があった。
	インドネシア共和国 チバガンティ特別支援 学校	2018.2.9	2018.2.9 ～ 2020.2.8	・教師間の授業研究 を通じた交流 ・知的障害教育およ び関連分野に関する 情報収集 ・生徒間の ICT ツ ール及びインターネット 通信を通じた交 流	教員の交流、生徒の交 流、共同研究・研究交流 の推進、研究成果・研究 資料の交換等	2016年にチバガンティ特別支援学校 の学校長が本校を視察した際、交流締結 に前向きであり、交流締結の可能性につ いて検討した。2017年11月には本 校より教員2名が同校を視察し、インド ネシア教育大学で日本の特別支援教育 について講演を行った。2017年2月 の本校の研究協議会にチバガンティ特別 支援学校の学校長と教員1名が参加 し、同日交流締結調印式を行い交流締結 の運びとなった。
附属桐が丘 特別支援学校	大韓民国 セロム学校 (旧三育再活学校)	2010.2.3	2015.2.13 ～ 2018.2.12 2018.2.13 ～ 2023.2.12	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・肢体不自由教育及 び関連分野に関する 情報交換	・日韓両国の肢体不自由 教育の充実と発展に寄与 するため。 ・国際教育の視点の一つ である日韓の相互理解と 親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に 挙げている国際教育拠点 事業の一層の充実を図る ため。	2007年・2008年、両校の研究部長 が双方で開催された研究会に出席し、そ れぞれ取組を発表。2008年度末、本 校の代表生徒1名を含む訪問団を同校 に派遣。2009年、校長ほか2名が同 校を訪問し、国際交流協定締結に向けた 事前調整を実施。同時にスカイプを使っ た交流授業を開始。2010年2月、再 び同校の校長、研究部長等を本校の研究 協議会に招聘し、開催前日に国際交流協 定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24 ～ 2021.11.23	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくなる ため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育 学校の校務顧問が来校し、国際交流協 定締結の可否について打診。これを受け 、同年11月に本校校長ほか3名が同校 を視察し、国際交流協定の締結の可否に ついて検討。2015年10月、同校校 長を含む訪問団が来校し、その際に 2016年の国際交流協定締結を約束す るに至った。
	台湾 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25 ～ 2021.11.24	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくなる ため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名 が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する 特殊教育学校である同校を視察。 2015年11月、本校副校長ほか2名 と代表生徒2名で同校を訪問し、国際 交流協定締結の可否について打診。その 際、2016年の国際交流協定締結につ いて内諾を得た。
附属久里浜 特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2011.8.29	2016.8 ～ 2021.8	・教員間の教育実践 研究 ・児童生徒間の教育 活動	・日中両国の自閉症児教 育の充実と発展に寄与す るため。 ・日中の相互理解と親善 を図る。	2009年5月、中国寧波市達敏学校校 長が本校を訪問し教育実践を視察の結 果、本校への教員派遣・研修の実施の希 望があり、3回にわたって教員研修の受 け入れを実施。2011年度、達敏学校 が全中国の特別支援学校の研究指定校と なり、国際的な研究会議や研究発表等の 実施を予定していたため、それに向けて 本校との姉妹校協定締結について申し出 があり、同年8月29日に協定書を交 わした。2016年8月に締結期間を5 年延長。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28 ～ 2019.9.27	・教員間の教育実践 研究	・日中間の文化交流を深 め、両国の特別支援教育 領域の促進を図るため。	2014年1月、副校長と小学部主事お よび幼稚園教諭の3名で中国江蘇省蘇 州工業園区仁愛学校の求めに応じ視察を 行った。その後、立命館大学に留学予定 のある教員が本校の実践研究協議会に参 加した。同校の校長や教員から、本校へ の教員派遣・研修の実施の要望があり、 2014年9月の2度目の視察の際に 日中自閉児教育研究会を同校にて実施す るとともに、本校との姉妹校協定締結を行 った。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が5校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他4校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールやHPなどを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭があり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系DC修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
チバガンディ特別支援学校は、インドネシアで最も歴史のある財団により1927年に設置された学校である。インドネシア内の学校研修に教員を派遣するなど、授業研究にも力を入れており、教育課程や指導の工夫等に関する情報交換は当校にとって極めて有益である。本交流事業を展開し、得られた成果を国内外に発信することは、当校の存在を全国にアピールする上でも、また当校の教育研究活動の内容を海外に広めるためにも効果的である。	両校の視察。授業研究会を通じた情報交換と意見交換。研究会への参加等。	・現在は特になし ・将来的には、インターネットTV電話を通じた交流等		
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010年、高等部3年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また2012年度の達敏学校を会場として行われた研究会に参加した。	2012年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。2017、2018年度と2回に分け、達敏学校の全教員の研修を受け入れた。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育的支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015年以降は、本校の公開授業の動画データなどを用いて、skypeによるケースカンファレンスや授業研究会などを定期的に行っている。	本校のきらきらコンサート、運動会などの催しをskypeにて配信し、児童間の交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

締結・更新の記録

年 度	学 校 名	新規／更新	相手校・機関
平成 21 (2009) 年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	//
	附属駒場中・高等学校	新規	//
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22 (2010) 年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23 (2011) 年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	//
	附属駒場中・高等学校	更新	//
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24 (2012) 年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26 (2014) 年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27 (2015) 年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（台湾）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	//	新規	国立バダン第 6 高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	//	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28 (2016) 年度	附属小学校	新規	光州松源書等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	//	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
	附属学校久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 29 (2017) 年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）

(資料) 報告書発行の記録

第1集 (2007～2008年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009年2月発行
第2集 (2009～2010年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011年7月発行
第3集 (2011年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012年3月発行
第4集 (2012年度) 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013年3月発行
第5集 (2013年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014年3月発行
第6集 (2014年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015年3月発行
第7集 (2015年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016年3月発行
第8集 (2016年度) 附属学校群の国際教育の推進	2017年3月発行
第9集 (2017年度) 附属学校群の国際教育の推進	2018年3月発行

平成 29 年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	澤田 晋	附属学校教育局教授
副委員長	小林 美智子	附属学校教育局教諭 教育長特命補佐
	宮本 信也	筑波大学副学長・附属学校教育局教育長
	松本 末男	附属学校教育局教授・教育局次長
	濱本 悟志	附属学校教育局教授・教育長補佐
	下山 直人	附属学校教育局教授、附属久里浜特別支援学校長
	飯田 順子	附属学校教育局准教授
	木村 範子	附属学校教育局講師
	本間 貴子	特別支援教育研究センター教諭
	鷺見 辰美	附属小学校
	升野 伸子	附属中学校
	塩飽 りさ	附属高等学校
	八宮 孝夫	附属駒場中・高等学校
	建元 喜寿	附属坂戸高等学校
	黒岩 聡	附属視覚特別支援学校
	石井 清一	附属聴覚特別支援学校
	厚谷 秀宏	附属大塚特別支援学校
	松田 幸裕	附属桐が丘特別支援学校
	西田 泉	附属久里浜特別支援学校